

# 思考動詞による文末表現の史的研究

渡邊 由貴

## 目次

序章 .....	5
1. 本論文の目的と構成 .....	5
2. 先行研究 .....	7
2. 1. 文末思考動詞のモダリティ性 .....	7
2. 2. 文末思考動詞の機能と用法の分類 .....	10
2. 3. 文末思考動詞のバリエーション .....	16
2. 4. 文末思考動詞周辺の史的研究 .....	19
3. 本論文における文末思考動詞の認定 .....	22
第1章 文末表現「と思ふ」の通時的展開 .....	27
1. はじめに .....	27
2. 各時代の文末表現「と思ふ」の使用状況 .....	27
2. 1. 中古文学作品 .....	27
2. 2. 中世文学作品 .....	31
2. 3. 近世文学作品 .....	34
2. 4. 近代文学作品 .....	37
3. おわりに .....	40
第2章 中世における文末表現「と思ふ」と「と存ず」 .....	44
1. はじめに .....	44
2. 資料と分析方法 .....	44
3. 中世における文末表現「と思ふ」と「と存ず」の使用状況 .....	45
3. 1. 上下関係による使用状況 .....	46
3. 2. 上下関係が明確でない用例について .....	49
3. 3. 『虎明本狂言集』の文末表現「と存ず」について .....	52
4. 中世における文末表現「と存ず」と「と思ふ」の用法上の相違 .....	54
5. おわりに .....	55
第3章 『虎明本狂言集』における「と+思ふ」と「と+存ず」 .....	57
1. はじめに .....	57
2. 「と+思ふ」と「と+存ず」の使用状況 .....	58
2. 1. 「と+思ふ」「と+存ず」の使用状況の概略 .....	58
2. 2. 「と+思ふ」のみを多用する話者・「と+存ず」のみを多用する話者 について .....	60
2. 3. 「と+思ふ」「と+存ず」両方を多用する話者について .....	66
2. 4. 名乗り・独白について .....	69
2. 5. 「と思ひ候」について .....	71

2. 6. その他の中世語資料との比較.....	75
3. おわりに.....	76
第4章 文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」の史的変遷.....	78
1. はじめに.....	78
2. 資料と分析方法.....	78
3. 中世以前における文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」.....	79
3. 1. 文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」のその内部.....	79
3. 2. 文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」の文体的特徴.....	82
3. 3. 中世以前の文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」のまとめ.....	83
4. 近世における文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」.....	84
5. 近代における文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」.....	87
6. おわりに.....	88
第5章 文末表現「と思ふ」の口語性—近代の論説文を中心に—.....	91
1. はじめに.....	91
2. 資料と分析方法.....	91
3. 各資料における出現状況.....	92
3. 1. 福沢諭吉.....	92
3. 2. 坪内逍遙.....	97
3. 3. 森鷗外.....	99
4. おわりに.....	104
第6章 洋学資料における文末思考動詞.....	106
1. はじめに.....	106
2. 各資料における出現状況.....	106
2. 1. 直訳物.....	106
2. 2. 会話書.....	109
2. 3. 文典.....	114
2. 4. 和英語林集成.....	116
3. おわりに.....	117
第7章 国定国語教科書における文末思考動詞.....	120
1. はじめに.....	120
2. 国定国語教科書における文末表現「と思ふ」「と存ず」.....	121
2. 1. 文末表現「と思ふ」「と存ず」の期別・トの内部別出現状況.....	121
2. 2. 文末表現「と思ふ」「と存ず」の提出段階.....	123
2. 3. 文末表現「と思ふ」「と存ず」が出現しやすい文体と場面.....	126
2. 4. 文末表現「と思ふ」「と存ず」の話手と聞手.....	129
3. その他の文末思考動詞について.....	133
4. 文末思考動詞の類似表現について.....	135

5. おわりに.....	137
第8章 帝国議会会議録における文末思考動詞 .....	140
1. はじめに.....	140
2. 資料と分析方法 .....	140
3. 帝国議会会議録における文末思考動詞.....	141
4. 各文末表現の特徴.....	142
4. 1. 文末表現「と思ふ」の特徴 .....	143
4. 2. 文末表現「と存ず」の特徴 .....	144
4. 3. 文末表現「と考へる」の特徴.....	146
4. 4. 文末表現「と信ず」の特徴 .....	148
4. 5. 文末表現「と認む」の特徴 .....	149
4. 6. その他.....	150
5. 現代の国会会議録との比較 .....	154
6. おわりに.....	156
第9章 文末思考動詞と推量の助動詞—「べし」を中心に—.....	158
1. はじめに.....	158
2. 推量の助動詞の体系の変化と文末表現「と思ふ」 .....	158
3. 近代以前の「記憶再生」の用例の検討.....	162
4. 助動詞「べし」と文末思考動詞の類似性 .....	164
5. おわりに.....	169
終章 .....	171
1. まとめ .....	171
2. 展望と今後の課題.....	176
参考文献.....	179
既発表論文との関係.....	183

## 序章

### 1. 本論文の目的と構成

本論文の目的は、文末表現「と思う」を中心とした文末思考動詞の諸相について、通時的に明らかにすることである。

現代日本語では、文末表現「と思う」をはじめとする文末思考動詞を使わずには、文章においても会話においても、自らの考えを述べるのが難しい。しかし、このような文末表現「と思う」の多用は古代からのことではないようである。「と思う」等の文末思考動詞は、どのような史的変遷を遂げてきたのだろうか。

これまで文末思考動詞の史的側面からの研究は十分になされているとはいえ、特に、近代以前の文末思考動詞については、どのような表現が用いられていたのかさえも明らかになっていない。

そこで、本論文では、主として中古から近代にかけての資料を用い、「と思う」を中心とした文末思考動詞の使用状況をみてゆき、それぞれの文末思考動詞の機能や性格を描くとともに、文末表現「と思う」が近代において一種の推量表現として用いられるようになっていった背景を探っていききたい。

具体的には、下記のことを明らかにしたい。

- ①文末表現「と思う」がどのような過程を経て、推量表現に準ずる用法を獲得していったのか。文末表現「と思う」が推量表現に準ずる用法を獲得し、定着させた時期や、どのような性格の資料において多くみられるか等について調査し、「と思う」による推量表現の発達過程を検討したい。
- ②文末表現「と思う」の、推量以外の用法の使用状況はどのようなものであったのか。例えば、意志や願望表現を内部にとる「と思う」は古くから用いられていたのか、どのような資料において多くみられるのか等について検討したい。
- ③「と思う」をはじめとする様々な思考動詞による文末表現が、それぞれどのような用法・性格を持っていたのか。また、それぞれの表現はどのような関係性をもって用いられていたのか。「と思う」以外にも、中世頃には「と存ず」「とおぼゆ」などの思考動詞による文末表現が多く用いられていた。また、近代になると、「と思われる」「と考える」等の表現も用いられるようになる。これらの表現と「と思う」とは、用法面・文体面・位相面等でどのような違いがあったのだろうか。あわせて、推量の助動詞と、思考動詞による文末表現との類似点・相違点についても検討したい。

本論文の構成は、下記の通りである。

#### 序章

第1章 文末表現「と思ふ」の通時的展開

第2章 中世における文末表現「と思ふ」と「と存ず」

第3章 『虎明本狂言集』における「と思ふ」と「と存ず」

第4章 文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」の史的変遷

第5章 文末表現「と思ふ」の口語性—近代の論説を中心に—

第6章 洋学資料における文末思考動詞

第7章 国定国語教科書における文末思考動詞

第8章 帝国議会会議録における文末思考動詞

第9章 文末思考動詞と推量の助動詞—「べし」を中心に—

#### 終章

まず序章では、以降の節において、現代語および古典語における文末思考動詞に関わる先行研究を確認しながら、文末思考動詞の認定や分類の基準を検討する。

第1章では、これをふまえて、文末表現の中でも最も多用される「と思ふ」の、中古から近代の文学作品における使用状況を概観する。

第2章から第4章では、推量表現に準ずる文末表現「と思ふ」が定着する以前、すなわち近世以前の文末思考動詞の使用状況を調査し、それらの文末思考動詞と文末表現「と思ふ」との差異および、近代に至るまでの使用状況を明らかにすることにより、文末表現「と思ふ」の発達の背景を探る。具体的には、近世以前に用いられた「と存ず」および「とおぼゆ」を「と思ふ」と比較、検討する。第2章では、中世における文末表現「と思ふ」と文末表現「と存ず」について、主として待遇面に注目して検討する。第3章では、文末表現に限定しない「と+思ふ」および「と+存ず」の形式を、『虎明本狂言集』のコーパスデータを用いて分析し、第2章で検討した結果と比較しながら、これらの表現の性格を吟味する。第4章では、中世から近代にかけての、文末表現「と思ふ」および文末表現「とおぼゆ」の使用状況を比較しながらその性格を明らかにし、推量表現に準ずる文末表現「と思ふ」が近代に発達した背景を探る。

第5章から第8章では、推量表現に準ずる文末表現「と思ふ」が発達した近代における文末思考動詞の状況をみていく。“文末表現「と思ふ」の発達”といっても、具体的にどのような資料・文体においてその発達がみられるのか、また、「と思ふ」以外の文末思考動詞の使用状況がいかなるものであるかについては明らかになっていない。そのため、様々な性格の資料における文末思考動詞を調査・検討することにより、その発達・定着の状況を明らかにしたい。第5章では、近代論説文における文末表現「と思ふ」について、その文体的傾向を検討する。第6

章では、洋学資料における文末思考動詞を検討し、近代における文末思考動詞の定着に、欧文脈の影響があったのか、あったとすればどのような形での影響であるかを検討する。第7章では、いわゆる「標準語」の確立に寄与したとされる、国定国語教科書という枠組みの中で、文末思考動詞がどのように用いられているか、また、その性格はどのようなものであるかをみることで、近代から現代にかけての文末思考動詞の変遷を探る。第8章では、帝国議会会議録における文末思考動詞の使用状況を確認し、近代における文末思考動詞のバリエーションについて論じる。

第9章では、古典語の助動詞の衰退と、文末思考動詞の発達との関連性を探る試みの一つとして、文末思考動詞と助動詞の「べし」との類似点を検討する。

なお、本論文においては、基本的には昭和20年以前<sup>1</sup>の資料における文末思考動詞の表記は、「と思ふ」「と存ず」のように歴史的仮名遣い・文語活用形で表記し、現代語および現代語を含めた超時代的な文脈においては現代仮名遣いで表記することとする。また、用例の表記は可能な限り調査対象の資料に従ったが、字体や記号等について、一部現代語の表記にあらためたところがある。なお、用例中の下線は、注記がない場合は筆者によるものである。

## 2. 先行研究

本節では、文末思考動詞に関わる先行研究を確認する。以下、文末思考動詞に関する先行研究を、「文末思考動詞のモダリティ性」「文末思考動詞の機能と用法の分類」「文末思考動詞のバリエーション」「文末思考動詞の史的研究」の4つの観点から整理する。

### 2. 1. 文末思考動詞のモダリティ性

「と思う」という形式に関しては、単に「思考する」という動詞としての意味だけでなく、話手の発話時の心的態度をあらわす一種のモダリティとしての機能を持ち、推量表現に近似することがあると指摘されている。

早くには三上（2002、ただし1959年執筆の博士論文を刊行したもの）が、引用動詞として「ト思ウ」の他「考エル」「信ジル」「見ル」「ワカル」「知ル」「認メル」「疑ウ」「心配スル」等をあげ、下記のように述べる。

だから、

---

<sup>1</sup> 第7章で扱う第六期国定国語教科書については、昭和22年から使用されたものであるが、同一章内での表記の統一のため、歴史的仮名遣いで示す。

私ハ、A wa B da ト思ウ。

は、ロオマ字の部分だけを残して、前後を削り捨てても差支えない。それでは確言的でありすぎれば、”A wa B dalô”ぐらいに遠慮すればよろしい。要するに、watasi wa と to omou はなければなくてもすむ、という性質のものである。もっとも、過去の omotta や打消の omowanai は削るわけにいかないし、思い手と話手とが別人の場合には、もちろん omou のどの活用形をも削ることはできない。思い手と話手とが同一人である場合の現在時についてだけ、次の公式が成り立つ。

～dalô。 = (私ハ) ～da to omou。

～desyô。 = (私ハ) ～da to omoimasu。 (p.210)

「モダリティ」という用語は用いていないものの、このように、「と思う」が推量の助動詞「だろう」に近似していることにふれている。

中右(1979)にも三上と同様の記述がみられる。中右(1979)は、「瞬間的現在にかかわる話者の思考作用は、定義上、モダリティである。」(p.228)とし、「わたしは、アンを正直だと omou。」の「omou」をモダリティ表現であるとしている。一方で、「私は、アンを正直だと omotteiru。」の「omotteiru」については、「発話者の思考作用(心的態度)を叙述してはいても、それが発話時と同時的な瞬間的現在のものではないので、命題表現の一部を成す。発話者が自らの思考作用を、いわば、距離をおいて捉えた客観的叙述表現であるからである。」(p.229)とし、モダリティ表現ではないとしている。

寺村(1984)も、「動詞述語の基本形が現在を表わす」ものとして、「思ウ」類の動詞(「思ウ」「考える」「信じる」「困る」「疑う」等)をあげ、これらの動詞が「基本形で言い切ったとき、その心的状態の主体が話し手自身」であるとし、下記のように述べる。

主体を第三者にして述語を基本形で言い切るとおかしい文ができる。過去形や～テイル形にすればその制約はなくなる。つまり、これらは、主観的な感情形容詞と同じく、基本形で発話時の話し手の気持を表わすのである。  
(pp.103-104)

また、『(…………ト) 思ウ』という動詞も、ダロウよりは客観的表現とはいえるものの、一般の動詞とは異なって、主観性が強い。それは、たとえば、以前に触れたことがあるように、文末で基本形で使われたときは常に話し手自身が『思ウ』ことを表わすというようなことにも現れている。」とも述べ、「太郎ハ敗ケルト思ウ」という文を「太郎ハ敗ケルダロウ」とほぼ等価である(p.228)としているのも、文末で基本形で用いられる「と思う」にモダリティ性を認めているのだと

考えてよいだろう。

高橋（2003）も、「思う」「考える」「信じる」「気になる」等の考えや思いを表す動詞について、寺村と同様、「非過去ではなし手のころのうごきをあらわす」点で感情形容詞と類似すると述べる（pp.92-93）。また、次のような例を検討しながら、動詞「思う」がモダリティ形式にふみこんだ用法をもっているとしている。

「おもう」という動詞は、「～したいと おもいます」というようなときは、あわせ述語をつくる補助動詞のようになっていて、「おもいます」というところだけと照応する主語「わたくしは」がはいりえないということがある。

・けれども、その まえに、われわれは、ここで、全員で ですね、ここで 黙禱を ささげたいと おもいます。

（水俣、患者さんとその世界）

また、「まさか あいつが そんな ことを するとは おもわなかった。」のように、推量形式なしに「まさか」と共存できる。「まさか」という陳述副詞は、「おもう」のような動詞でなければ、「まさか あいつが そんな ことを いわないだろう。」のように、うちけしと推量の両形式と呼応しなければならないのであるから、「おもう」が陳述形式をかねているといわなければならない。

このように、「おもう」は、モダリティの表現形式のなかにふみこんだ用法をもっている。そして、このことは、日本語だけでなく、たとえば、英語でも「I think」が陳述副詞化して「おそらく」の意味になるように、この種の動詞の宿命のようなものである。

「おもう」「感じる」などの動詞で、はなし手の現在のころのうごきをのべるとき、おもいながら「おもう」とのべ、感じながら「感じる」とのべる、つまり、ころのうごきをそのまま直接おもてにだしている。内言の外言化である。  
(p.93)

このように、思考動詞による文末表現がモダリティ性を持つことがあることには、「思う」等の思考動詞自体の性格も関係していると考えられる。

また、引用の観点からも、砂川（1988）、藤田（2000、2014）等が「と思う」の持つモダリティ性についてふれている。

砂川（1988）は、「～と思う」型の文にモダリティ性を認めている。具体的には、「～と思う」型の文について、典型的な引用文と異なり、「引用動詞の主格補語が常に話し手（質問文の場合は聞き手）に限られている」（p.79）点から、「多分にムードの助動詞的な用法に近付いている」（p.80）とし、これを「引用句に表された命題内容に対する話し手の確信の度合いをやわらげるという役割」を果たしたり、「直接的な希望の表現を避けて、自分の希望を控え目に表現するという配

慮」として働いたりする「婉曲」のムードであるとしている (p.81)。ただし、「～と思う」型は、「～と見える」型の文と比較すると、完全にモダリティ形式化したわけではないとも述べている。「～と思う」型の文には、「と思います」「と考えます」「信じます」のような表現があり、「命題内容に対して、単に話し手の心的なかかわりかたを述べるだけでなく、その命題内容に表されたことがらが話し手のどのようなタイプの思考行為に属するものであるのか、という点をも明らかにしている」点で、「命題内容の一部をなしている」と考えられるため、「ムード助動詞化しているとはいえ、本動詞としての語義を完全に失いきってはならず、そのため、典型的な引用文を構成する引用動詞と同じように、命題内容の一部をなす要素として文構成にあずかっている」(p.83) としている。

これに対し藤田 (2014) は、砂川のいう「～と思う」型について、「その『場』でのリアルタイムの考えの表明と見られる」(p.202) とし、「場」が二重であるとは言い難い「今、私は、現時点での失敗は明らかだと思います。」(下線は原文ママ) という例をあげ、次のように述べる。

そして、そもそも統語的な引用表現は、所与のものを再現する形で示す異質の表意様式によるコトバ (記号) を組み込んだものであることに本質があった。とすれば、「～ト」にひかれるコトバが所与性を失っている「～と思う」型の表現は、もはや引用表現としての本質を失ったものと言わざるを得ない。「～ト」内に所与性が認められなくなって、引用表現から、「場」がもはや一重でしかない通常の文の世界へ踏み出したと言ってもいい。その点で、所与のコトバ (の再現と見なされるもの) を組み込んで、「場の二重性」が認められる一般の引用構文と、「～と思う」型とは、まず、はっきりと区別されなければならない。(p.203)

文末表現「～と思う」は、発話時現在の思考を述べる表現である。そのため、「～と思う」は、思考を「再現」している引用表現であるとは言い難い。本論文でも、文末表現「～と思う」は、引用の「ト」をとる形式ではあるものの、引用表現とは一線を画し、一種のモダリティ表現として用いられていると認めてよいと考える。

## 2. 2. 文末思考動詞の機能と用法の分類

前節でみたように、「～と思う」をはじめとする文末思考動詞は、一人称主語・文末・スル形という条件においてモダリティ表現となることがあるのであるが、さらに踏み込み、このような文末思考動詞の機能や用法の分類を論じているのが森山 (1992)、Yokomizo (1998)、宮崎 (1999、2001) 等である。基本的には、い

ずれの研究においても文末思考動詞のト内部の情報を元に、その用法を分類している。

森山（1992）では、「と思う」の機能を「個人情報を表示」とし、文末思考動詞「と思う」の用法を大きく二つに分類する。一つは客観的情報に付加される「と思う」の用法<不確実表示用法>であり、もう一つは主観的情報に付加される「と思う」の用法<主観明示用法>である（以下、（1）～（8）の用例は森山 1992 から引用）。

一つめの<不確実表示用法>としては、以下のような例文を挙げている（p.106）。

- （1）「あいつ、大学、来てるかな。」「はあ、来てると思います。」
- （2）「先方は三時にくると思います。」

もう一つの<主観明示用法>として、以下のような例文を挙げている。これらの文は、「と思う」の有無に関わりなく、個人的な意見を述べていることになっている（p.110）。

- （3）日本の今の医療制度は間違っていると思う。
- （4）戦後の正しい教育を受けた若者に正しい判断をしてもらわねばならないと思います。

次のような、既に推量の形式がある文の場合も、（3）（4）同様、「と思う」が不確実を表すわけではないとしている。その理由として、不確実なこととしての把握を表す形式「ハズガナイ」「ダロウ」があらかじめ存在するので、そこに同種の不確実を表す形式が重出することは考えにくいためであると述べている（p.110）。

- （5）これだけ美味しい物が、スターになれないはずがないと思う。
- （6）稲作農耕文化が定着した以後に春・秋が代表的季節語となったのだろうとおもいます。

また、次のような希望の形式も、不確実を表示するわけではなく、個人的な意見・主張であることを断り、そうすることによって、主張を和らげる機能を有しているとのべている（pp.110-111）。

- （7）乾杯したいと思います。
- （8）どうか今後も末永く、ご主人とともに当店の商品テストを続けていただ

きたいと思います。

ただし、＜主観明示用法＞と＜不確実表示用法＞との判別のためには、「と思う」内部の情報内容が主観的情報であるか、客観的情報であるかを判断する必要があるが、これを形式面のみからは決定し難い例もある。この点に関して、森山(1992)は、「特に何をもって主観的な判断(意見)を表す述語と認定するかという問題は、語用論的な観点から考える必要がある。」とし、「と思う」の付加によって知的な意味の違いが生じるか否かにより判断が可能であるとしている (p.111-112)。

いずれにせよ、森山(1992)により、単に文末思考動詞にモダリティ性があるというだけでなく、「と思う」の内部の情報によりその用法が異なることが明らかになった。その後の文末思考動詞に関する様々な研究は、森山(1992)が土台となっているといえる。

また、森山(1992)では、「ダロウ」と「と思う」の差異について、以下のよう

(略)、推量形式の文とは、本来話し手が真偽の確認をすることができないような内容(仮に遠隔情報と呼ぶ)について、話し手が一つの事態を想定するという意味になっていると言える。

一方、「と思う」は、その形式の通り、話し手の思考内容として物事を述べるのであり、話し手自身が本来わからないものとしてとらえているのではないという違いがある。むしろ、独断として話し手なりの認識を表すのである。ただし、そこで伝達される内容が、事実としての情報であれば、「と思う」が付加されることによって、事実扱いできる情報ではなくなることになる。話し手の個人的な認識を表すことになり、それによって無条件で事実を伝えることにならないからである。「と思う」が不確実なことを表すという機構は、以上のように説明できると思われる。

従って、話し手が直接確認できたようなことであって、かつ、確実なこととして断定しがたいこと(たとえば、記憶が不確かな場合など)であれば、「だろう」などの推量の形式を使って表現することができず、その代わりに、「と思う」しか使えないことになる。(p.108)

「と思う」と推量の助動詞との類似性はしばしば指摘されるが、このように不確かな記憶について述べるができるという点で、「と思う」の方が使用範囲が広いといえる。

Yokomizo(1998)は「と思う」の思考埋め込み節を、Believing(例:Jon ga hannin da.)、Wanting(例:Fukuoka e kaeritai.)、Feeling(例:Ureshii.)の3タイプに分ける。「と思う」の基本的な機能を“to decrease the speaker’s

either commitment to or involvement in the propositional contents”とした上で、“commitment”であるか“involvement”であるかは上記の3つの埋め込み節のいずれであるかによるとしている。

I here argue that the fundamental function of ~to omou/omotte iru is “to decrease the speaker’s either commitment to or involvement in the propositional contents,” and that the selection between “commitment” or “involvement” is determined by the representational mode of proposition.  
(p.171)

具体的には、「と思う」の機能は、Believing タイプにおいては命題内容に対する話者のコミットメントの度合いを減少させること、Wanting タイプと Feeling タイプにおいては命題内容に対する話者の情意的関わりを減少させることであるとしている。

Yokomizo (1998) には、「だろうと思う」のような「推量+と思う」の形式の例はあがっていないが、Believing タイプに基づく”Mind-to-world direction of fit” の例として、“feeling certain, having a hunch, supposing, and many other degrees of conviction” (p.174) があがっていることから、「推量+と思う」は Believing タイプと位置づけられているのだと推測される。すなわち、「と思う」の機能という面で、「~だろうと思う」と「~たいと思う」とをわけていることになる。一方、先にみた森山 (1992) は、「だろうと思う」の形の「と思う」を、「~たいと思う」と同じく主観明示用法>としており、これは両者の最も大きく異なる点の一つであろう。

宮崎 (1999) では、「~と思う」の引用節について、「聞き手めあてのモダリティ要素を含まないが、単なる命題でもなく、有標的な形式の有無に関わらず、必ず、事柄めあてのモダリティ要素を含んでいる」(p.3) とした上で、「スルと思う」「Nダと思う」等の形式における、「と思う」の有無による意味の違いを述べる。これらの形式については、『と思う』は、確実なこと从不確実なことへと意味を変えるために付加するのではなく、『スル』や『Nダ』という形態が<断定>のヴァリエーションとして担いうる二つの意味(『スル』なら<予定>と<予断>、『Nダ』なら<事実認定>と<真偽判断>)のうち、そのいずれが当該文において実現しているかを明示している」(p.6) としている。

また、宮崎 (1999) は、「と思う」と「ダロウ」の違いについても述べている。『と思う』はそれ自体は思考内容の構成要素ではなく、引用節の内容が話し手の思考であることを外側から注釈する表現であるが、一方、『ダロウ』は、それ自体が思考内容の構成要素」(p.9) であるとし、さらに、これが仁田 (1991) 等で指摘されている、「~と思う」が独り言としては用いることができないこととも関わ

っていると述べている。また、表出文における「と思う」の付加は、発話・伝達  
のモダリティを<表出>から<述べ立て>へと変更する操作であるとしている  
(p.11)。

さらに宮崎 (2001) では、『『思う』がスル形式をとった場合のモーダルな意味  
の基本』については、「<態度表明性>にある」(p.113)としている。そして、そ  
の引用文を<評価的態度を表す文><認識的態度を表す文><行為志向的態度を  
表す文>にわけ、それぞれについて記述的に説明している (pp.113-122)。

具体的にみていくと、まず一つ目の<評価的態度を表す文>について、評価的  
態度を表す文には、もともと<態度表明性>があり、「ト思う」の働きは、その明  
示化といったものにとどまるとしている。(以下 (9) ~ (19) は宮崎 2001 の例  
を引用。下線は原文ママ)

(9) 読んだら、すぐ焼け、なんて、女は身勝手だと思う。

(10) ドイツでの成果を調べ、その国産化をはかるべきだと思う。

次に、二つ目の<認識的態度を表す文>について、宮崎 (2001) は、事実確認  
的なムードを持つ文等において「ト思う」の付加に制限があり、また、一部で、  
認識的なムードを指定する働きが認められるとしている。そして、(11) のよう  
な判断形成途上を表す疑問文に「と思う」が付加できることも述べている。

(11) その頃、山下塾の如き私塾は、外にも相当あったのではないかと思う。

また、「～ダロウ」「～カモシレナイ」「～ニチガイナイ」等の判定性のモダリテ  
ィ形式をもつ文には、随意に「ト思う」を付加でき、付加した場合の意味の変化  
はほとんどないか、<態度表明性>が明示・強調されるかであるとしている。

なお、宮崎 (2001) は、

(12) たぶん、ホステスになってると思う。

(13) ホステスになってると思う。

の二文を比較し、(12) のように、引用文中に確信度をあらわす副詞 (ここでは、  
副詞「たぶん」) が共起している場合は、「と思う」は<態度表明性>を明示して  
いること、(13a) のように、そうした副詞がない場合は、「ト思う」を外すと、

(13a) ホステスになってる。

となり、この文での「ト思う」は、<態度表明性>に加えて、<推測>といった

認識的態度も表していることを述べ、「ト思ウ」が「ダロウ」に近似するのはこうした場合であることを指摘している。

さらに、過去形に接続する「ト思ウ」に特徴的なモーダルな意味として、＜記憶再生＞を認め、下記のような例では「ト思ウ」を「ダロウ」に置き換えることができず、これは＜推測＞とは異なるものであるとしている。これは前掲の森山（1992, p.108）の記述とも一致するものである。

(14) たぶん、一月二十一日の朝だったと思います。

(15) 「確か、そう、盗癖だったと思います。」

さらに、シタ形式であっても、下記のように評価的態度の存する文では、「ト思ウ」は付加的であり、＜態度表明性＞の強調といった働きにとどまるとしている。

(16) (略)、まったくかわいそうなことをしたと思います。

また、三つ目の＜行為志向的態度を表す文＞についても、(17)(18)のような行為志向的態度を＜表出＞する文のタイプと、(19)のような行為志向的態度を＜表明＞する文のタイプとにわけ、詳細に説明している (pp.117-122)。

(17) 飯森の実家に行って、墓地に埋めてやろうと思います。

(18) 一応、歩く基礎はできましたから、今度は冬山に入ろうと思います。

(19) 次は黒田君に『霊視』をやらしてもらおうと思います。

「シヨウト思ウ」は、＜事前の意思決定＞を聞き手に向けて＜表明＞するといったタイプの意志表現として、＜発話行為時における意思決定＞を表す「シヨウト思ウ」と対立する機能を有していると考えられる (p.120) としている。また、「シタイト思ウ」については、＜表明＞されている行為志向的態度のタイプとして、「僕はその意識を持ちたいと思う。」のように＜望ましい事態の実現＞が志向されているものと、「第一回の幹部会議を開きたいと思います。」のように＜予定的行為の遂行＞が志向されているものとがあるとし、後者は「ト思ウ」を外すことができないこと等を述べている (pp.120-122)。このように、宮崎 (2001) により「と思う」の機能について詳細な記述がなされている。

小野 (2005) は、これらの先行研究を受け、仁田 (1991) による発話・伝達のモダリティの分類のうち、『意志・希望』や『願望』は『ト思ウ』で述べることができる。また、『ト思ウ』と共起はできるが、そのために文機能が変わる場合があり、『現象描写文』や『判断文』に『ト思ウ』がつくと、断定できない判断不可

能なもの、あるいは未判断となる。この分析から『ト思う』の用法には、『意志・希望』や『願望』などの主観性に関わるものと、事態への判断に関わるものがあると考えられる。後者の用法は、森山が指摘する不確実用法に相当する。」(pp.137-138)と整理している。

さらに、小野(2001、2005)は、「と思う」をコミュニケーションの側面から分析している。文によっては「ト思う」が統語的には必須要素ではないことから、「ト思う」には思考、判断以外の機能があるとし、下記のように述べている。

「ト思う」には、聞き手領域を述べるような、話し手にとって不確実という断定するに足りない知識状態(以下マイナス知識とする)を表明する機能があり、これが思考動詞としての認識レベルの側面である。この機能をコミュニケーションレベルでとらえなおすと、話し手がマイナス知識を示すことで、聞き手に積極的に同様の思考を求めたり、あるいは、聞き手に思考・判断を求めるといふ、聞き手の持つ知識への働きかけが観察され、この働きかけがコミュニケーションにおける「ト思う」述語文の原理であると考えられる。(小野2001, pp.26-27)

このように、「と思う」については、話手の事態への認識という面のみならず、聞き手への配慮表現としての側面にも留意する必要がある。

また、小野(2005)も「だろう」より「と思う」の方が用法が広く、「だろう」で許容される用法では、「と思う」でも許容されるという包摂関係を、森山(1992)の論を整理しながら述べている。例えば、「と思う」は、忘却した知識の再生等、「話し手が直接確認できたようなことであっても、確実なこととして断定しがたい(記憶が不確実な場合など)」場合の表現において、「だろう」とは異なると述べる。また、伝達レベルでの話し手の態度という観点では、「ト思う」は原理として聞き手の知識に話しかけるものであり、話し手のものとは異なる聞き手の意見や主張があることを前提とするか、許容するのに対し、「だろう」形式ではそうした伝え方の態度は持っていないことを示している(pp.203-217等)。

この他にも、「と思う」を中心とした現代日本語の文末思考動詞の機能や用法等については、ここで挙げた論をふまえた数多くの研究がなされており、既に分析・記述の緻密化の段階に入っているといえる(徐(1999)、劉・吉田(2005)、曾(2009)等)。

### 2. 3. 文末思考動詞のバリエーション

文末思考動詞には、「と思う」の他にも「と思われる」「と考える」等、様々なバリエーションがある。

吉田（1971）は助動詞のかわりに「と思う」「気がする」「に違いない」等の表現を用いることについて、「単なる代償ではなくて、この方が叙述が的確で、意味色彩（ニュアンス）を豊かに出すことができる。そのような利点から、表現の軽微に感じられる辞だけに依存せずに、詞の連合によって辞の職能を負わせる傾向があるのである。」（p.63）としている。

また、仁田（1991）では、判断のモダリティ形式に繋がっていく表現形式の例として、「ト思ワレル」「ト思エル」「ト考エル」「ト考エラレル」「ト判断サレル」「ト想像サレル」「ト予想サレル」「ト感ジル」「ト見エル」「ト見ラレル」（pp.65-66）をあげ、これらの表現は「判断のモダリティ近似形式へとずれ込んでいったものである」（p.67）としている。

加藤（1997a）は、「と」をとる動詞として、「思う」「考える」「判断する」「分かる」「疑う」「望む」等をあげ、これらの語が「と」の内部にとる語の種類を整理している。さらに加藤（1997b）では、「考える」はその示す内容が論理的な内容に限られるため、「と思う」とは自然に共起する「だろう」「そうだ（予想）」「らしい」の容認度が、「と考える」では落ちるとしている（p.91, p.96）。

高橋（2009）は、「と考える」や「と信じる」の形式をあげ、『『と思う』は単に<主体内部に生じた内容を><意識する>という語義的特徴の希薄さゆえに、（より豊かな意味特徴を有する『考える』や『信じる』に比べ）特別な含意を伴うことなく話し手の意見を表明することができる」（pp.171-172）とし、「引用成分に関する制約が少ないため、他の思考動詞よりも使用域が広い」（p.172）とも述べている。

このように、「と思う」は他の思考動詞による文末表現と比べ、語義的にニュートラルであり、かつ、使用頻度の面からも中心的なものであると見てよいだろう。

これらの文末思考動詞については、語用論的な観点、特に述べ方の客観性についての研究が多くなされ、文末思考動詞が多く用いられる、学術論文をはじめとする論理的な文章における使用状況を調査した研究も多い。このような研究には、浅野（1996）、杉田（1997）、内田（2002）、内田（2008）、升岡（2008）、志波（2009）等がある<sup>2</sup>。

浅野（1996）は、「と思われる」と「(it) seems」とを分析し、『『と思われる』には発言を緩和する働きや、客観性を暗示したり、責任を回避したりする働きがある』（p.45）と述べる。

杉田（1997）は「と思う」「と思われる」「と考える」「と考えられる」について、歴史学の専門誌『史学雑誌』に掲載された論文の序論部分を調査し、「と思う」は「研究目的やテーマ設定の理由など書き手自身の意見、判断がストレートに示

---

<sup>2</sup> ただし、ここにあげた研究は、その対象を文末思考動詞に限定していないものもある。

される」こと、「と思われる」では、「思考の主体としての書き手の存在感は薄められる半面、読み手を書き手の思いに巻き込む効果が生まれる」(p.108)ことを述べる。また、「と考える」には「他説の存在には無関心に、書き手が自身の判断・認識を主張するというニュアンス」があり、「と考えられる」は、「史料などの客観的データに照らして推測できる、判断できるという意を表す場合に用いられる傾向にある」(p.109)としている。

また、内田(2002)は、論説文において「と思われる」「と考えられる」等の断定を保留した表現が使われる場合は、「事実と意見を明確に分けるという、極めて合理的な機能を有していると言える」(p.39)としている。

内田(2008)は、「と思う」や「と考える」等の表現の機能やその使い分けについて検討し、『～と思う』に比べて『～と考える』は著しく狭い機能しかない」とし、「聞き手・読み手への配慮」「不確実な事態への推し量り」「記憶が不確かなことの表示」の機能が存在しないか不完全であるとしている(pp.41-42)。また、「と思う」「と考える」の形式と、それらの可能・自発の形式である「と思われる」「と考えられる」の使い分けについて、「表現者が自分の意見をメッセージとして伝えたい立場をとるときには『と思う』『と考える』が使われ、観察者の立場として対象に対して思考を重ねて自然と導きだした意見を述べる立場のときには『と思われる』『と考えられる』が使われる」(p.44)とした上で、学術雑誌『日本語教育』におけるこれらの表現の出現状況を調査している。

升岡(2008)は、「筆者の思考や意見を表す表現」として、「ハズダ」「ダロウ」のようなモダリティ表現の他、「と思う」「と思われる」「と考えられる」「と判断される」等の形式をあげ、複数の学術雑誌においてこれらの表現がどのように用いられているかを調査している。そして、『ダロウ』や『トと思われる』は証拠性・根拠性が低い考察や意見に使われ、『ト考えられる』『ト推○類』は証拠性や根拠性が高い考察や意見に使われるということになる。『トいえる』は『トと思われる』より根拠性が高い場合に使っているようだ。(p.25)と結論付けている。

また、志波(2009)は、「と思われる」「と考えられる」等を含めた認識動詞が要素となる非情主語受身文を調査し、評論文テキストと報道文テキストにおける使用の割合を調査している。

須田(2010)も、引用節をともなう「考える」について、『考える』は、一般的に、論理的なコンテキストにおいて使用され、論理的な思考の過程と、その結果を表す。そして、その思考過程を説明的に述べているため、『考える』は、思考の内容を提示する『思う』に比べると、会話文における非過去形の使用が少なく、小説の地の文などにおいて過去形で使用されることが多いということになる」(p.160)と述べる。

このように、「と思う」を中心に、「と思われる」「と考える」等の文末思考動詞が存在し、それぞれ重なる部分はあるが、述べ方のニュアンスや文体等によって

使い分けられていることが示されていることが、これまでの研究で明らかになっている。

## 2. 4. 文末思考動詞周辺の史的研究

これまでみてきたように、現代語における文末思考動詞については多くの研究がなされてきているが、その史的研究はほぼなされていないといえる。

北原(1982)は、現代語においては、推量の助動詞のかわりに「と思う」のような思考動詞による表現が用いられることについてふれている。ただし、その具体的な発達過程については述べられていない。

表現の変遷ということを考えるとき、平安時代の助動詞一語による表現が、どういう過程を経て現在のような表現になったのか、もう少し詳しくいうと、平安時代の推量の助動詞がどのようにして消滅し、現代語のような表現がいかにして発生し成立したかということについて、その実態を具体的に解明しなければならないのだが、残念ながら調査研究がそこまでしていない。ただ、興味深いことは、一語による総合的な表現が、いくつかの語を重ね用いる分析的な表現になっているという事実である。そして、平安時代の推量表現が助動詞による主体的表現であるのに対して(ただし、すべてが主体的表現であるわけではなく、この点は細かく見ると問題である)、現代語の場合、客体的表現によるところが多いということである。補助動詞や形式名詞は客体的表現であるし、「だろう」というかわりに「…と推察する」「…と想像する」「…と思う」というような表現がよく用いられる。(p.151)

高山(2002)は、中古語の判断のモダリティとして推量の助動詞の例をあげた後、下記のように述べている。

中古語で、<判断のモダリティ>に関わる表現形式は他にもある。終助詞、叙法副詞、認識動詞(「見る」「見ゆ」)などである。キ、ケリ、ツ、ヌ、という、テンス・アスペクト形式、述語用言の終止形、～ト見ル、～ト思フのような動詞形式、モゾ、モコソ、モヤなどの複合係助詞もある。(p.13)

このように、高山(2002)では、「と思ふ」の具体的な用例は挙げられていないものの、トを伴う思考動詞を中古語のモダリティとして想定している。

ただし、そもそも現代語以外の文章における文末思考動詞に、現代語と同様にモダリティ性を認めてよいのかについても検討の余地がある。例えば、鈴木(2009)が、古代語における動詞「思ふ」について、源氏物語の例をあげ、連語

「もの思ふ」等にもみられるように、「恒常的に持続する態度の意味に接近することがある」(p.203) としているように、中古語における動詞の終止形のテンス・アスペクトが現代語のそれとは異なることも多い。

しかし、文末表現に限った研究ではないものの、古典語における思考動詞のモダリティ性を示唆するものとして、大木(1997)等の論がある。大木(1997)は、古代日本語において、動詞の終止法は「基本的には<現在>の状態(動作の進行/結果の状態)を示すというのがおおかたの見方である」(p.26)とし、鈴木(1992)等をあげながら、必ずしもそれに合致しない例として、「思ふ」「おぼゆ」等の動詞をあげる。そして、「これらの文を発することがすなわちそのまま話し手の新たな心理状態が成立したことを表明することになるものである」と述べ、「構文的特徴として、多く引用を示す『と』にこれらの動詞が、係助詞を介する場合も含めて、下接する形になっている。」(p.32)としている。

また、先にあげた鈴木(2009)も、動詞「思ふ」が「恒常的に持続する態度の意味に接近することがある」(p.203) ことにふれる一方で、「思考・認識活動を表わす『思ふ』のはだかの形は、一人称でのべたて、または二人称のたずねという条件のもとでは、直接的な、そのときだけで終わる一時的な思考活動のなかにあることを表わしている」(p.202) と述べる。

このように、中古語においても「ト+思考動詞」の形で発話時の心理状態・思考内容を述べる例があるといわれている。しかし、具体的にどのような表現がどのような意味のモダリティ表現として用いられているかは明らかにされていない。これらの表現にどのような用法があるのか、現代語のように「と思う」が推量表現に準じた用いられ方をしているのか等についても探る必要がある。

トをともなう思考動詞を史的観点から扱った研究としては、同じく文末表現・モダリティ表現としての思考動詞に焦点を当てた研究ではないものの、下記のようなものがある。

まず、中古資料におけるトをとる思考動詞の研究として、三宅(1996)は、『源氏物語』における「～らむと思ふ」(特に「思ふらむと思ふ」)の形式について考察している<sup>3</sup>。

また、中世語資料におけるトをとる思考動詞の研究として、穂田(1975)、村上(1993)、李(2006)、岩下(2002)等がある。

穂田(1975)は、狂言や軍記物語を資料とし、待遇表現や、荘重性を持つ表現としての動詞「存ず」について述べている。穂田の他にも『虎明本狂言集』における「と思ふ」類の表現を扱った先行研究として、村上(1993)や李(2006)がある。村上(1993)は、定型性の強い一曲の発端部における「ばや」(「ばやと存ずる」)に注目し、狂言の構成や類の面から整理したものである。また李(2006)

---

<sup>3</sup> ただし、これは「らむ」の用法に主眼をおいた研究である

は、特に名乗りの場面で多用される推量・意志の助動詞「ウ」と「ウと思う」（「ウと存ずる」）との間の、意味的・機能的相違に焦点を当てたものである。

岩下（2002）は「存ず」についての語誌的研究であり、『天草本平家物語』における「うと存ずる」の形式について、「これらは、助動詞『う』で終る文を『と』で受ける形が基本であり、意志表明の一つの決った言い方ととれる。」（p.60）という指摘がある。また、「それがし少将も同罪でござらうと存ずる。」（下線は原文ママ）のような「理解する」「判断する」という意味の「存ず」についても用例があがっている（pp.62-63）。文末思考動詞という観点ではないものの、トを伴う思考動詞を定型的な表現として扱っている点は注目される。

小林（1977）は「ベシトモ覚エズ」の形式の研究であり、『ベシ』によって一旦終止した文（相当句）を『ト』で受け、『覚ユ』『思フ』『見ユ』などの知覚・認識に関する動詞を否定することによって、「否定推量」を表現するものとなっている（p.30）としている点が注目される。すなわち、思考や知覚に関わる「おぼゆ」「思ふ」のような動詞は史的にも推量表現との関わりがあることが示唆されているといつてよい。

吉田（1971）は、「だろろうと思う」の形式について、近代文学作品の用例をあげながら、下記のように言及している。

会話においては前の人のことばを承けて「そうだろろうね」とか、「だろろうと思うんです」とかいう言い方も多く、何れも肯定的推量判断を示す。「だろろう」が「と思う」の意であることは、「だろろう」の次に「と思う」を続けたり、並列したりして使われることから推定される。「と思う」は「だろろう」を包むところのもので、一つの辞の転換であり、言い替えであり、強調表現である。

（中略）

「…だろろう」を「と思う」の引用形で受けるのは、「だろろう」で統括した判断をもう一度別の表現で明確にするものである。分析的に言えば「だ」は「と」、「ろろう」は「思う」にそれぞれ相当する。最後の例（引用者注：「大体、画の仕事の上で、水谷先生を怖がるような君でも無いだろろうし、怖がる必要も無いと思うがなあ。（三好十郎『浮標』）」は、「だろろう」と「と思う」とが並列して使われているもの。一方は辞であり他方は詞ではあるが、同じ意味で、交互におきかえられるところからしても、「だろろう」の転換が「と思う」であると解釈できるのである。（pp.352-353, 下線は原文ママ）

「だろろうと思う」の形式における「と思う」については、森山（1992）では主観明示の用法であると述べられていたが、吉田は「言い替え」「強調表現」であると位置づけている。

このように、トを伴う思考動詞の用いられ方についての史的研究は助動詞等と

の関わりから見通しが示されることがあるものの、文末思考動詞という枠組みでの研究はなされておらず、「と思う」と、その類義表現と考えられる「と存ず」「とおぼゆ」等の表現との関わりも検討されていない。また、現代語の文末思考動詞で多くみられる、推量的な用法については、史的研究の中ではほぼふれられていない。当然、その発達過程については明らかにされているとは言い難い状況である。

### 3. 本論文における文末思考動詞の認定

これまで、文末思考動詞に関する先行研究を整理してきたが、これらをふまえ、本論文において文末思考動詞をどのように認定すべきか検討したい。

先行研究で述べられている通り、大きくわけて「と思う」は、トの内部の情報によって、「と思う」が推量表現に準じた機能を持つ場合と、推量表現の機能を持たず、単に個人的な意見・主張であることを示す場合とがある。これをふまえると、「と思う」の使用状況を把握するにあたっては、その機能別にわけること、つまり、トの内部の情報別に検討することが重要になる。しかし、例えば、「と思う」内部の情報内容が、主観的情報であるか、客観的情報であるかについて、形式面から決定することは難しい場合もあり、特に古典語においての判別は、現代語以上に困難であると考えられる。そこで、「と思う」のトの内部をその形態によって、A類（意志・願望表現）、B類（推量・疑問表現）、C類（判断・叙述表現等）の3つに分類し、それぞれの文を分析する。

以下に、『週刊エコノミスト』および『NNA：アジア&EU国際情報』にあらわれた各類の例をあげる（なお、用例の検索はJapanKnowledge Lib (<http://japanknowledge.com/library/>) によった）。

#### A類：意志・願望表現

- (20) いま「地政学リスク」が言われるなか、地理的な基礎知識は一層大切になってきた。ヒマな時だけでなく、見る時間を増やそうと思う。（"編集後記 平野純一／横田恵美" 週刊エコノミスト 2014年08月26日号 第92巻 第36号 通巻4358号）
- (21) ハートをモチーフにしたり、履く人の心が温まるようなデザインの靴を作ってみたいと思います。（"ワイドインタビュー問答有用 / 5 1 9 歩きやすいハイヒールを追求＝矢口昇・靴職人" 週刊エコノミスト 2014年10月28日号 第92巻 第46号 通巻4368号）

#### B類：推量・疑問表現

- (22) 「憲法改正については、国民的な議論と理解の深まりが必要であろうと

思う。憲法調査会において、さらに議論が深まっていくことを期待したい」。(「東奔政走 ざわめき始めた憲法改正の空気 「戦後レジームからの脱却」の行方＝前田浩智」 週刊エコノミスト 2015年02月24日号 第93巻 第8号 通巻4385号)

- (23) この本をきっかけに格差是正が叫ばれているが、格差がそんなに悪いことなのか。多くの意見は、「なんで俺は持ってないんだ」という感情論ではないかと思う。("特集 ピケティにもの申す! 異論反論あり! なんではやる?理解できない＝堀江貴文" 週刊エコノミスト 2015年02月17日号 第93巻 第7号 通巻4384号)

C類：判断・叙述表現（A類・B類に属さないもの）

- (24) 成長戦略の効果が出るまでには5年や10年かかる。正しいことを正しく行ったとしても、たった1年間で潜在成長率を実質2%にまで高めるのは不可能に近いと思う。("特集 今そこにある財政危機 インタビュー 池尾和人・慶応大学教授に聞く 成長率の前提は「フィクション」だ…" 週刊エコノミスト 2015年06月30日号 第93巻 第26号 通巻4403号)
- (25) 米国に留学する多くの中国人学生が、ここにとどまるにせよ帰国するにせよ、中国の今後の発展への大きな財産になると思う。("インタビュー ジャレド・ダイヤモンド 『銃・病原菌・鉄』筆者 「人類が抱える21世紀の課題は病原菌ではなく…」" 週刊エコノミスト 2015年06月16日号 第93巻 第24号 通巻4401号)
- (26) 日銀短観6月調査では、業況判断D I が着実に改善し、景気回復が裏付けられたとの評価が一般的だ。しかし、足元の景気はまだ慎重にみておくべきだと思う。とりわけ、鉱工業生産の弱さが懸念材料だ。("景気観測 内需、外需ともに低迷 低成長が長引くリスクも＝杵村秀樹" 週刊エコノミスト 2015年07月21日号 第93巻 第29号 通巻4406号)

なお、C類のうち、(26)のような「当為表現+と思う」について、森山(1992)では、「戦後の正しい教育を受けた若者に正しい判断をしてもらわねばならないと思います。」の例を『「と思う」』の部分を除いても、その論理的知的な意味での質的な違いはない(後述するように、文体的な効果はある)。つまり、『「と思う」』の有無にかかわらず、個人的な意見を述べていることになっていると言えるのである。」と位置づけている(p.110)。しかし、例えば「若者に正しい判断をしてもらわねばならないだろう」という文が非文とはならない点で、本論文におけるA類やB類とは異なると判断し、C類に含めた。

A類・B類を上の内部にとる文末表現「と思う」は、森山(1992)の<主観明

示用法>にあたるものである。「C類+と思う」は、トの内部に意志・願望・推量をあらわす助動詞を伴わず、この場合の文末表現「と思う」は推量表現に準じて用いられていることが多い。なお、「B類+と思う」については、文末表現「と思う」自体の機能としては「主観明示」であるとされ（森山1992）、この点からいえばA類をトの内部にとる「と思う」に近いものである。しかし、文全体でみると推量表現となるという点ではC類をトの内部にとる「と思う」に近いので、A類とはわけて考察することとする。

【表1】 A類・B類・C類の分類

	A類 意志・願望等	B類 推量・疑問等	C類 判断・叙述等
文末思考動詞の機能	主観明示		不確実表示
文全体の意味	意志・願望	推量	

また、<不確実表示用法>になるもの、つまり推量の助動詞に置き換え可能なものは全て「C類+と思う」の用例である。しかし、A類・B類以外をトの内部にとる「と思う」全てが推量表現に置き換えられるわけではない。例えば、一人称主語が明示されている場合や、トの内部が感情形容詞等、話者の心内をあらわす表現となっている場合は、文末表現「と思う」は単純に「だろう」に置き換えることはできない。

(27) 結論から言えば、私は「秋解散」の可能性は低いと思う。「来秋以降」が常識的な見方だろう。("東奔政走 まさかの「9月解散説」も浮上 それでも主導権は安倍首相に=与良正男" 週刊エコノミスト 2014年08月19日号 第92巻 第35号 通巻4357号)

(27a) × 結論から言えば、私は「秋解散」の可能性は低いだろう。

(28) 審議では、ホーチミン市祖国戦線議長を務めるポー・ティ・ズン議員が、「自分自身恥ずかしいと思う。国会は第60条を再改正するだけでなく、間違いを認めなくてはならない」と述べた。("国会は労働者に謝罪を、施行前再改正で [2015年05月25日]" NNA:アジア&EU 国際情報 2015年05月25日)

(28a) × 自分自身恥ずかしいだろう。

これらのうち、一人称主語が明示されている(27)のような例についてはC類に分類し、考察対象とする。これは、一人称主語が明示されている(27)の文と、明示されていない(27b)の文とで、文の意味自体は大きく変わらないためである。

(27b) 結論から言えば、「秋解散」の可能性は低いと思う。

しかし、(28)のようにトの内部が発話者の感情とみられるものは、「思う」が本動詞的に用いられていることが多いため、この場合の「と思う」は文末思考動詞としての用例からは除外し、必要に応じて個別にその旨の説明を加えることにする。

また、「文末表現」としての「と思う」の範囲についてであるが、仁田(1991)は「彼は間違っていると思う。」(下線は原文ママ)という文における「と思う」を、「[非過去、非否定、『思ウ』の一人称主体の省略]といった条件の元でモダリティ形式化していった例である」(p.58)としている。また、森山(1992)は、『『思う』『考える』『気がする』などの動詞(句)が文末でスル形で用いられた場合、実質的な動きを表すというよりも、ある種の文末表現として機能することがある。』(p.105)と述べる。

これらの先行研究をふまえて、一人称主語・文末・スル形のみを文末表現「と思う」の考察対象とした。テイル形や過去形についても、本動詞「思う」であると判断されるため、調査対象外とする。ただし、「と思います」のように「です」「ます」のついたもの、終助詞およびそれに準ずる表現のついた「と思うよ」「思うのだ」のようなものは、文末表現「と思う」の範囲内とし、考察対象とする。古典語においては、敬語補助動詞・敬語助動詞や、終助詞、指定表現の後接した「と思ひ候」「と思ふぞ」「と思ふなり」等は、文末表現「と思ふ」のモダリティ形式としての条件に反しないものとみて、考察対象とする。「と存ず」等、他の思考動詞による文末表現についても同様に扱う。

また、主語が明示されていなくても、明らかに三人称主語をとると判断されるものは調査対象外とした。例えば、次の例では、「代助」という主語が明示されており、それは、2文目の「嘘吐だと思う」にもかかるものであろう。このような例は調査対象から外した。

(29) 父が過去を語る度に、代助は父をえらいと思うより、不愉快な人間だと思う。そうでなければ嘘吐だと思う。(『それから』)

また、「～を…とみなす」とほぼ同義の「…を～と思う」および、「…と思ひ、～と思う」のような形をとるものは、「思う」が本動詞として機能していると考え、表内の数字には含めないこととする。

また、先述の通り、現代語以外にみられる文末の思考動詞が、現代語のそれと同等の意味・機能で使われているかについては、慎重な検討が必要だが、大木(1997, p.32)にもあるように、思考動詞が文末に来る文を発する場合、それが

そのまま話手の新たな心理状態が成立したことを表明することになる例もあり、少なくとも一人称で、「と＋思考動詞の終止形」という複合形式が一定数用いられていることが確認できる。そのため、これらの形式については、現代語の文末思考動詞につながるものとして検討すべきものであると考える。

本論文においては、文末思考動詞を上記のように認定・分類した上で、これらの表現がどのように用いられてきたか、史的観点から明らかにしていきたい。

## 第1章 文末表現「と思ふ」の通時的展開

### 1. はじめに

本章では、文末表現「と思ふ」の使用状況を通時的に概観し、(Ⅰ)文末表現「と思ふ」による推量表現の発達時期、(Ⅱ)文末表現「と思ふ」の発達過程、の二点について明らかにしたい。

具体的には、時代ごとの文末表現「と思ふ」の用例数を、トの内部の情報別にA類・B類・C類の三つにわけて調査し、どの時代にどの類の用例が多くみられるかをみていく。時代ごとに調査資料が限られ、またその性格も異なる中で、一概に用例数の多寡のみで文末表現「と思ふ」の発達過程を論ずるのは難しいが、各時代・資料ごとの出現状況を確認することは、一つの指標として有効であろう。

本文中の表には文末表現「と思ふ」の用例がみられた作品のみ掲載し、調査した全資料は本章の末尾にあげた。なお、用例のページ数は末尾に挙げた【資料】による。

### 2. 各時代の文末表現「と思ふ」の使用状況

#### 2. 1. 中古文学作品

中古文学作品における文末表現「と思ふ」の用例数は【表1】のようになった。表中の「(地)」で示した数字は、用例数の中の地の文の内訳であり、それ以外は会話文中の用例である。

【表1】中古文学作品における文末表現「と思ふ」の出現数

	A類	B類	C類	合計
竹取物語	1			1
大和物語	1			1
源氏物語	10	4		14
枕草子	2(地2)	1(地1)		3(地3)
紫式部日記			1(地1)	1(地1)
更級日記		2(地1)		2(地1)
合計	14(地2)	7(地2)	1(地1)	22(地5)

#### ■A類をトの内部にとる例

A類をトの内部にとる例は14例みられた。次の例は、意志の助動詞をトの内部にとる例である。

- (1) 人々のいはく、「かばかりして守る所に、かはほり一つだにあらば、まづ射殺して、外にさらさむと思ひはべる」といふ。(『竹取物語』 p.69)
- (2) 「(略) 人の恨み負はじなど思ふも、世に長うありて、思ふさまに見えたてまつらんと思ふぞ」(『源氏物語』 1 p.333)
- (3) 「(略) いとらうたしと思ふ女の童は、あまたの中に、これをなん命にもかへむと思ひはべる。(略)」(『源氏物語』 6 p.28)

また、次の例は、願望の助動詞が直接あらわれる例ではないが、「いつしか」の後に願望表現が省略されていると解釈し、A類をトの内部にとる例として分類した。

- (4) 「その柱と屏風とのもとに寄りて、わがうしろよりみそかに見よ。いとをかしげなる君ぞ」とのたまはするに、うれしく、ゆかしさまさりて、いつしかと思ふ。(『枕草子』 p.200)

#### ■B類をトの内部にとる例

B類をトの内部にとる例は7例であった。(5)(6)の例は、打消推量の「じ」に文末表現「と思ふ」がついた形である。

- (5) ただ今ははかばかしからずながらも、かくてはぐくみはべらば、せまりたる大学の衆とて、笑ひ侮る人もよもはべらじと思ふたまふる」(『源氏物語』 3 p.23)
- (6) 「我に聞かせよ。父親王の、さやうの方にいとよしづきてものしたまうければ、おしなべての手づかひにはあらじと思ふ」と語らひたまふ。(『源氏物語』 1 p.267)

ただし、(6)の箇所については諸本で本文が異なっている。『源氏物語大成』によると、大島本では「あらしとなむおもふとの給へは」(横山本では「あらしとのたまへは」、池田本・肖柏本・三條西家本では「あらしとおもふとかたらひ給」となっており、本によっては文末表現「と思ふ」ではない表現が用いられていることがわかる。

次の(7)の例は、『新編日本古典文学全集』における現代語訳が「あなたの幼少のころ、上総に連れて下ったときでさえ、私の加減の多少とも悪いときは、あなたをこの国に残して先立ち、路頭に迷うようなことにでもなりはすまいかと思ふのだった。」となっている。つまり、「と思ふ」に対して「と思ふのだった」と過去形の訳が付されており、本動詞として扱うべき用例である可能性があるが、

形態上「B類+と思ふ」の例に含めた。

(7) 幼かりし時、あづまの国に率て下りてだに、心地もいささかあしければ、これをや、この国に見すてて、まどはむとすらむと思ふ。(『更級日記』 p.315)

次の(8)の文はトの内部が推量の助動詞であるが、「いかに～まし」という形式で、詠嘆のニュアンスが感じられるものであり、文全体として推量表現になっているとは言い難い。

(8) 枝どもも、濡れまつはれつきて、いかに便なきかたちならましと思ふ。(地) (『枕草子』 p.399)

このように、中古においても「B類+と思ふ」の形式はみられるものの、詠嘆に近い例や、諸本により本文にゆれのある例等があることを考えると、「推量表現+と思ふ」という形式が推量の意味を表わす複合形式として定着していたとは言い難い。

#### ■C類をトの内部にとる例

判断・叙述等、C類をトの内部にとる例は1例であった。

(9) 小さき灯炉を御帳のうちにかけたれば、くまもなきに、いとどしき御色あひの、そこひもしらずきよらなるに、こちたき御髪は、結ひてまさらせたまふわざなりけりと思ふ。(地) (『紫式部日記』 p.148)

しかし、糸井(1977)が『源氏物語』における「なりけり」について、「語り手ないし作者の、主体的な態度を顕著に表出する表現である」(p.85)としているように、(9)の文において、「なりけり」は主体的・詠嘆的な表現として使われている。よって、これに後接する「と思ふ」は前接する文の内容の蓋然性を示しているわけではなく、単に動詞「思ふ」による直接引用に近い心話とみることとした<sup>4</sup>。このように考えると、C類とはいえ、この「と思ふ」は推量表現に置き換えにくいものであろう。

その他、【表1】には含めていないが、中古文学作品には、詠嘆や感情形容詞等

<sup>4</sup> 『新編日本古典文学全集』においても、「結ひてまさらせたまふわざなりけりと思ふ。」は、「こうして結い上げなると、いっそうみごとさをお増しになるものなのだなあと思われる。」という訳が付されている。

をトの内部にとる、本動詞としての性格が強い例が複数みられる。次の例は、立派な人のふるまいに対し、「心づきなし」という評価を下しているものである。

(10) それはしも、まことによき人の、したまひしを見しかば、心づきなしと思ふなり。(地) (『枕草子』 p.66)

(11) は、「あはれと思ひはべる」の形である。『新編日本古典文学全集』において、「今ではやはり、お互いに離れられようもないくらい深くいとしく思っています」という訳が付されており、ある人物に対する心情を述べている例である。

(11) 「(略) 今はた、かたみに背くべくもあらず、深うあはれと思ひはべる」など、昔今の御物語に夜更けゆく。(『源氏物語』 2 p.494)

(10) (11) の例とも、「形容(動)詞+と思ふ」の形で、ある人物への評価や心情を述べる例であり、この「思ふ」は本動詞といえるものである。自らの感情を表明する際には、「気に食わないだろう」「いとしいだろう」とはいえず、このような「と思ふ」は推量の意味には解釈し難い。

(12) 「いかでかそら言にはあらむ。よろしうだに思ひきこえさすべき事は。あさましう、鼻こそそら言はしけれ」と思ふ。(地) (『枕草子』 p.313)

(12) の例は、「こそ～けれ」の係り結びとなっており、詠嘆のニュアンスが感じられる。『日本古典文学大系』のテキストをみると、当該箇所は「あさましう、はなこそそら言はしけれ、と思ふ。」(p.234) となっているものの、「と思ふ」の前で一度文が終止していると解釈すべきものであると思われ、例えば、『新編日本古典文学全集』のテキストでは「と思ふ」の前に“「」”が付されている。この例における「思ふ」は本動詞であり、推量表現とは解釈し難いものである。

(13) 蔵人の君、例の人にいみじき言葉を尽くして、「今は限りと思ひはつる命のさすがに悲しきを。あはれと思ふ、とばかりだに一言のたまはせば、それにかげとどめられて、しばしもながらへやせん」などあるを持って参りて、見れば、姫君二ところうち語らひて、いといたう屈じたまへり。(『源氏物語』 4 p.89)

また、(13) の例は、「あはれと思ふ、とばかりだに一言のたまはせば、」の箇所、『新編日本古典文学全集』では「せめて、かわいそうに思うとだけでも一言おっしゃってくださいのだったら、」の訳があたっており、この「あはれと思

ふ」は引用（かつ、仮定の話であるため、実際は発せられていない言葉）である。

(10) (11) の例と同様、「形容（動）詞＋と思ふ」の形で心情を述べる例であり、この「思ふ」は本動詞とみるべきものであるため、この「と思ふ」も推量表現的なものであるとはいえない。しかし、中古においてはこのような「形容（動）詞＋と思ふ」の例が複数みられること自体がひとつの特徴であるともいえよう。

なお、中古の用例のうち、『源氏物語』については、【表1】の用例と別に、地の文において三人称主語が想定される例が31例あった。(14)の例のように、三人称主語が本文中に明示されている例と、(15)の例のように、地の文で、かつ本文中には明示されていないが、「思ふ」の主体が書手以外であると想定される例（(15)の例では「中将」）がある。なお、(15)の「と思ふ」の箇所は『新編日本文学全集』では「…と中将は思う。」との訳が付されている。

(14) さもやいたはらまし、と大殿も<sup>おほ</sup>思いたるを、かの人<sup>おほ</sup>は聞きたまひていと口惜しと思ふ。(地) (『源氏物語』3 p.64)

(15) 一昨年ばかりは、たまさかにもほの見たてまつりしに、またこよなく生ひまさりたまふなめりかし、まして盛りいかならむ、と思ふ。(地) (『源氏物語』4 p.146)

このように、中古文学作品においては、文末表現「と思ふ」が意志や感情の表現をトの内部にとる例が数例みられるものの、意味の面から明らかに推量や判断、叙述の表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」であると解釈できる用例はないに等しく、これらの表現が定着しているとはいえない。

また、『枕草子』『紫式部日記』は、地の文にのみ文末表現「と思ふ」があらわれる点で特徴的である。これは、随筆や日記の地の文には、筆者自身の考えや態度があらわれやすく、自らの考えを述べる文末表現「と思ふ」との親和性が高いことと関係すると考えられる。『更級日記』においても、地の文の例が1例みられ、『紫式部日記』同様、日記の地の文に筆者の考えや態度があらわれた例であるといえる。一方、物語作品においてみられる用例は、全て会話文中のものであり、文末表現「と思ふ」は、文章の性質によって出現傾向に違いがあることがうかがえる。

## 2. 2. 中世文学作品

中世文学作品における文末表現「と思ふ」の用例数は【表2】のようになった。また、『御伽草子』におさめられた作品のうち、「唐糸さうし」「三人法師」「梵天国」「熊野の御本地のさうし」に用例がみられた。表内の用例数は『御伽草子』4

作品の合計である。

【表 2】 中世文学作品における文末表現「と思ふ」の出現数

	A類	B類	C類	合計
平家物語	14※1			14
宇治拾遺物語	10		1	11
古今著聞集	4			4
太平記	18			18
天草版平家物語	9	2	1	12
虎明本狂言集	23※2	6※3	1	30
御伽草子	2	2		4
合計	80	10	3	93

※1 うち1例が願文、うち1例が会話内の引用

※2 うち3例がト書き・注記内の例

※3 うち1例が注記内の例

#### ■A類をトの内部にとる例

願望表現をトの内部にとる例として、以下のようなものがあった。

- (16) 「(略) おなじくはこれにて出家して、火のなか水の底へもいらばやとおもふ也。(略)」(『平家物語』下 p.271)
- (17) 「軍ノ勝負ハ時ノ運ニ依事ナレバ、強ニ恥ナラネドモ、今日ノ負ハ三井寺ノ合戦ヨリ事始リツル間、我等ガ瑕瑾、人ノ嘲ヲ不遁。サレバ態他ノ勢ヲ不交シテ、花ヤカナル軍一軍シテ、天下ノ人口ヲ塞ガバヤト思也。(略)」(『太平記』2・p.105)
- (18) 「(略) しがひをかくして候は、ちゝごの不審めされうずると思ひ、そのまゝおきて候、むなしくなりたるよし、ちゝごに申さばやと思ひ候、いかに御入候か」(『虎明本狂言集』「髻類・山伏類」p.423)

次にみるように、意志表現をトの内部にとる例は中世軍記物語を中心に非常に多くみられ、『平家物語』『宇治拾遺物語』『太平記』では、意志表現をトの内部にとる用例がそれぞれ10例をこえている。「たすけん」「打死せん」等、強い決意を述べる際に用いられることが多いようである。

- (19) 「汝をたすけんと思ふ也。(略)」(『宇治拾遺物語』p.134)
- (20) かさねて斗藪の行をくはたてんとおもふ。(太上天皇の御願文)(『平家物語』上 p.369)
- (21) 「(略) 我は打死せんと思ふなり。(略)」(『平家物語』下 p.178)

- (22) 「主上帝都へ還幸成シ時、以我元首將トシ、以汝令爲股肱臣。夫無股肱元首持事ヲ得ンヤ。サレバ吾命ヲ白刃ノ上ニ縮メテ、怨ヲ黄泉ノ下ニ酬ハント思也。抑自害ヲバ如何様ニシタルガヨキ物ゾ。」(『太平記』 2 p.244)
- (23) 中納言御覽じて、「さばかり申しつる物を、わが身のこととはともかくも、命はさらに惜しからず。御身に憂き目を、みせ申さんこそ悲しけれ」と、のたまへば、姫君は、「今はいふ共かなふまじ。二世とかけたる契也。波の底へ入りて、ひとつ道にと思ふ也」(『梵天国』 p.285)

■B類をトの内部にとる例

「B類+と思ふ」の例は、『平家物語』や『太平記』にはあらわれないものの、中古と比べるとわずかながら用例がみられるようになっている。

次のように、「うず」「あらふ」等の推量表現をトの内部にとる例がみられた。

- (24) この後も讒奏する者あらば、当家滅ぼせとの院宣を下されうずと思ふぞ：(『天草版平家物語』 p.42)
- (25) 「いつもゝるすに、さけをぬすんでのむによつて、じやあらふとおもふ」(『虎明本狂言集』「大名狂言類」 p.273)

次の(26)はトの内部が推量の助動詞を使った疑問表現となっている。

- (26) 「(略)たゞこれ程にもてなし興じあへるに、身の力なくて、そこばくおほかる殿原の中に、我ひとりよそなるが、おもひつゞくれば、これならぬまして大事にもさぞかしとおもふに、今更身の程うたてくて、かくてはなにしに人にまじるらんとおもふなり」(『古今著聞集』 p.333)

また、「かと思ふ」の形もみられるようになる。

- (27) 「尤身どもゝさやうに思ふが、さりながら明日は何もゑほし上下で出仕じやときひたが、ゑほしかみ下がなひほどに、俄になるまひかと思ふ」(『虎明本狂言集』「大名狂言類」 p.154)
- (28) 私ニ云、ツバミヲケヲアケテモミイデ、ヲヂサセラレウト云ハフシン、タバカシコマツタト云テ、ツバミヲケヲアケテミテ、カブリヲフツテ、カヲハカクシテ、ヲヂサセラレナト云テ、ツメタルガマシカトヲモヒ候(注記部分)(『虎明本狂言集』脇狂言之類 p.78)
- (29) 「何者ぞと思ふたれば、からすじやよ、さりながらからすならはなかふ

ぞ、なかつは人である事もあらふ、人ならばにくひ事じやが、多分からすかと思ふ」（『虎明本狂言集』 聳類・山伏類 p.417）

#### ■C類をトの内部にとる例

C類をトの内部にとる例も、用例数は多くないながらもみられる。

(30) 童の申やう、「日の出入所は見ゆ。洛陽はまだ見ず。されば日の出る所はちかし、洛陽は遠しと思ふ」と申ければ、孔子、「かしこき童なり」と、感じ給ひける。（『宇治拾遺物語』 p.247）

(31) これはひとへに鼓判官がしわざと思ふぞ：（『天草版平家物語』 p.221）

(30) の例は、「と思ふ」を「のだろう」に置き換え、「洛陽は遠いのだろう」と解釈することが可能である。同様に、(31) の例は、「これはひとえに鼓判官のしわざだろう」と解釈することができ、これは現代語で多用される、推量の助動詞に準ずる文末表現「と思う」につながるものであろう。

また、『虎明本狂言集』においては、次の2例がみられたが、これも推量表現と解釈することが可能なものである。

(32) 果報者「いやくるしうなひ、よろいのかげさせらるゝと思ふ」（『虎明本狂言集』 脇狂言之類 p.76）

(33) 何としゆしやうな事ではなひか、思ひの外はやうおいとまを下され、仕合のよひもおかげじやと思ふ、だうのやうすを見おひて、国本にての物がたりにせう（『虎明本狂言集』 大名狂言之類 p.178）

中世における文末表現「と思ふ」のもっとも大きな特徴は、軍記物語を中心とした資料において、意志や願望表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」が多くみられることである。外界を叙述するよりは、個人の内的な強い意志・願望を表明する際に用いられる傾向がある。

## 2. 3. 近世文学作品

近世文学作品における文末表現「と思ふ」の用例数は【表3】のようになった。

#### ■A類をトの内部にとる例

願望表現をトの内部にとる例として、下記のものがあった。

- (34) 大児と小児とひたひをよせあはせ、おかしき物かたりしてあそはれける  
ついで、大児くちすさひに、餅ハくふ時さねかなふておもしろひ物じや  
と有しを、いや、たゞわれハ餅にさねかあれかしと思ふよ、うへてをき  
てならせてくひたい。(『醒睡笑』 p.134)

【表3】近世文学作品における文末表現「と思ふ」の出現数

	A類	B類	C類	合計
醒睡笑	1(地1)	1(地1)		2(地2)
好色一代男	1		2	3
遊子方言	1			1
辰巳之園		1		1
椿説弓張月	2			2
浮世風呂	2			2
春色梅児誉美		1		1
春色辰巳園		2	3	5
合計	7(地1)	5(地1)	5	17(地2)

意志表現をトの内部にとる例としては、下記のものがあった。

- (35) 「われこの地にも住わびて、四國のかたへゆきて、住ところ求んと思ふ  
なり。しかれば再會ははかりがたし。(略)」(『椿説弓張月』 p.407)
- (36) 「おらもの、角琴柱はチト來たから打直させうと思ふよ」(『浮世風呂』  
p.166)

■B類をトの内部にとる例

推量表現をトの内部にとる例として、下記のものがあった。

- (37) 「いつそ氣をもんで、死でもしたらよかろうと思ふヨ」(『春色辰巳園』  
p.262)
- (38) イ、エわちきが斯なつたことゝは知らず、まだ廓にゐると思つて、たゞ  
面目ねへ、くやしい、これといふも私のおかげだなんぞと、今じやアに  
くんで居なんすだろうと思ひイす (『春色梅児誉美』 p.231)

■C類をトの内部にとる例

以下、判断や叙述の表現をトの内部にとる例である。次の例では、「と思ふ」を  
推量の意をあらわす文末表現と解釈することが可能であろう。

- (39) 「斯いふわたしも今までに、小春紙治のお綱じやアねへが、面白いことはでなこと、わけのありたけ氣をもんでも、縁といふ字の出来不出来で、望の通りになりはしないが、せめて結んで居る中は、その日を和合くらすのが第一のことだと思ふヨ」(『春色辰巳園』 p.265)
- (40) 「ナニ近所だつても唄妓の宅だから、煩つて居たとつて、三味線はひくと思ふのさ」(『春色辰巳園』 p.425)

ただし、以下のように、「C類+と思ふ」と形式は似ているものの、本動詞と解釈すべきと思われる例があった。次の(41)の例は、「と思ふ」の前が「おいしい」という、話者のその場での心内を述べる表現になっている点、「おれも」と一人称主語を明示している点から、本動詞として用いられており、推量の意を表すと文末表現とは解釈し難い「と思ふ」であると判断した。そのため、【表3】には含まていない。

- (41) 「ほんに、惜か〜。おれも、惜いと思ふよ。サア〜、這入ろ〜 (『浮世風呂』 p.287)

次の例は、「さもおもはぬ、〜と思ふ」という、「思ふ」が連続した文になっている。この「と思ふ」については、「思考する」という実質的な動作を表す本動詞であるとみられる。そのため、【表3】の用例からは除外したが、「そうはおもわない、〜だろう」という述べ方は可能であることから、この例における「と思ふ」が推量の意を表す表現である可能性も完全には排除できない。

- (42) 「神農といふハ百草をなめ、もゝたひしゝて百たび活とやらん、人はミなくすしの上手とほむるか、我ハいさゝか、さもおもはぬ、たゝ下手にすうだと思ふ。」(『醒睡笑』 p.94)

次の例は、「命令形+と思ふ」の形であり、命令形の後に一度文が切れていることが明確で、「と思ふ」が推量表現であるとは考えにくい。この「と思ふ」も本動詞として用いられていると判断し、【表3】の用例には含めなかった。

- (43) 今は戸部もうせ給ひぬれど、はじめ、我申せしことばの、むなしからざるやうに、つかへまいらせよと思ふなり」とのたまひたりき。(『折たく柴の記』 p.160)

全体的に近世文学作品では、文末表現「と思ふ」の用例の総数が少ない。ただ

し、用例数が少ないとはいえ、文末表現「と思ふ」の推量表現的な用法がみられる。また、今回の調査の範囲では、A類をトの内部にとる文末表現「と思ふ」の用例が少ない点で、中世語資料でみられた傾向とは大きく異なる。

この傾向は、年代的側面だけでなく、資料ごとの文章の性質も影響しているとみられる。例えば、中世の軍記物語では、自らの考えや決意を述べる場面で使われやすい等の傾向がみられたが、洒落本や人情本では、内容的にそのような場面が少ないために、多くの用例を得ることができなかった可能性も高い。しかし、中世軍記物語をふまえた『椿説弓張月』や、時代物『國性爺合戦』においても、「A類+と思ふ」の用例が多いということはなく、いずれにしても、時代性・資料性の両面から検討する必要がある（第6章参照）。

## 2. 4. 近代文学作品

近代の文学作品を調査し、文章が主として口語体か、文語体かによって二分し、それぞれ【表4】【表5】に示した。また、用例数のうち、地の文と手紙文の内訳をあわせて示す。なお、『金色夜叉』は、会話部分は口語体で書かれ、地の文は文語体で書かれているが、「と思ふ」の用例はいずれも口語体で書かれた会話文のものであるので、ここでは口語体の作品として扱った。

【表4】近代文学作品における文末表現「と思ふ」の出現数（口語体）

	A類		B類			C類			合計		
	地	手紙	地	手紙	手紙	地	手紙	手紙	地	手紙	
安愚楽鍋			2			2			4	0	0
浮雲	3		2			2			7	0	0
金色夜叉	5		12			0			17	0	0
我輩は猫である	6	1	15	7		23	13		44	21	0
坊っちゃん	3		1			3			7	0	0
草枕			4	3		12	12		16	15	0
破戒			12			2			14	0	0
蒲団	5				2	5		2	10	0	4
三四郎	4	2		3	2	4	2		11	6	0
それから	3			5		3		1	11	0	1
キタ・セクスアリス	1	1		4	4	6	6		11	11	0
家	11			13		11			35	0	0
阿部一族	1								1	0	0
ころも	3		1	8	1	7	10	2	5	21	3
杜子春	1								1	0	0
多情仏心						5		1	5	0	1
痴人の愛	2	1		2		6			10	1	0
雪国						2			2	0	0
路傍の石	1	1		1		14	2		16	3	0
合計	49	6	3	84	17	7	110	37	9	243	60

【表5】近代文学作品における文末表現「と思ふ」の出現数（文語体）

	A類	B類	C類	合計
たけくらべ	1			1
合計	1			1

【表4】では、『めぐりあひ』を除く全ての口語体による作品において、文末表現「と思ふ」がみられる一方、【表5】をみると、『たけくらべ』にA類をトの内部にとる用例が1例みられるのみである。

【表4】をみてみると、近代文学作品においては、それ以前の時代の文学作品における文末表現「と思ふ」の使用状況とは大きく異なる傾向が見られる。まず、B類の、推量表現をトの内部にとる「と思ふ」が様々な資料でみられるようになっていることに気付く。また、近代文学作品では、C類をトの内部にとる用例が最も多くなっている。さらに、近代以降の文学作品には、地の文に作者や主人公の心内が仮託されるものが多くあり、地の文の用例も多くなっている。

#### ■A類をトの内部にとる例

近代においても、意志や願望の表現をトの内部にとる例は引き続きみられる。

- (44) 哲学は職業ではあるが、自己の哲学を建設しようなどとは思わないから哲学を書く気はない。それよりは小説か脚本かを書いて見たいと思う。  
(地) (『キタ・セクスアリス』)
- (45) 「それも云わない事になってるから云いません。然し人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに変化できるものでしょうか。私はそれが知りたくって堪らないんです。だから其所を一つ貴方に判断して頂きたいと思うの」 (『こころ』)
- (46) 「上野へ行って虎の鳴き声を聞こうと思うんです」 (『我輩は猫である』)
- (47) 「夜陰に呼びに遣ったのに、皆好う来てくれた。家中一般の噂じゃと云うから、おぬし達も聞いたに違いない。この弥一右衛門が腹は瓢箪に油を塗って切る腹じゃそうな。それじゃによって、己は今瓢箪に油を塗って切ろうと思う。どうぞ皆で見届けてくれい。」 (『阿部一族』)

#### ■B類をトの内部にとる例

推量表現をトの内部にとる用例は、以下のようなものがある。「ようと思ふ」「だろうと思ふ」「まいと思ふ」等がみられる。

- (48) 「(略) あの勘次の野郎ほど、附合のねへまぬけは、西東の神田三界にやア、おらア、あるめへとおもふぜ。(略)」(『安愚楽鍋』「諸工人の俠言」p37)
- (49) 「まあ、そうだろうと思うんです」(『それから』)
- (50) 私は外の人からこう云われたらきっと癢に触ったろうと思う。然し先生にこう云われた時は、まるで反対であった。癢に触らないばかりでなく却って愉快だった。(『こころ』)

#### ■C類をトの内部にとる例

近代文学作品においては、判断や叙述の表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」が、他の時代に比べて非常に多く使用されている。

- (51) 「(略) こゝのうちの肉も、ずいぶんいゝけれども、濱で屠たてを料理屋がにんじんと混雑煮にして、湯煮をし、それからほんとうに煮たのをたべちやア、じつにこんなうまいものはないと、思ふヨ。(略)」(『安愚楽鍋』「歌妓の坐敷話」p.59)
- (52) 神田の某亭で晚餐を食う。久し振りで正宗を二三杯飲んだら、今朝は胃の具合が大変いい。胃弱には晩酌が一番だと思う。タカジヤスターゼは無論いかん。誰が何と云っても駄目だ。どうしたって利かないものは利かないのだ。(『我輩は猫である』)
- (53) 良心の呵責という程のものを覚えぬ。勿論あんな処へ行くのは、悪い事だと思う。(『キタ・セクスアリス』)
- (54) それから中二日置いて丁度三日目の午後だったと思う。(地)(『こころ』)
- (55) 「蚊弱いとかたよわくと云う字だと思います」(『我輩は猫である』)

『草枕』には、地の文のみに文末表現「と思ふ」の例がみられる。ただし、地の文とはいえ、主人公が自分の心内で語っている部分での用例である。次の例においても、「と思ふ」は具体的な思考動作を表しているわけではなく、推量表現に準ずる用いられ方をしているとみてよいだろう。

- (56) 余の視る所にては、彼の青年は美の一字の為めに、捨つべからざる命を捨てたるものと思う。(『草枕』)

なお、夏目漱石の作品の中には、次の例のように明らかに詠嘆的なものが4例あった。「よく～できると思ふ」「～だなと思ふ」のような例においては、「と思ふ」の前(「よく～できる」「～だな」)で文が一度終止していると解釈する

のが妥当であり、この場合の「と思ふ」は前接する文の内容の蓋然性を示しているのではなく、動詞「思ふ」による直接引用的な心話であると考えられる。そのため、これらの例における「思ふ」は「思考する」という動作をあらわす本動詞として用いられているものであると判断し、【表4】の数字には含めなかった。

(57) 「議論はいやよ。よく男の方は議論だけなさるのね、面白そうに。空の盃でよくああ飽きずに献酬が出来ると思ひますわ」(こころ)

(58) 三丁程上ると、向うに白壁の一構が見える。蜜柑のなかの住居だと思ふ。(草枕)

近代文学作品では、多くの作品において文末表現「と思ふ」が使用されている。特に、口語体で書かれた文章においては、『めぐりあひ』以外の全ての作品に現れており、近世以前と比べるとその使用が格段に増えている様子がうかがえる。また、願望や意志をトの内部にとる用例は、近世以前にも一定数みられたものであるが、近代文学作品ではB類の推量・疑問の表現やC類の判断・叙述の表現をトの内部にとる用例の数が多くなっている。すなわち、文末表現「と思ふ」が一種の推量表現として用いられる例および、「推量表現+と思う」の形で、文全体が推量の意味を持つような例が増えたことがわかる。

ただし、本章で調査対象とした近代文学作品でも、文末表現「と思ふ」が全くみられない作品もある。『めぐりあひ』と、文語文で書かれた『にぎりえ』、『舞姫』、『うたかたの記』である。また、『たけくらべ』でも、意志をトの内部にとる例が1例みられるのみで、文末表現「と思ふ」が推量表現に準ずる役割を担っている例はなかった。このように、近代になっても、文語文により書かれた作品には、文末表現「と思ふ」、特に推量に関わる表現は少ないことがわかった。この文末表現「と思ふ」の口語性については、第5章で詳しくみていきたい。

### 3. おわりに

本章の1. で提示した問題は、以下のように結論づけられる。

#### (I) 文末表現「と思ふ」による推量表現の発達時期

文末表現「と思ふ」による推量表現は、近代以前にもわずかにみられたものの、近代になりその使用が急増した。

#### (II) 文末表現「と思ふ」の発達過程

意志や願望表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」は、中古から存在していた。中世においては、軍記物語を中心に、意志表現をトの内部にとる文末表現「と

思ふ」が多くあらわれる点が特徴的である。

推量表現をトの内部にとるものについては、中古においては推量や疑問の表現を用いた詠嘆的な用例がみられる。中世後期の口語的な資料等で、「うずと思ふ」等の形が出現するようになり、近代になると「だろうと思ふ」等の用例が増加する。

判断や叙述等をトの内部にとる、一種の推量表現として機能することが多い文末表現「と思ふ」に関しては、中古にはみられないといってよく、中世・近世になると少数ながらみられるようになるが、この用法の文末表現「と思ふ」が多くみられるようになるのは近代になってからである。

つまり、意志・願望表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」が最も古くに発達し、その後、推量表現や判断・叙述の表現をトの内部にとる「と思ふ」が発達してきたようである。また、文末表現「と思ふ」が定着した後の近代の資料であっても、文語文にはあらわれにくい。

本章での考察から、推量表現に準ずる文末表現「と思ふ」が定着したのが近代であるということに加え、文末表現「と思ふ」が口語的表現の中で多くみられるものであること、また、定着以前の中世において、「意志・願望+と思ふ」の用例が多いこと等の特徴がみえてきた。また、文末表現「と思ふ」による推量表現が定着する近世以前にはどのような表現が用いられていたかについても考える必要がある。これらの点について、次章以降検討していく。

## 【資料】

### 中古文学作品

『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『大和物語』『源氏物語』『枕草子』『紫式部日記』『更級日記』

以上、新編日本古典文学全集、JapanKnowledgeLib (<http://japanknowledge.com/library/>) を利用

池田亀鑑（1953）『源氏物語大成 卷一』 中央公論社

池田亀鑑・岸上慎二・秋山虔校注（1958）『日本古典文学大系 枕草子 紫式部日記』 岩波書店

### 中世の文学作品

『宇治拾遺物語』『平家物語』『太平記』『御伽草子』（『物くさ太郎』『一寸法師』『酒呑童子』『さぶれいし』『猿源氏草紙』『七草草紙』『唐糸さうし』『あきみち』『二十四孝』『鉢かづき』『さいき』『浦嶋太郎』『小町草紙』『御曹司島渡』『文正草紙』『梵天国』『蛤の草紙』『木幡狐』『和泉式部』『のせ猿さうし』『秋

夜長物語』『浜出草紙』『福富長者物語』『小敦盛』『熊野の御本池のさうし』『三人法師』『猫のさうし』『横笛草紙』、『古今著聞集』

以上、大系本文（日本古典文学・喃本）データベース <https://base3.nijl.ac.jp/>（旧・日本古典文学本文データベース）を利用、本文の確認に日本古典文学大系を使用

近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ編（1999）『天草版平家物語 語彙用例総索引 1～4』勉誠出版

池田廣司・北原保雄（1972・1973・1983）『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇上・中・下』表現社

北原保雄・村上昭子編（1984）『大蔵虎明本狂言集総索引 1 脇狂言之類』武蔵野書院

北原保雄・鬼山信行編（1986）『大蔵虎明本狂言集総索引 2 大名狂言之類』武蔵野書院

北原保雄・小山栄一編（1982）『大蔵虎明本狂言集総索引 3 智類・山伏類』武蔵野書院

北原保雄・山崎誠編（1989）『大蔵虎明本狂言集総索引 4 鬼類・小名類』武蔵野書院

北原保雄・吉見孝夫編（1983）『大蔵虎明本狂言集総索引 5 女狂言之類』武蔵野書院

北原保雄・土屋博映編（1984）『大蔵虎明本狂言集総索引 6 出家座頭類』武蔵野書院

北原保雄・大倉浩編（1986）『大蔵虎明本狂言集総索引 7 集狂言之類』武蔵野書院

#### 近世の文学作品

『醒睡笑』『好色一代男』『好色五人女』『曾根崎心中』『冥途の飛脚』『心中天の網島』『國性爺合戦』『折たく柴の記』『雨月物語』『洒落本 遊子方言』『黄表紙 本金々先生栄華夢』『黄表紙本 江戸生艶気樺焼』『東海道中膝栗毛』『椿説弓張月』『浮世風呂』『洒落本 辰巳之園』『春色梅児誉美』『春色辰巳園』以上、大系本文（日本古典文学・喃本）データベース <https://base3.nijl.ac.jp/>（旧・日本古典文学本文データベース）を利用、本文の確認に日本古典文学大系および『喃本大系 第2巻』武藤禎夫・岡雅彦編（1976）東京堂出版 を使用

#### 近代の文学作品

小林智賀平校注（1967）『安愚楽鍋』岩波書店

『新潮文庫の100冊 CD-ROM版』（1995）『新潮文庫明治の文豪 CD-ROM版』

(1997)『新潮文庫の100冊 CD-ROM版』(1995)新潮社 より、以下の作品を調査した。

文語文：

『舞姫』『うたかたの記』『にごりえ』『たけくらべ』

口語文：

『浮雲』『めぐりあひ』『金色夜叉』『吾輩は猫である』『坊っちゃん』『草枕』『破戒』『蒲団』『三四郎』『それから』『キタ・セクスアリス』『家』『阿部一族』『こころ』『杜子春』『多情仏心』『痴人の愛』『雪国』『路傍の石』

## 第2章 中世における文末表現「と思ふ」と「と存ず」

### 1. はじめに

第1章では、中世において文末表現「と思ふ」が使用されており、特に「意志＋と思ふ」の形が多用されていたことを明らかにしたが、中世には文末表現「と思ふ」と同時に、(1)(2)のような「と存ず」「とおぼゆ」という文末表現が用いられていた。

- (1) して大略平家もあそここなれども、大方聞き通いたかと存ずる。(『天草版平家物語』 p.811)
- (2) 「いかさま、敵は小勢なりと覚ゆるぞ。馳せ向つて追ひ散らせ」(『太平記』 <天正本>1 p.383)

この文末表現「と存ず」「とおぼゆ」については、中世語資料において多くの用例がみられる。序章でも述べたように、中世語にみられる文末の思考動詞が、近・現代語のそれと同等の意味・機能で使われているかについては慎重な検討が必要だが、少なくとも一人称で、「と＋思考動詞の終止形」という複合形式が一定数用いられていることが確認でき、これらの形式については、現代語の文末思考動詞につながる可能性のあるものとして検討したい。

中世における文末表現「と存ず」も「と思ふ」と同様に、話手の態度を示す機能を持っている一種のモダリティ表現であるといっていよう。現代語における文末表現「と思う」「と存ずる」両表現の差異は、あらたまり度の違いにあると考えられるが、中世における状況はどのようなものであったか。文末表現「と思う」による推量表現が多用されるのは近代以降であるが、それ以前に、文末表現「と存ず」はどのように使われていたのであろうか。

本章では、文末表現「と思ふ」「と存ず」がともにみられる中世語資料を主な対象とし、まず両表現の最も大きな差異であると考えられる待遇面での性格を検討するために、話手・聞手の関係や待遇面の観点から文末表現「と思ふ」と「と存ず」を比較したい。次にそれぞれの表現がトの内部にとる情報を検討して、文末思考動詞としての両表現の用法上の相違点を考察する。

### 2. 資料と分析方法

会話文に文末表現「と思ふ」「と存ず」がみられる中世の資料として、軍記物語や説話を中心に調査した。調査した資料については、本章末尾に【資料】として

挙げた。軍記物語については、諸本によって出現状況に差がある可能性を考え、より古態をとどめている諸本や、『平家物語』の読み本系と語り本系、天草版等についても調査することとした。

調査にあたっては、「文末でトをとり、発話者主体で非過去・非否定」の条件に該当する用例のみを考察対象とした。また、待遇面での性格を検討するために、会話文での用例を考察の対象とし、地の文および会話文内の引用における用例は考察対象から除外した。

### 3. 中世における文末表現「と思ふ」と「と存ず」の使用状況

中世における文末表現「と存ず」と「と思ふ」の出現数を、話手と聞手の身分関係別に表に示す。

【表1】話手・聞手の関係別文末表現「と存ず」と「と思ふ」の使用状況

	と存ず			と思ふ		
	話手< 聞手	話手≥ 聞手	その他	話手< 聞手	話手≥ 聞手	その他
保元物語(半井本)			1		3	5
保元物語(金刀比羅本系)			1		2	2
平治物語(陽明文庫本・学習院本)			1			
平治物語(半井本)			1		3	
平治物語(金刀比羅本系)	1				3	
平家物語(覚一本)	5				4	9
平家物語(百二十句本)	3		1		9	2
平家物語(延慶本)	8	1	2		9	10
愚管抄					1	
宇治拾遺物語				1	5	5
古今著聞集				2	1	1
太平記(神宮徴古館本)	2	1	7	2	7	3
太平記(天正本)	10	4	10		10	6
太平記(流布本系)	6	1	9	1	13	4
曾我物語	3		2		3	3
義経記	1				1	1
天草版平家物語	8		4		11	1
虎明本狂言集	6	3	260		14	12
御伽草子	2		1		1	3

※『平治物語』(陽明文庫本・学習院本)は、上巻が陽明本・中下巻が学習院本。

【表1】では、文末表現「と存ず」「と思ふ」について、聞手の方が話手より上位として扱われる【話手<聞手】、話手の方が聞手より上位であるか、同等である【話手≧聞手】および【その他】に分けて用例数を調べた。【その他】には、聞手が複数いる場合や、恋人関係、敵対関係等、上下関係が判断し難い用例を分類した。なお、西田（1974）は、『平家物語』における敬語を、「1. 話し手と聞き手との間に身分的な上下関係がある場合」「2. 話し手と聞き手とがほぼ対等である場合」「3. 話し手と聞き手とが親子・夫婦などの関係にある場合」「4. 会話の文における敬語の文学的的技巧」にわけて考察しているが、本章では主にこのうちの3を【その他】として分類している。

【表1】をみると、全体の用例数は決して多いとはいえないが、文末表現「と存ず」は聞手の方が話手より上位として扱われる【話手<聞手】の例が多い。一方、文末表現「と思ふ」は話手の方が聞手より上位であるか、同等である【話手≧聞手】の例が多い。また、文末表現「と存ず」の形で三人称の下位主体が存在している例はないため、本動詞ではなく、発話時の心的態度を表す形式として機能しているとみられる。

資料としては、軍記物語および狂言に用例が多くみられることが特徴的である。軍記物語は、諸本によって出現数に差はみられるものの、話手と聞手の身分関係という観点での出現傾向には大きな違いはみられない。すなわち、どの資料においても、文末表現「と存ず」は目上の聞手へ、文末表現「と思ふ」は同等以下の立場の聞手に用いられていることが多いようである。次節以降で、両表現について、話手と聞手の関係に注目し、比較する。

### 3. 1. 上下関係による使用状況

#### 3. 1. 1. 文末表現「と存ず」

【表1】をみると、文末表現「と存ず」は、【話手<聞手】の場合に多く使われている。これは従来「存ず」が謙讓表現として扱われてきたことに沿うものである。特に軍記物語でその傾向が顕著であり、目上の聞手に対し文末表現「と存ず」が用いられている例が多くみられる<sup>5</sup>。

(3) 良あつて、頭能卿申されけるは、「(略)。再往の勅定ただ供奉せよとの一事に定めぬと存じ候ふ。御痛はしく候へども、早々」とて、御車を二輛指しよせ、御簾を揚げてすすめ申されければ、(略) (話手：頭能／聞手：新院 『太平記』<天正本> 3 p.500)

<sup>5</sup> 以降、本章では用例の後に、話手名・聞手名・資料名・【資料】にあげたテキストでのページ数を（ ）内に示す。

一方、話手の方が聞手より上位であるか、同等である【話手 $\geq$ 聞手】の場合に文末表現「と存ず」が使用されるケースも、軍記物語においては少数ながらみられる。そのような例では、1例を除き、(4)のように「候」が後接しない形で用いられていた。

- (4) 二、三里か程打送り涙をなかして申けるは、「(略)、殊更仁木越後守に笑れむ事、我一人か恥と存するなり、(略)」(話手：芳賀兵衛入道禪可／聞手：嫡子伊賀守公頼 『太平記』<神宮徴古館本> p.1020)

この「入道」の身分の者については、【話手 $\geq$ 聞手】の場合に文末表現「と存ず」を使用している例が他にもみられ、聞手に関わらずあらたまった語り方をする身分の人物として描かれていると考えられる。

なお、『虎明本狂言集』においても、話手と聞手の立場が同等と思われる場面で文末表現「と存ず」が用いられている例がみられた(詳細は第3章で述べる)。

以上のように、文末表現「と存ず」は主として【話手<聞手】の場面で用いられる表現である。特に、「候」が後接している場合は【話手<聞手】の例が多く、「と存じ候」の形で聞手に対する敬意的配慮をあらわしていることがわかる。一方、話手が聞手と同等以上の立場にある【話手 $\geq$ 聞手】の場面で文末表現「と存ず」が使われている場合は、「候」が後接しない「と存ずる」「と存ずる也」等の表現となっている。

このことから、文末表現「と存ず」の敬意的配慮には、「候」等、共起する敬語助動詞・補助動詞との関連がうかがえ、「と存ず」単独ではなく、「と存ず+敬語助動詞・補助動詞」という形で聞手への配慮を表していると思われる。

### 3. 1. 2 文末表現「と思ふ」

文末表現「と思ふ」は、【話手 $\geq$ 聞手】の場面で用いられる例が多く、主従関係における「主」にあたる人物や、父子関係における「父」にあたる人物が文末表現「と思ふ」を使用している例が多くみられる。次の(5)の例では、息子である「八郎」に対して、その父にあたる「入道殿」が、文末表現「と思ふ」を使用している。

- (5) 入道殿の給ひけるは、「(略) さればわ殿原はわかければ、兎も振舞給へ、角もふるまひ給へ。入道は義朝をたのみて出むと思ふぞ。(略)」との給ふ。八郎是を聞て、色を失て音もせず。(話手：入道殿／聞手：八郎 『保元物語』<金刀比羅本> p.138)

後接する助詞・助動詞という点からみても、文末表現「と思ふ」は文末表現「と存ず」と異なった傾向をみせており、文末表現「と思ふ」には「なり」や「ぞ」が後接した形が多い。

- (6) 僧正「行て火ともして來よ。こゝに我衣はがんとしつる男の、俄に失ぬるがあやしければ、見んと思ふぞ。法師ばら、よび具して來」と、のたまひければ、(略) (話手：僧正／聞手：小法師 『宇治拾遺物語』p.389)
- (7) 神のゝ給はく、「腰のしも常に火もゆるがごとし。六月に又内裏へまいらんと思ふなり」との給て、則見え給はず。(話手：神／聞手：貞崇法師 『古今著聞集』 p.81)

なお、「なり」の後接する形としては、「と思ふなり」「と存ずなり」ともみられたが、「ぞ」の後接する形としては「と思ふぞ」はみられるものの、「と存ずるぞ」の形は今回確認できなかった。

また、上の(6)(7)の用例では、地の文の中で、文末表現「と思ふ」の発話者に対し、「のたまひければ」「の給はく」といった尊敬語が用いられていること、発話の中に「來よ」「よび具して來」等の命令文があることから、ここで文末表現「と思ふ」を使用している人物の位相が相対的に高いことがうかがえる。

しかし、文末表現「と思ふ」には【話手<聞手】の例がないわけではなく、再度【表1】をみると、6例の【話手<聞手】の用例がある。これらの例はどのようなものであるか、検討しておきたい。

次の(8)は、呉越の戦いの故事が書かれた例であり、漢文訓読調である。今回の調査では、軍記物語において、【話手<聞手】の対話で文末表現「と思ふ」を使用する例は、故事からひいた話以外にはみられなかった。用例数が少ないため、一般化はできないが、漢文由来の文脈では、文末表現「と思ふ」を【話手<聞手】の場合に使うことが許容される可能性がある。

- (8) 越王ノ御前ニ進出テ申ケルハ、「生ヲ全クシテ命ヲ待事ハ遠クシテ難ク、死ヲ輕クシテ節ニ隨フ事ハ近クシテ安シ。君暫ク越ノ重器ヲ焼捨、太子ヲ殺ス事ヲ止メ給へ。臣雖不敏、欺吳王君王ノ死ヲ救ヒ、本國ニ歸テ再ビ大軍ヲ起シ、此恥ヲ濯ント思フ。(略)」(話手：大夫種／聞手：越王 『太平記』 <流布本> 1 p.144)

『宇治拾遺物語』『古今著聞集』でも文末表現「と思ふ」が【話手<聞手】の場合に用いられているが、これらの作品には文末表現「と存ず」が一例もなく、これらの説話文学では、(9)(10)のように、文末表現「と思ふ」が身分の上下に

関わらず使われているのだと考えられる。

- (9) 童の申やう、「日の出入所は見ゆ。洛陽はまだ見ず。されば日の出る所はちかし、洛陽は遠しと思ふ」と申ければ、孔子、「かしこき童なり」と、感じ給ひける。(話手：童／聞手：孔子 『宇治拾遺物語』 p.347)
- (10) 昔、母後の御夢に胡僧來て、「君の胎に託せんと思ふ」と申けり。其後懷妊し給けり。(話手：胡僧／聞手：母后 『古今著聞集』 p.85)

また、(9)の例は『列子』に基づく話で、(8)の例と同様に、漢文由来の文脈で文末表現「と思ふ」が用いられているものである。加えて、話手が「童」であり、子どもの使う表現としては文末表現「と存ず」が硬質であるとされた可能性がある。また、(10)の例は夢の中の言葉であるが、話手が「胡僧」、つまり外国の僧であることが関係していようか。

このように、文末表現「と存ず」は主に【話手<聞手】の場合に用いられ、文末表現「と思ふ」は主に【話手≧聞手】の場合に用いられている。「候」や「ぞ」等、共起する敬語助動詞や終助詞等の点からも、文末表現「と存ず」と文末表現「と思ふ」とに異なった傾向がみられた。また、【話手<聞手】の場合に文末表現「と思ふ」を使用する例が数例みられたが、中国の故事が出典の話や、文末表現「と存ず」がその作品内に使用されていない場合等に限定されていた。

### 3. 2. 上下関係が明確でない用例について

ここで、聞手が多数いる等の理由により、「その他」に分類した例を挙げる。

#### 3. 2. 1. 文末表現「と存ず」

聞手が多数いるような公の場面で自らの考えを表明する際に文末表現「と存ず」が使用されている例が複数みられる。

- (11) 進出て申けるは、「縦守殿は退給とも、維行は罷留りて、八郎殿の大矢をあたりてみんと存候。(略)」(話手：伊賀國住人、山田小三郎維行／聞手：多数 『保元物語』<金刀比羅本> p.101)
- (12) (略) 越後守仲時モ、「此義ヲ存ズレ共、佐々木トテモ今ハ如何ナル野心カ存ズラント、憑少ク覺レバ、進退谷テ、面々ノ意見ヲ訪申サント存ズル也。(略)」トテ、五百餘騎ノ兵共、皆辻堂ノ庭ニゾ下居タル。(話手：越後守仲時／聞手：糟谷三郎、五百餘騎の兵共 『太平記』<流布本> 1 p.310)

(12) の例においては、聞手は従者である糟谷三郎および五百餘騎の兵共であるが、文末表現「と存ず」が使われており、身分の上下に関わらず、多数の聞手がいる公の場では文末表現「と存ず」が使用されやすいようである。なお、この例では、文末表現以外にも「此義ヲ存ズレ共」「野心カ存ズラント」と動詞「存ず」が用いられている。また、「越後守仲時」については、他にも多数の聞手（軍勢共）に対して文末表現「と存ず」を使用している例があった。

また、『太平記』（神宮徴古館本、天正本、流布本系の三種とも）における文末表現「と存ず」は、【話手<聞手】の場面で使われている時は「候」が後接している一方、(12) の例のように、【話手≥聞手】の場面で使われている時は、「候」が後接していないという傾向がある。

『天草版平家物語』の右馬の允と喜一検校の会話では、互いに「と存ず」を用いていることが注目される<sup>6</sup>。物語の語り手による会話という点で、物語内の登場人物の会話とは別の次元の会話であるが、右馬の允と喜一検校の会話においては、上下関係によって文末表現「と存ず」が使用されているとはいえない。目上の者への配慮というより、あらたまった語り方として文末表現「と存ず」が使用されているようである。

(13) 右馬. して大略平家もあそここなれども、大方聞き通いたかと存ずる。

喜. さればされば聞きも聞かせられ、語りも語りまらしたことぢや；(略)

(話手：右馬の允／聞手：喜一検校『天草版平家物語』 p.811)

『天草版平家物語』においては、文末表現「と存ず」に「候」が後接する例はみられない。また、第3章で述べるが、『虎明本狂言集』にも、「候」の後接しない「と存ず」が多くみられる。現代語において文末表現「と存ずる」は、基本的には「と存じます」という、「ます」のついた形でのみ使用されており、また、中世軍記物語においても「と存じ候」の形が多数みられ、「と存ず」に敬語助動詞や補助動詞等を後接させて用いる形は一般的であると考えられる。これとは異なり、『天草版平家物語』や『虎明本狂言集』といった、中世の口語的な資料において、文末表現「と存ず」に敬語形式が後接しない例がみられることは、一つの特徴であるといえる。

<sup>6</sup> ただし、喜一の使用する「と存ず」は、「…を〜と存ず」の形であり、本動詞としての性格が強いため、表内の数字には含めていない。

(i) 喜. そのおことぢや. 私が長いことを語りまらしたよりも、退屈もなう聞かせられたを奇特と存ずる. (『天草版平家物語』 p.821)

### 3. 2. 2. 文末表現「と思ふ」

(11) (12) で、聞手が多数いる場面において文末表現「と存ず」が使用されている例をみたが、次の(14)は、文末表現「と思ふ」が聞手が多数いる場面で使用されている例である。

- (14) 三位中將守護の武士にの給ひけるは、「(略)。いま一度對面して、後生の事を申をかばやとおもふなり」(話手：三位中將／聞手：武士ども 『平家物語』<覺一本>下 p.373)

文末表現「と存ず」については、文末表現「と存ず」が使用されにくい【話手≧聞手】の場合でも、聞手が多数いるという場面においてはその使用がみられた。しかし、文末表現「と思ふ」については、一対一の対話であっても、一対多という場面であっても、【話手<聞手】の場合にはその用例が少ない。すなわち、文末表現「と思ふ」が、聞手が多数いる状況で使用されている場合、その話手は(15)のように、その場にいる人物の中で高い立場にある人物であることが多く、その場面の中で立場の低い者は、一人の聞手に対しても、大勢の聞手に対しても、文末表現「と存ず」を用いる傾向にある。

さて、母娘関係や恋人関係の場合も、身分の上下という観点では判断できず、【その他】に分類しているが、このような親疎の「親」にあたる関係内では、文末表現「と思ふ」を使用する傾向がある。文末表現「と存ず」は、子と母、男兄弟といった関係においては息子や弟からの発話の中にみられたが、母娘や恋人同士、女性同士の発話の中には、その使用を確認できなかった。次の(16)は、曾我兄弟の母と遊女虎による女性同士の会話で文末表現「と思ふ」が使われている例である。

- (15) 「(略) たゞひとへに前世の宿執にひかれて、たがひに善知識になりたまひぬと、あまりにたつとく、あわれにおぼえて、われらまでも、一蓮の縁をむすばばやと思ひ候也。(略)」(話手：曾我兄弟の母／聞手：虎 『曾我物語』 p.418)

次の(16)は、話手と聞手が夫婦関係にある例である。后より帝の方が上位とも考えられるが、ここで文末表現「と思ふ」が使用されているのは、身分の上下関係によるという可能性のほか、親疎の「親」にあたる関係であるためであるとも考えられる。

- (16) みかど御驚きありて、今はかなはじとやおぼしめしけん、后に向ひ、仰

せありけるは、「(略) 御誕生まではこれに候(う)て、見參らせ候はんと思ひ候へども、なかへそれもいかゞと思ひ候。御なごり惜しく候へども」(話手：みかど／聞手：后 『御伽草子』「熊野の御本地のさうし」p.419)

### 3. 3. 『虎明本狂言集』の文末表現「と存ず」について

『虎明本狂言集』には、極めて多くの文末表現「と存ず」が用いられているが、3. 2. まででみてきた軍記物語等の資料とはその性格を異にしている。例えば、次の(17)の例のように、名乗りや観客に対する自己紹介的な場面等、特に物語内での聞手を想定していない文末表現「と存ず」の使用例が非常に多い。

(17) まかり出たる者は、はりまの国のお百姓でござる、毎年御年貢に、みげうしよを拾束もつて参る、いそひであげうと存る、(話手：播磨の国の百姓 「かくすい」 p.49)

上記(17)は、物語内の特定の誰かにむかって話しかけているのではなく、話手となる登場人物がその段で初めて登場し、自己紹介と、これから何をするつもりかを、いわばナレーションがわりに述べる話型である。『虎明本狂言集』において文末表現「と存ず」はその多くがこのような話型で用いられており、大名・男・百姓等様々な登場人物により同じように用いられ、使用者の位相等には無関係である。物語の内部での会話というよりは、観客を意識してのあらたまった言葉遣いであるとみられる。

これは、次の(18)のような独語的心話の用例からもうかがえる。

(18) (他国の者も年貢に「初雁」を供出する予定であることを知って) やれへにがへしい事で御ざる、それがしが鴈がはやいとぞんじたれば、あれも鴈をもつてまいる、さりながら、たばかつて、某がさきへあげうと存る (話手：和泉の国の百姓 「鴈かりかね」 p.55)

心話であるから、本来は表現としての配慮は不要であるはずだが、観客を意識してか、文末表現「と存ず」を用いている。

また会話の例として、次の(19)のように、出会ったばかりで身分の明らかでない者に対する発話の中でも文末表現「と存ず」の例がみられた。話手の「太郎冠者」と聞手の「新座の者」は初対面であり、親疎の「疎」の関係にあたるため、あらたまった言葉遣いをしているものと考えられる。

- (19) 誠にかりそめに言葉をかけてござ有に、御同心あつて満足致た、是と申もかりそめながらたしやうのゑんかと存るよ (話手：太郎冠者 聞手：新座の者 「鼻取ずまふ」 p.185)

このように、『虎明本狂言集』においては、文末表現「と存ず」は、穉田 (1975) のいう場面上の特定の「支配的尊者」を意識した謙讓表現としてというほどではなく、公的で、ある程度の遠慮を必要とする場合に用いられる文末思考動詞といえる。

なお、ロドリゲス『日本大文典』では、「ZONZVRV (存ずる)」の項で、「〇知る、考へる、思ふといふ意味であつて、尊敬せられる人と話す場合に使われる。若者や身分の低い者と話すのに Zonjenuca? (存ぜぬか) といふのはよくない。Xiranuca? (知らぬか) などといふべきである」と述べられているが、この記述は、当時から謙讓表現というより、単なるあらたまり語として用いられつつあったことをうかがわせるものである。

また、『虎明本狂言集』では、同じく中世の口語を反映するとされる『天草版平家物語』と同様、文末表現「と存ず」が「候」のような敬語助動詞・補助動詞を伴わない形で、あらたまつた、公的な性格を持つ思考動詞として用いられる傾向がみられた<sup>7</sup>。

以上のように、軍記物語を中心とした中世語資料における文末表現「と存ず」は、「候」等を伴って上位者に対する敬語表現として用いられ、また敬語助動詞・補助動詞を伴わない場合にはあらたまりの性格を持ち、公的な場面でも用いることができる文末思考動詞である。一方文末表現「と思ふ」は、使用者が場の上位者であるか、ある程度親密で私的な関係で用いられる表現であつた。

なお、今回の調査では文末表現「と思ふ」については軍記物語で女性の使用がみられたのに対し、女性が文末表現「と存ず」を使用している例は『虎明本狂言集』以外の資料ではみられなかった。ただし、そもそもこれらの資料においては女性の発話自体が少ないため、男女差についてはさらに用例を収集し検討する必要がある。

---

<sup>7</sup> なお、この「と存ず」のように、『虎明本狂言集』において、謙讓語を用いる時に丁寧語にあたる形式が用いられない例について、森山 (2003) は次のように述べている。

注目すべきなのは、これらの丁寧語を欠く例においては、「聞き手」に対する何らかの待遇表現が、すでになされているということであろう。つまり、話題の人物が聞き手と一致している場合、聞き手でもある話題の人物に対する尊敬語を用いることによって、すでにその「話題の人物兼聞き手」を待遇してしまっているわけであるから、そこに重ねて丁寧語を用いる必要がなかったと考えることができるのではないだろうか。(p.219)

#### 4. 中世における文末表現「と存ず」と「と思ふ」の用法上の相違

ここまで、文末表現「と存ず」と「と思ふ」について、敬語や位相に関する側面から、話手・聞手の傾向を明らかにした。動詞「存ず」は一般的に、「思ふ」の謙讓語である、という説明がしばしばなされ、そのような面は3. でみた用例や、ロドリゲス『日本大文典』の記述からも認められる。ただしそのほかに違いがないかといえば決してそうではなく、文末思考動詞によるモダリティ表現としての用法の点でも相違がみられる。

ここでは文末表現「と存ず」と「と思ふ」のトの内部を調査し、A類（意志・願望）・B類（推量・疑問）・C類（判断・叙述等）の三種にわけ、その出現傾向の違いに注目した。なお、【表2】のうち、『平家物語』『保元物語』『平治物語』『太平記』は諸本のうち一つを掲載した。

【表2】 文末表現「と存ず」と「と思ふ」のトの内部別用例数

	と存ず			と思ふ		
	A類	B類	C類	A類	B類	C類
保元物語(金刀比羅本系)	1			4		
平治物語(金刀比羅本系)	1			3		
平家物語(覚一本)	3		2	13		
愚管抄				1		
宇治拾遺物語				10		1
古今著聞集				4		
太平記(流布本系)	6	5	5	18		
曾我物語	2	1	2	6		
義経記			1	1		1
天草版平家物語	5	3	4	9	2	1
虎明本狂言集	252	11	6	20	5	1
御伽草子	1	1	1	2	2	

【表2】を確認してみると、第1章でも確認した通り、軍記物語を中心とした中世語資料においては、文末表現「と思ふ」はトの内部の情報がA類の意志・願望に偏っている。しかし、文末表現「と存ず」については、A類からC類の用例が幅広くみられる。例えば『平家物語』や『太平記』、『曾我物語』では、「A類＋と存ず」と「B類／C類＋と存ず」が同程度に使われていることがわかる。このように、文末表現「と存ず」は文末表現「と思ふ」の謙讓表現であるが、トの内部にとる情報の範囲という観点でいえば、文末表現「と思ふ」よりも広い用法で用いられていたといえる。なお、トの内部にB類・C類をとる中世の文末思考動詞として、「とおぼゆ」がある。この文末表現「とおぼゆ」については、第4章であらためて検討する。

## 5. おわりに

中世における文末表現「と思ふ」「と存ず」についてみたところ、文末表現「と存ず」は、基本的には【話手<聞手】の場合に多く用いられ、その際は「候」のような敬語助動詞・補助動詞を伴うことが多い。【話手≧聞手】の場合や、多数の聞手に向かったの公の場での発言等は、「候」のような敬語表現は必須ではなく、文末表現「と存ず」自体は、公的なあらたまり語としての性格が強いと考えられる。一方文末表現「と思ふ」は、使用者が場の上位者であるか、ある程度親密で私的な関係の場合に用いられる表現であった。

上記の傾向は、特に軍記物語において顕著なものであるが、説話においては文末表現「と存ず」の使用がみられず、目上の聞手に対しても文末表現「と思ふ」を使う例がみられた。

軍記物語を中心とした中世語資料においては、文末表現「と思ふ」のトの内部の情報は願望・意志に偏っており、主観明示の定型的表現であった。一方、文末表現「と存ず」については同じ資料の中に「意志・願望+と存ず」「推量・疑問+と存ず」「判断・叙述+と存ず」いずれの用例もみられた。文末表現「と存ず」は文末表現「と思ふ」の謙讓語であるが、文末表現「と存ず」のトの内部にとる情報の範囲は、文末表現「と思ふ」より広がったと考えられる。

【資料】※（ ）内は資料の成立時期を表す。

保元物語（13C 前）●半井本：『新日本古典文学大系 43 保元物語 平治物語 承久記』1992 岩波書店 ●金刀比羅本系：『日本古典文学大系 31 保元物語・平治物語』1961 岩波書店

平治物語（13C 前）●陽明文庫本・学習院本：『新日本古典文学大系 保元物語 平治物語 承久記』●半井本：坂詰力治他編『半井本平治物語本文および語彙索引』1997 武蔵野書院●金刀比羅本系：『日本古典文学大系 31 保元物語・平治物語』

平家物語（13C 前）●覚一本：『新日本古典文学大系 44・45 平家物語上・下』1991・1993 岩波書店 近藤政美他編『平家物語<高野本>語彙用例総索引 自立語篇上・中』1996 勉誠社●百二十句本：『新潮日本古典集成 平家物語上・中・下』1979・1980・1981 新潮社●延慶本：北原保雄他編『延慶本平家物語索引 篇上』1996 勉誠社 北原保雄他編『延慶本平家物語本文篇上・下』1990 勉誠社

愚管抄（1220）『日本古典文学大系 86 愚管抄』1967 岩波書店

宇治拾遺物語（13C 前）『日本古典文学大系 27 宇治拾遺物語』1960 岩波書店

古今著聞集（1254）『日本古典文学大系 84 古今著聞集』1966 岩波書店

太平記 (14C 後) ●神宮徴古館本:長谷川端他編『神宮徴古館本 太平記』1994 和泉書院 ●天正本:『新編日本古典文学全集 54~57 太平記 1~4』1994・1996・1997・1998 小学館●流布本系:『日本古典文学大系 34・35 太平記一・二』1960・1961 岩波書店 『日本古典文学大系 36 太平記三』1962 岩波書店  
曾我物語 (南北朝頃) 『日本古典文学大系 88 曾我物語』1966 岩波書店  
義経記 (室町時代) 『日本古典文学大系 37 義経記』1959 岩波書店  
御伽草子 (室町時代末) 『日本古典文学大系 38 御伽草子』1958 岩波書店  
※日本古典文学大系は、用例検索の際に、大系本文 (日本古典文学・嚙本) データベース <https://base3.nijl.ac.jp/> (旧・日本古典文学本文データベース) を利用  
近藤政美他編『天草版平家物語語彙用例総索引 (1)』(1592) 1999 勉誠出版  
J.ロドリゲス著 土井忠生訳注『日本大文典』(1604) 1955 三省堂  
池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇上・中・下』(1642) 1972・1973・1983 表現社  
(※『大蔵虎明本狂言集の研究』の下巻所収の「萬集類」については、話手・聞手の明確でない例が多いため、今回は考察対象外とした)  
日国オンライン <http://www.japanknowledge.com/stdsearch/displaymain>

### 第3章 『虎明本狂言集』における「と＋思ふ」と「と＋存ず」

#### 1. はじめに

動詞「存ず」は、一般的に「思ふ」の謙讓語、あるいはあらたまり語とされる。前章で、『平家物語』『保元物語』『太平記』『義経記』等の中世軍記物語やキリシタン資料の『天草版平家物語』では、基本的に文末表現「と存ず」は話手が聞手に対し、主従関係や父子関係等の観点からみて同等以下の立場の時に、文末表現「と思ふ」は話手が聞手と同等以上の立場の時に使用されること、見方をかえれば、文末表現「と存ず」は目下の聞手に対する用例が少なく、一方、文末表現「と思ふ」は目上の聞手に対してはその使用が少ないことを確認した。

近代以降、推量表現に準ずる文末表現「と思ふ」が多く用いられるようになる等、文末思考動詞の発達が見られるが（第1章）、それ以前の時代に思考動詞による表現が存在していなかったわけではなく、中世語においても文末表現「と思ふ」の他、文末表現「と存ず」等、思考動詞を用いた表現が多用されていたのである。

しかし、上記のような、文末表現「と存ず」は目下の聞手に対する使用が少なく、文末表現「と思ふ」は目上の聞手に対してはその使用が少ないという傾向は、文末表現に限られるものなのだろうか。例えば、「と思ひて」「と存じて」のような文中の形式においても、文末表現でみられたのと同様の傾向がみられるのであろうか。

本章では、文末に限らず、トを伴う動詞「思ふ」および「存ず」（以下、それぞれ「と＋思ふ」「と＋存ず」と表記する）について、『虎明本狂言集』を例に話者や場面の情報に着目して検討したい。

資料としては、数量的・総合的な考察が可能な、『日本語歴史コーパス 室町時代編Ⅰ 狂言』のコーパスデータを利用する。『日本語歴史コーパス 室町時代編Ⅰ 狂言』のコーパスデータには、形態論情報や、話者、文体情報等が、全ての語に対して付されており、『虎明本狂言集』における言語の網羅的な分析を行うのに適している。このコーパスデータの話者情報は、本文内に話者が示されていない場合にも可能な限り付与されており（小林・市村 2013, p.328）、本章ではその情報を利用して考察を行う。また、両表現の使用の選択にあたり、話者の属性や使用場面はどのように関与しているのかについても考察したい。

なお、当然ながら底本は現代仮名遣いでは書かれていないが、コーパス内での[語彙素]の表記にあわせ、本章では一部の表中および表に言及した箇所においては「思う」「存ずる」等現代語の表記で示す。

## 2. 「と+思ふ」と「と+存ず」の使用状況

### 2. 1. 「と+思ふ」「と+存ず」の使用状況の概略

【表1】『虎明本狂言集』において用いられる動詞（上位30位）

	語彙素	品詞	粗頻度		語彙素	品詞	粗頻度
1	御座る	動詞-非自立可能	3380	16	聞く	動詞-一般	585
2	言う	動詞-一般	3308	17	行く	動詞-非自立可能	578
3	為る	動詞-非自立可能	2201	18	思う	動詞-一般	522
4	有る	動詞-非自立可能	2017	19	出でる	動詞-一般	514
5	申す	動詞-非自立可能	1491	20	居る	動詞-非自立可能	453
6	参る	動詞-非自立可能	1478	21	来る	動詞-非自立可能	446
7	候う	動詞-非自立可能	1141	22	因る	動詞-一般	379
8	致す	動詞-非自立可能	903	23	置く	動詞-非自立可能	374
9	取る	動詞-一般	785	24	仰せる	動詞-一般	354
10	成る	動詞-非自立可能	784	25	遣る	動詞-非自立可能	350
11	参らせる	動詞-非自立可能	741	26	急ぐ	動詞-一般	334
12	存ずる	動詞-一般	731	27	下される	動詞-非自立可能	289
13	見る	動詞-非自立可能	662	28	知る	動詞-一般	283
14	然る	動詞-一般	660	29	畏まる	動詞-一般	267
15	持つ	動詞-一般	617	30	掛ける	動詞-非自立可能	255

『虎明本狂言集』における「と+思ふ」「と+存ず」の考察を行う前に、動詞「思ふ」「存ず」自体の使用状況の概略を確認しておきたい。【表1】に『虎明本狂言集』のコーパスデータにおいて用いられている動詞のうち、粗頻度の上位30位の語を示す。【表1】をみると、「存ずる」が12位、「思う」が18位となっている。なお、【表1】のうち補助動詞としての用法がある動詞については品詞が「動詞-非自立可能」となっているが、これらを除くと、「存ずる」が3位、「思う」が7位となり、『虎明本狂言集』の中でどちらの動詞も多く用いられていることがわかる。

【表2】「思ふ」「存ず」の[本文種別]別用例数

語彙素	ト書き	引用-会話指示	引用-典拠	引用-典拠・和歌	会話	注釈	計
思う	5	24	1	1	487	4	522
存ずる	1	15			713	2	731
計	6	39	1	1	1200	6	1253

\*「引用-会話指示」は、「又次第にてすれば、【やどへ帰りつゐた】と云て、」のように、ト書きの中に示された台詞をあらわす。「引用-典拠」は、「古本にいはいく、【三面の大こくを、…】」のように、古典等の文からの引用部分をあらわす。

また、【表2】に、語彙素「思う」「存ずる」の用例数を[本文種別]別に示す。「思う」は522例中487例(93%)が、「存ずる」は731例中713例(98%)が「会話」での例である。

なお、【表1】の「動詞 - 一般」のうち、粗頻度が上位の語について、同様に「会話」の用例の比率をみた結果、「言う」が約46%、「取る」が約73%、「然る」が約92%<sup>8</sup>、「持つ」が約79%、「聞く」が約88%と、動詞により差があり、舞台上で視覚的に確認できる何らかの動作を行う「言う」「取る」「持つ」等は、比較的ト書きでの用例もみられるのに対し、実際の行動が動きとしてみえにくい「存ずる」「思う」等の思考動詞や「聞く」等は、会話文での用例の比率が高くなっている。

さて、トをとる「と+思ふ」「と+存ず」の形についても同様の傾向がみられるだろうか。現代語において、文末表現「と思う」は一種のモダリティ表現として用いられることもあり、また、トを伴わない動詞「存ず」には、次のように、「思う」ではなく「知る」の謙譲語としての用例が含まれている。

(1) 「某をゑしらぬか」「いや何ともぞんぜぬ」(福の神 上 p.14)

このように、トの有無により、動詞「思ふ」「存ず」は別の性質を示すことがあるが、動詞「思ふ」「存ず」と、トをとる「と+思ふ」「と+存ず」とで、文体面での差異はあるのだろうか。

【表3】に、「と+思ふ」「と+存ず」について、【表2】と同様の調査を行った結果を示す。「と+思ふ」は363例中337例(約93%)、「と+存ず」は531例中523例(約98%)が「会話」の用例となっており、【表2】の結果と同様、両表現とも会話文での用例が主となっていることがわかる。なお、動詞「思ふ」のうち、トをとる用例は約70%、同様に動詞「存ず」のうち、トをとる用例は約73%であった。以降、トをとる「と+思ふ」「と+存ず」の形式を具体的に考察していく。

【表3】「と+思ふ」「と+存ず」の[本文種別]別用例数

語彙素	ト書き	引用-会話指示	引用-典拠	会話	注釈	計
と+思う	4	19	1	337	2	363
と+存ずる	1	6		523	1	531
計	5	25	1	860	3	894

次に、【表4】・【表5】に、「と+思ふ」「と+存ず」を使用する人物の上位30名を示す。「大名」「主」「太郎冠者」「妻」「出家」等、両表現とも多用している話者がいる一方、【表4】のみにみられる「祖父」「教え手」、【表5】のみにみられる「聳」「甥」「田舎者」等、その使用が偏っている人物も存在する。

<sup>8</sup> ただし、いずれも「さらば」「さりながら」「さるほどに」等の接続詞的な用例である。

このように、会話文・非会話文の別では同じ傾向を示す両語も、話者においてはやや異なる状況がみて取れる。そこで、次節以降では、両表現の使用状況を、話手や聞手、場面等の観点からみていく。

【表4】 「と+思ふ」の話者  
(上位30名)

話者	用例数	話者	用例数
大名	35	鬼	4
主	32	次郎冠者	4
太郎冠者	31	武悪	4
夫	20	男一	3
妻	18	貸手	3
祖父	12	麻生	3
出家	11	猿引	3
女	10	丹波	3
住持	9	継母	3
果報者	8	柿主	3
吉田の何某	7	見付の者	3
山伏	5	すつば	3
伯父	5	勾当	3
教え手	5	山賊	3
亭主	4	おこ	3

【表5】 「と+存ず」の話者  
(上位30名)

話者	用例数	話者	用例数
太郎冠者	58	牛博勞	5
主	49	何某	5
出家	24	博打打	5
夫	22	果報者	5
男	18	浅鍋売	5
甥	18	柑子売	4
甥	11	巖島の社人一	4
大名	11	吉田の何某	4
女	10	猿引	4
田舎者	8	通行人	4
妻	8	兄	4
男一	7	伯蔵主	4
閻魔王	7	見付の者	4
住持	7	参詣人一	4
孫一	6	所の者	4
すつば	6	舅	4

## 2. 2. 「と+思ふ」のみを多用する話者・「と+存ず」のみを多用する話者について

【表6】 表4のみにあがった話者の  
「と+思ふ」使用率

話者	と+思ふ	と+存ず	「と+思ふ」 率(%)
祖父	12	0	100
山伏	5	3	62.5
伯父	5	1	83.3
教え手	5	0	100
亭主	4	3	57.1
鬼	4	1	80
次郎冠者	4	0	100
武悪	4	0	100
貸手	3	1	75
麻生	3	0	100
丹波	3	2	60
継母	3	0	100
柿主	3	1	75
勾当	3	3	50
山賊	3	2	60
おこ	3	3	50

【表7】 表5のみにあがった話者の  
「と+存ず」使用率

話者	と+存ず	と+思ふ	「と+存ず」 率(%)
甥	18	0	100
甥	11	0	100
田舎者	8	0	100
閻魔王	7	0	100
孫一	6	1	85.7
牛博勞	5	1	83.3
何某	5	2	71.4
博打打	5	0	100
浅鍋売	5	1	83.3
柑子売	4	0	100
巖島の社人一	4	0	100
通行人	4	0	100
兄	4	2	66.7
伯蔵主	4	2	66.7
参詣人一	4	0	100
所の者	4	0	100
舅	4	1	80

\* 「男」は【表5】のみにあがっていたが、【表4】の「男一」と同等に扱うこととし、【表7】にはあげなかった。

【表4】の中で、「と+思ふ」のみを使用する話者はどのくらいいるだろうか。

【表4】のみにあがった話者について、「と+存ず」の使用数を調べ、「と+思ふ」「と+存ず」の用例数の合計のうち、「と+思ふ」の使用率が何%であるかを【表6】に示した。同様に、【表5】のみにあがった話者について、「と+存ず」の使用率を【表7】に示した。

「と+思ふ」の使用率が100%となっている話者、つまり「と+存ず」を全く使用しない話者は、「祖父」「教え手」「次郎冠者」「武悪」「麻生」「継母」であり、「と+存ず」の使用率が100%の話者、つまり「と+思ふ」を全く使用しない話者は、「聳」「甥」「田舎者」「閻魔王」「博打打」「柑子売」「巖島の社人一」「通行人」「参詣人一」「所の者」であった。

## 2. 2. 1. 「と+思ふ」のみを多用する話者

「と+思ふ」を多用する人物のうち、「と+存ず」を使用しない人物として、「祖父」「教え手」「次郎冠者」「武悪」「麻生」「継母」がいる。それぞれの話者について、「と+思ふ」の使用場面や聞手との立場の上下関係等を調査し、【表8】に示した。なお、「名乗り」等の場面や聞手の情報についてはコーパスデータに付与されていないため、想定される場面や聞手については個別に判断を行った。話手と聞手の立場の上下関係については、話手が聞手と同等以上の立場にある場合は「話手 $\geq$ 聞手」、話手が聞手より立場が低い場合は「話手 $<$ 聞手」と示す。立場の高低については、主人と使用人、舅と聳のような明らかな上下関係があるか否かで判断した。

【表8】 「と+思ふ」のみを使用する人物とその使用場面

話者	名乗り	独白	話手 $\geq$ 聞手	聞手の内訳		話手 $<$ 聞手	一人称以外	計
祖父			11	孫一6、山伏(=孫)5			1	12
教え手			4	聳4			1	5
武悪			4	太郎冠者4				4
次郎冠者			3	太郎冠者3			1	4
麻生			3	藤六3				3
継母	3							3

【表8】にあがった人物のうち「祖父」「教え手」「麻生」については、その場面の登場人物の中で上位の立場にあるといえる。具体的にみていくと、「祖父」の会話相手はいずれの曲においても「孫」であり、「教え手」は、聞手である「聳」に作法を教える人物である。また、「麻生」の会話相手は奉公人の「藤六」であり、いずれの人物もその場面において高い立場にあるといえる。(2)の例は「祖

父」が「孫一」に、(3)は「教え手」が「聳」に「と+思ふ」を用いている例である。

(2) (祖父) やい、いづくまでもゆかうと思ふたが、もはやくたびれた、まだとをひかな

(孫一) いや参る程に是でござある (やくすい 上 p.109)

(3) (教え手) たそ

(聳) わたくしでござる

(教え手) やれ、たれぞと思ふたよ、内へおりやりはせひで、とざまがましひなふ (はうちやう聳 上 p.368)

「次郎冠者」および「武悪」は使用人であり、立場の高い人物とはいえないが、これらの人物による発話の聞手は、同じく使用人の「太郎冠者」であり、同等の立場の聞手に「と+思ふ」を用いていることがわかる。(4)は「次郎冠者」が「太郎冠者」に「と+思ふ」を用いている例である。

(4) (次郎冠者) いつもゝるすに、さけをぬすんでのむによつて、じやあらふとおもふ

(太郎冠者) おぬしがいふごとくぬすませまひようじやあらふまでよ (ばうしばり 上 pp.292-293)

「継母」についてはやや性格を異にし、「と+思ふ」3例はいずれも名乗りの場面の例である。一般に名乗りの場面では「と+存ず」が多用されるが(村上 1993 等。2. 4. で後述)、次の(5)のように「継母」は「と+思ひ(候)」を用いている。

(5) わらはにもむすこが御入候へども、中ゝてうあひもなく候程に、きやうの殿をにくしゝと思ひ候折節、寺よりくだりて候間、行人をかたらひいのりころして候、しがひをかくして候はば、ちちごの不審めされうずると思ひ、そのままおきて候、むなしくなりたるよし、ちちごに申さばやと思ひ候、いかに御入候か(ままこ 上 p.451)

このように、「と+思ふ」は文末表現に限らず、その場面の中で高い立場にある人物の発話で用いられることが多かった。そして、いずれの話者についても、高い立場の聞手に対して「と+思ふ」を用いている例はみられなかった。

## 2. 2. 2. 「と+存ず」のみを多用する話者

「と+存ず」を多用する人物のうち、「と+思ふ」を使用しない人物として、「聳」「甥」「田舎者」等がいる。それぞれの話者について、「と+存ず」の使用場面や聞手との立場の上下関係等について示した（【表9】）。話手が聞手より立場が高い場合は「話手>聞手」とし、話手が聞手と同等以下の立場にある場合は「話手≤聞手」として整理した。

基本的には、「と+存ず」は定型的な名乗りや独白および話手が聞手と同等以下の立場にある場合に用いられている。一方、明らかに聞手より話手の立場が高い場合に「と+存ず」が使用されている例は今回の調査の範囲ではみられなかった。

【表9】 「と+存ず」のみを使用する人物とその使用場面

話者	名乗り	独白	話手>聞手	話手≤聞手	聞手の内訳	一人称以外	計
聳	8			10	教え手10		18
甥	4			7	伯父6、伯母1		11
田舎者	4			4	すっぱ3、目代1		8
閻魔王	5	1		1	朝比奈1		7
博打打	2			3	有徳人2、何某1		5
通行人	3			1	菊一1		4
巖島の社人一	1			3	巖島の社人二3		4
参詣人一	2			2	参詣人二2		4
柑子売	2	1		1	亭主1		4
所の者	2			2	出家2		4

「教え手」から作法を教わる「聳」、親族の中での上位者である「伯父」「伯母」と会話する「甥」、不案内な都で「すっぱ」や「目代」と会話する「田舎者」のように、その場面の中で低い立場にあると想定される人物が配慮表現として「と+存ず」を多用していることは自然に思われるが、それ以外の人物についてはどのように解釈できるだろうか。以下、主として聞手との関係から具体的にみていく。

「閻魔王」が「と+存ず」を用いているのは、1例を除き名乗りや独白の例であるが、これらはいずれも「地獄へ落とそうと存ずる」に類する形であり、定型的な表現のようである。名乗り・独白以外の1例は、「あさいな」に対して用いているものであるが、これも（6）のように「地獄へ落とそうと存ずる」に類する表現である。また、「閻魔王」と「あさいな」が初対面であり、両者の関係が「親疎」の「疎」にあたることが影響している可能性がある。

- (6) よきもののあらば、ぢごくへせめおとさうずるとぞんじて是まで出たれば、なんぢがきたつて有程に、ぢごくへせめおとひてくれうぞ  
(あさいな 上 p.464)

「博打打」は「有徳人」と「何某」に対して「と+存ず」を使っている。『虎明本狂言集』に登場する「博打打」はその場面の中で立場が低いことが多いようであり、「にわう」の曲においては、博打に負け「何某」のところに援助を求めに行く人物、「みめよし」の曲においては「有徳人」のところに自分の息子を婿入りさせようとする人物として描かれている。「博打打」という属性であるが、ぞんざいな言葉を使う人物として描かれているわけではなく、その場面における立場の低さのためか、基本的に丁寧な言葉遣いをしているようである。

- (7) 「さいぜんも申ごとく、もし人がみまらしてはと存、小袖をかづけて同道いたひたほどに、みな人のなひ時、小袖をとらせてみさせられひ  
(みめよし 下 p.521)

「通行人」が「と+存ず」を使用している例は、座頭の「菊一」が「勾当」を背負おうとしているところで偶然通りかかった「通行人」が「菊一」の背に乗るという場面のものであり、「菊一」に対して「と+存ず」が使用されていると判断したが、この(8)の例は聞手「菊一」へ向けられた発話というより、自らの行動を観客に説明する独白に近いものともいえる。

- (8) (菊一) ぜひに及ばぬ、其儀ならばおいませう  
(勾当) おはひでかなはふか  
(ト書き) てをうしろへまはすとき  
(通行人) 一段の事じや、さむひにおはれふと存ずる  
(どぶかつちり 下 p.272)

「参詣人一」は「にわう」「やるこ」の二曲において、「参詣人二」に対して「と+存ず」を使用している。「にわう」では「参詣人一」が「わかい衆を同道致てまいらふ」(下 p.349)と述べた直後に「参詣人二」を誘い、「やるこ」でも、「爰にとうかなひ人が御ざるが、是をさそふてまいらふ」(下 p.386)と述べた直後に「参詣人二」を誘っており、いずれにおいても「参詣人一」が「参詣人二」より立場が低いということも、親疎の「疎」にあたるということも考えにくい。穂田(1975)は「場面的存在としての『神仏』に対する態度が、下位者である聞手に対しても向けられる」(p.4)例について述べているが、この「参詣人一」の例も、神仏に対する態度が「参詣人二」にも向けられた結果、「と+存

ず」が使用されている可能性がある。なお、「やるこ」の例では、(9)のように、「参詣人一」「参詣人二」が互いに「と+存ず」を用いている。

- (9) (参詣人一) 是へまいるもべちの事でも御ざなひ、此間はいづかたへも  
ゆさんにまいらぬ程に、遊山がてら、くらまへ参らふとぞ  
んじて是へさそいにまいつたが、御ざるまひか  
(参詣人二) 内々われらもゆさんにまいりたひとぞんずる処に、お出忝  
なひ (やるこ 下 p.386)

「巖島の社人一」が「巖島の社人二」に対し「と+存ず」を用いている例も同様に、神仏の前という場面的な要因はあろうが、「巖嶋」の曲において、両者は初対面と思われ、また、「巖島の社人一」は「巖島の社人二」のことを「是に付ても御僧たつとき御方なると存ずる」(下 p.458)と述べており、尊い人物である「巖島の社人二」への敬意的配慮として「と+存ず」を用いていると考えられる。

「柑子売」は「亭主」に対し「と+存ず」を用いている。「柑子売」は「亭主」について、「こゝにしる人が御ざる程に」(かうじだわら 下 p.344)と述べており、主従関係のような明確な上下関係はないと思われるが、「柑子売」は「亭主」に対し、「と+存ず」以外にも(10)にみられるように「こなた」や「かしこまった」等の表現を用いる等、丁寧な言葉遣いをしている。

- (10) (柑子売) それは仕合で御ざる、けふは日もくれて御ざる程に、是を  
こなたへあづけませう、  
わたくしにまたよそへ参る所が御ざるほどに、あすとうと  
りにまいらふ  
(亭主) 中へあづからふ、うらへやつておきやれ  
(柑子売) かしこまつた 忝なふござる  
(かうじだわら 下 pp.344-345)

「所の者」が「出家」に対して「と+存ず」を用いている例が2例あるが、両者は初対面と思われ、互いに丁寧な言葉を用いている。なお、いずれの例も、不審な事態に遭遇した「出家」が事情を尋ね、それを受けて「所の者」が説明し、弔いを促す場面での用例である。「お僧もちととぶらふて御通りあれかしと存候」(つうゑん 下 p.241)「お僧もぎやくゑんながらとぶらふてお通りあれかしと存候」(たこ 下 p.252)という類似した文言であり、定型的な台詞の中で用いられているといえる。

このように、「と+存ず」は、主として立場の高い者・初対面の者への配慮や、神仏の前という場面で用いられているようである。

### 2. 2. 3. 「と+思ふ」のみを多用する話者・「と+存ず」のみを多用する話者のまとめ

基本的には話手が聞き手と同等以上の立場の場合に「と+思ふ」が用いられ、話手が聞き手と同等以下の立場の場合に「と+存ず」が用いられるという対照的な傾向がみられた。これは中世軍記物語でみられる文末表現の傾向と同様であり、また、李(2006)が「独白以外の時に使われる『ウと思う』系は『ウと思う』の形式になるが、これは必ず目下の相手役がいるときに使われる。」(p.62)としているのもこの傾向の中に位置づけてよいと考える。

ただし、「と+思ふ」が特に礼を失した表現であるというわけではなく、「と+存ず」というほぼ意味が同じでかつ謙譲・丁重の形式が多用されているために、高い立場の聞き手に対し、敬語的ニュアンスを持たない「と+思ふ」を選択しにくいのだと推察される。

その他、「と+存ず」は、初対面の者への配慮表現や、定型的な台詞の中でも用いられているが、総じて『虎明本狂言集』における「と+存ず」は、単なる漢語的な硬い語としてではなく、「と+思ふ」に比べ聞き手への配慮を伴った表現として用いられていたといえる。

なお、話手と聞き手の立場が同等の場合は、双方が「と+思ふ」を使う例(太郎冠者と次郎冠者、太郎冠者と武悪)、双方が「と+存ず」を使う例(参詣人一と参詣人二)ともみられ、後者については神仏に関する場面であることが関わっていると考えられる。

### 2. 3. 「と+思ふ」「と+存ず」両方を多用する話者について

次に、「と+思ふ」「と+存ず」のいずれも10例以上使用している話者である、「大名」「主」「太郎冠者」「夫」「出家」「女」の6話者について検討したい。【表10】に、それぞれの人物の「と+思ふ」「と+存ず」の用例数をあげる。また、上記6話者の「と+思ふ」「と+存ず」の使用場面を【表11】・【表12】に示す。

【表11】をみると、「と+思ふ」については、2. 2. 1. でみられた傾向と同様、基本的には話手が聞き手と同等以上の立場にある場合に用いられている。しかし、「太郎冠者」に「話手<聞き手」の例が3例みられる。この3例について詳しくみてみると、いずれも鬼・小名類の例であり、「主」に対し失敗の言い訳をする場面において、「(その時は)～と思ひて(このようなことをした)」のよ

うな形で従属節中にあらわれるものである。言い訳の場面であるために、主文末以外の言葉遣いにまで気が回っていない様が見られる。また、(11)の例については同一発話内に「仰せられる」、(12)の例については、直前に「と存て」が使用されており、既に敬意的配慮を示す形式があるため、「と+存ず」を重ねて敬意を示さずとも発話全体としては失礼な物言いにはならないということや、(12)に関しては「～と存ず」が連続するのを避けるということも関係していようか。

【表 10】 「と+思ふ」「と+存ず」とも 10 例以上使用する話者

話者	と+思ふ	と+存ず	計
太郎冠者	31	58	89
主	32	49	81
大名	35	11	46
夫	20	22	42
出家	11	24	35
女	10	10	20

【表 11】 話者別「と+思ふ」の使用場面

話者	と+思ふ							計
	名乗り	独白	次第	話手≧聞手	聞手の内訳	話手<聞手	一人称以外	
太郎冠者		8		8	武悪4、次郎冠者3、売り手1	3	12	31
主				23	太郎冠者22、太郎冠者・次郎冠者1		9	32
大名	1			24	太郎冠者19、女2、昆布売2、下人1		10	35
夫	1			13	妻10、告げ手2、妻・出家1		6	20
出家		5	2	3	所の者-2、蛸の精1		1	11
女	2	1		3	大名1、新発意1、山賊1		4	10

【表 12】 話者別「と+存ず」の使用場面

話者	と+存ず							計
	名乗り	独白	次第	話手>聞手	話手≦聞手	聞手の内訳	一人称以外	
太郎冠者		9			48	主22、大名18、売り手3、次郎冠者1、仲	1	58
主	34	8		3	3	客人-2、仲裁人1	1	49
大名	8			1	2	女2		11
夫	12	2		1	7	出家4、妻1、仲人1、仲裁人1		22
出家	22	2						24
女	7	1			2	大名1、男1		10

(11) (太郎冠者) 私は又、かねの音をきひてこひと仰られた程に、それかと思ふてきゐて参つた、それならばそれととう仰られひで

(主) にくひやつめが、最前のほど、のし付にせうと云たに、そうじておのれがやうなやくにたゝぬやつはなひ

(かねのね 上 p.581)

(12) (太郎冠者) おいて行、おいてゆかずはきりころすと申た程に、命にはかへられぬと存て、こじきにとらすと思ふてとらせてかへつて御ざる

(主) さて〜それはしたゝかな人であつたな  
(なまぐさ物 上 p.597)

2. 2. 1. でみたように、「と+思ふ」は目上の聞手に対しての使用が少ない表現であるが、このように従属節内であれば、高い立場の聞手に対する発話で「と+思ふ」を使用しにくいという制限が弱まるのだと考えられる。なお、文末表現としての「と思ふ」は、『虎明本狂言集』においても、目上の聞手に対して用いられないようであり、高い立場の聞手に対して主文末で終止形の「と+思ふ」が使用された例はみられなかった。

一方「と+存ず」も、名乗りや独白を除くと、2. 2. 2. でみられた傾向と同様に、聞手が話手と同等以上の立場にある場合に用いられることが多い。ただし、【表 12】には「話手>聞手」の例が5例（「主」3例、「大名」1例、「夫」1例）みられる。これらはいずれも「太郎冠者」に対して「と+存ず」が使われる例である。うち4例は(13)のように富士や鞍馬への参詣の話であるという共通点がある。既に(9)の例でもみたように、あらたまつた口調となっている背景として、神仏への畏怖の気持ちが影響していよう。つまり、このような「と+存ず」という表現のもつ敬意は、立場の低い聞手のみに向けられたわけではないと考えられる。

(13) (主) 近比めでたひ、此福を某がとらふとぞんずる  
某にもふくを下された  
(太郎冠者) それはもろともにめでたうござる  
(くらままいり 上 p.527)

もう1例は、話手が「夫」、聞手が「太郎冠者」という例であるが、「夫」は「太郎冠者」に対して話しかけていると思ひ込んでいるが、実際は太郎冠者になりすました「妻」が聞手である。この(14)の例においては、妻への恐れ of 気持ちが述べられており、対象は神仏ではなく妻であるが、畏怖の気持ちが背景にある点で(13)の例と類似している。

(14) (夫) しぜん山のかみがそのふみをみたらば、なふ中〜ただはおくま  
ひとぞんじて (はなご 下 p.64)

このように、「と+思ふ」「と+存ず」の両表現とも多く使う話者であっても、畏怖の気持ちが背景にある等の特定の状況以外では、「と+思ふ」は話手と同等以下の立場の聞手に対して用いられ、「と+存ず」は話手と同等以上の立場の聞手に対して用いられることがわかる。

## 2. 4. 名乗り・独白について

「と+存ず」については名乗りの場面での使用例が多いことも注目される。例えば、【表 11】・【表 12】をみると、「と+思ふ」を名乗りの場面で使用しているのは「大名」「夫」「女」の3話者による計4例であるのに対し、「と+存ず」を名乗りの場面で使用しているのは「太郎冠者」以外の5話者、計83例となっている。

この名乗りの場面における「と+存ず」は、登場人物に対してではなく、観客への配慮として用いられていると考えられる<sup>9</sup>。例えば次の(15)の例は、「大名」の発話であるが、新しい者を雇うという意志を述べるにあたり、名乗りとしては「と+存ず」を用い、その直後、「太郎冠者」に同様の内容を述べる発話では「と+思ふ」を用いる、という使い分けがみられる。

- (15) (大名) 一人にてつかひたらぬ程に、新座の者をあまたおいてつかはふと存る、  
あるかやい  
(太郎冠者) お前に  
(大名) ねんなうはやかつた、汝がよろこぶ事がある  
(太郎冠者) いかやうな事でござるぞ  
(大名) 汝一人にてはわれもめいわくにあらふず、身共もつかひたらぬ程に、新座の者をおいてつかはふと思ふがよからふか  
(鼻取りずまふ 上 p.192)

また独白においては「と+思ふ」「と+存ず」両表現ともみられる。独白であれば聞手はいないので、本来「と+存ず」のような配慮表現は不要であるが、これも名乗りと同様、観客への配慮として用いられているものであると考えられる。

(16) (17) は独白における「と+存ず」の例である。

- (16) (主) 太郎くわじやを留守においてござるが、何といたひているぞ や  
うすを見うと存る、あらきどくや、おくびやうなやつじやがきど  
くに夜まはりをするよ、(くいか人か 上 p.592)

<sup>9</sup> 名乗りの表現における「観客への配慮」という点に関しては、村上(1993)も、名乗りおよび行動予定の提示の表現である「にて候…ばやと存候」を「観客に対する配慮も高い」、「でござる…うと存る」を「観客に対する配慮の表現として標準的なものと認められる」と位置づけている(p.568)。

- (17) (主) のさものを一人使にやればおそひと存て、二人やつたれば、今にかへらぬ、にくひ事じや、何事をしておるぞ、見にまいつて、あそんでおるならば、さんへにせつかんいたさうずる、(文荷 上 p.579)

なお、李(2006)も、名乗りや独白において、「『ウと思う』系は『ウと存ずる』あるいは『ばやと存ずる』のような敬語の形を取る。独白の時も、観客を聞き手として想定しているため、独白に「ウと思う」がその形式のまま使われることはない。」(p.62)としているが、これは「ウと思う」の形式に限らず、「と+思ふ」の形式全体にいえることのようにである。「と+思ふ」が名乗りや独白の場面において使われる際は、(18)の例のように「思ふたれば」「おもふが」等、文末ではなく文中の場合か、「候」がついた「と思ひ候」の形であり、敬語を伴わない文末終止形の「と+思ふ」の用例はみられなかった。

- (18) 言語道断の事じや、誠になくかと思ふたれば、そばに水ををひて目へぬる、扱々にくひ事じや、此よしたのふだ人に申さう(すみぬり 上 p.185)

名乗りという形式は狂言に特徴的なものであるが、(19) (20)のように中世軍記物語においても、その場の中で高い立場にある人物が、聞手の多数いる公の場面で自らの行動予定や決意を提示する際に文末表現「と存ず」を用いており、これは狂言における名乗りの形式と類似している。

- (19) 清盛のたまひけるは、「悪源太、大勢にて待んには、都へのぼりえずして、阿倍野、天王寺の間にしかばねをとゞめんこと、理の勇士にあるべからず。しよせん当国の浦より船をあつめて、四国の地にをしわたり、鎮西の軍勢をもよほし都へせめのぼりて、逆臣をほろぼし、君の御いきどをりを休めたてまつらばやと存ずる。をのへ、いかゞ」とありしかば、(『平治物語』 p.168)

- (20) 越後守仲時、軍勢どもに向つて宣ひけるは、「(略)今は我旁のために自害をして、生前の芳恩を死後に報ぜんと存ずるなり。(『太平記』1 p.471)

なお、(19) (20)の例については、穂田(1975)が「いわば晴れの言葉」(p.12)「聞手非上位で、シテ一人称の<存ず表現>は、自卑・丁重の謙讓表現ではあり得ないが、少くとも文脈的には表現の莊重性を共通にしている」(p.13)としているものにあたると思われる。このような軍記物語の例および、『虎明本狂言集』における名乗りの「と+存ず」についても、晴れの言葉として莊重性を認めるこ

とは可能であろうが、聞手が多数いる公の場での発言では、話手の立場に関係なく丁寧・丁寧な言葉遣いをするという傾向があらわれているとも考えられる。

## 2. 5. 「と思ひ候」について

ここまで「と+思ふ」と「と+存ず」についてみてきたが、「と+思ふ」に敬語形式の「候」がついた「と思ひ候」と「と+存ず」にはどのような違いがあるのかについても考えてみたい。「と思ひ候」の例は 13 例で、[本文種別]が「会話」の用例は、「出家」5例、「継母」2例、「女」「妻」「若市」各1例で、いずれも名乗りの場面において用いられていた。「と思ひ候」の話者は、「出家」を除いていずれも女性であることから、女性は「存ず」よりも「思ひ候」を使う傾向があったといえる。そこで、女性話者による「と+思ふ」「と+存ず」の用例数を【表 13】に示す。

【表 13】女性話者による「と+思ふ」「と+存ず」

話者	と+思ふ	と+存ず
妻	18	8
女	10	10
継母	3	
下京の女	2	3
若市	2	
上京の女	2	1
お寮	1	
女房	1	
伯母	1	
後家	1	1
計	41	23

「妻」「女」等、女性話者が「と+存ず」を使用する例も少なくないが、全体の合計数では「と+思ふ」の方が多い。【表 3】で、「会話」において「と+存ず」(523 例)が「と+思ふ」(337 例)の約 1.5 倍の用例数であったことを考えると、女性は男性に比べ、「と+存ず」より「と+思ふ」を使用する傾向があるといえる。

なお、底本の校訂者による注(大塚編 2006, 下 p.69)には、「虎明本ではサウラフの表記は多く『候』と漢字表記であるが、この場合のように女性のせりふ中では仮名表記にする傾向がある。」とある。このように、女性の発話については意識な書き分けがなされることがあったようであり、「と+思ふ」「と+存ず」の使い分けにもこのような意識があらわれている可能性がある。なお、穂田(1975)が中世の「存ずる」には一貫して「語感の荘重性」がある(p.3)と述

べているが、この語のもつ「莊重性」が女性の発話としてなじみにくかったという面もあろう。

このように、女性話者が「と+存ず」より「と+思ふ」を使いやすいのだとすると、「と+思ふ」の敬語形式として、「と+存ず」のかわりに「と+思ひ候」の形が選択されたということが考えられる。(21)は、「女」が「と+思ひ候」を使用している例である。

- (21) 此野ははりまの国いなみのと申て、かくれなきおそろしきのにておりや  
らしますものを、人もつれいでまいつて、このくれがたに何としてよう  
おりやらふぞ、ああおそろしや、いそがばやと思ひさふらふ、さればこ  
そどめくが、おそろしや どなたへまいつてようおりやらふぞ  
(鬼のまま子 上 p.488)

また、虎明本以外の狂言資料として、和泉流の祖本である『狂言六義』を確認したところ、「と思ひませ候」の形の例が「鬼の継子」の曲の冒頭部分にみられる。虎明本においてみられた(21)の例とは大幅に本文が異なるものの、同様に「女」による発話で、「と+存ず」ではなく「と+思ふ」+「候」の形式が選択されていることがわかる。

- (22) 此ほどは、再々、人を遣され候ほどに、在所へ、参らばやと、思ひませ候  
(鬼の継子 p.293)

なお、虎明本において「と+思ひ候」の用例がみられた箇所について、『狂言六義』の該当箇所を確認したが、大幅に本文が異なっていたり、その曲自体が掲載されていなかったりと、両本で共通して「と+思ひ候」が使用されている例は確認できなかった。

女性話者以外で「と+思ひ候」の使用例がみられた「出家」の例についても【表13】と同様の調査をしたところ、「と+思ふ」の使用が11例であるのに対し、「と+存ず」が24例と、「と+存ず」の方が多く使われていた。すなわち、「出家」が「と+存ず」という表現を使いにくかったわけではないようであり、「出家」の発話で「と+思ひ候」が選択されている理由についてはさらなる検討が必要であろう。

ただし、『狂言六義』でみられた「と+思ひ候」の3例は、いずれも僧によるものであり(「祐善」の曲の本文および抜書にほぼ同じ文言の例が1例ずつ、虎明本には掲載されていない「黄精」の曲に1例)、出家の身分の者が「と+思ひ候」という形式を使用しやすいという傾向は認めてよいと考えられる。

このように「と+思ひ候」は女性および出家の者により用いられやすい表現であることが推測されるが、会話以外での用例をみると、台本に書き入れられた「注釈」における「と+思ひ候」の例として、(23)のように「と+思ひ候」と「と+存じ候」を連続した注において使用している例がみられた。この「と+思ひ候」「と+存じ候」は台本を読む者に対する配慮表現であろうが、このように二つの表現が連続して使われている例があることは注目される。

- (23) 私に云、つづみをけをあけてもみいで、をぢさせられうと云はふしん、ただかしこまつたと云て、つづみをけをあけてみて、かぶりをふつて、かををかくして、をぢさせられなと云て、つめたるがましかとをもひ候惣じて、拍子物も、又かやうのたぐひも、うりてささやきおしへたるがましかと存候 (よろい 上 p.68)

また、「ゆうぜん」の曲の注の中に、(24)のような「と+思ひ候」の例があるが、『狂言六義』において(24)の例に該当する箇所をみると、(25)のように「と+存じ候」となっており、これは両者が機能面で置き換えが可能な表現であることを示唆している。

- (24) 都へのぼり、かさのりの明神へもまいらばやと思ひ候、共云 (ゆうぜん 下 p.250)  
(25) 都、笠取の明神へ参らばやと存候 (祐善 p.437)

連続する注において「と+思ひ候」「と+存じ候」の両表現が用いられていること、同一箇所が本によりそれぞれ「と+思ひ候」「と+存じ候」と記されている例があること、また、基本的には「と+存ず」が使われる名乗りの場面で「と+思ひ候」の形がみられることをあわせて判断すると、「と+思ひ候」も「と+存ず」と同様に丁寧な形式であり、待遇面や機能面での差により使い分けられているのではなく、話者の属性や人物像等によって選択されているものであると考えられる。

ここで、このような傾向は、謙譲語・丁重表現全体にいえることであるのか、あるいは、「と+思ふ—と+存ず」という表現に特徴的なものであるのか、『虎明本狂言集』における用例を検討してみたい。

まず、「行く—参る」および「する—致す」についても、「と思ふ—と存ず」と同様に、女性話者が「参る」より「行く・行き候」を、「致す」より「する・し候」を使用するという傾向がみられるのだろうか。会話における「行く—参る」「する—致す」の、女性話者による発話の用例数および「候」が後接する用例数は、【表 14】のとおりである。「行く—参る」「する—致す」について、全例の

うちの女性話者による発話の比率は、「行く」が約 5.4% (425 例中 23 例)、「参る」が約 6.6% (1410 例中 93 例)となる。また、「する」が約 7.4% (1573 例中 117 例)、「致す」が約 5.2% (846 例中 44 例)となっており、女性話者が「参る」「致す」より「行く」「する」を用いるという傾向はみられなかった。

【表 14】会話における「行く—参る」「する—致す」の女性話者の例  
および「候」が後接する例

行く			参る		
総数	女性話者	「候」後接	総数	女性話者	「候」後接
425	23	0	1410	93	11
する			致す		
総数	女性話者	「候」後接	総数	女性話者	「候」後接
1573	117	0	846	44	0

また、「行く」「する」「致す」については、「候」が後接する例がみられなかった。そもそも「行く」「する」に「候」が後接する例がないことから、「と+思ひ候—と+存ず」にみられたような、女性話者が謙譲語による表現より、「非謙譲語+候」の形を用いるという傾向は見いだせなかった。なお、唯一「候」が後接する例のある「参る」についても、「参り候」11 例のうち、女性話者による例はみられなかった。

すなわち、女性話者は「と+存ず」より「と+思ふ・と+思ひ候」を用いる傾向があるが、これは謙譲語・丁重表現全体にみられる傾向とはいえず、「存ず」という語彙の持つ性格によるものであると考えられる。漢語由来の「存ず」という動詞は、謙譲語・丁重表現の中でも特にかたい語感を持つため、女性話者はそのような語感を持たない「と+思ふ」を用いることが多かった可能性がある。

なお、「参り候」11 例については、名乗りの場面での用例が 6 例、独白が 1 例、「鉢叩二」から「鉢叩一」への発話が 1 例、主および主である「かうのの何某」から太郎冠者への発話が各 1 例であった<sup>10</sup>。このように、「参り候」の用例に、目下から目上への発話はみられないことから、「候」の有無は、待遇面での差異には関わっていないと考えられる。ただし、名乗りの 6 例のうち 5 例が神仏に関する場面と認めうるものであり、主から太郎冠者への発話の 1 例も、くじにより太郎冠者が鬼役、主が罪人役となっている場面であるため、畏怖の念が「候」の使用に関係しているとみてよいだろう。

<sup>10</sup> 他 1 例は萬集類の用例で、話者・聞手とも明示されておらず、特定できなかった。

## 2. 6. その他の中世語資料との比較

『虎明本狂言集』における「と+思ふ」「と+存ず」と、その他の中世語資料における文末表現「と思ふ」「と存ず」は、聞手との立場関係によって選択されるという点では、同様の傾向をみせるといってよい。

ただし、軍記物語においては、公の場面であっても、話手が聞手より立場が高い場合には、(19) (20) のように「と存ず(る)」「と存ずる也」等、「候」が後接していない形で用いられるのに対し、聞手の立場が高い場合には(26)のように「候」が後接した「と存じ候」の形が用いられるという傾向がみられる。このことから、軍記物語においては、「と存ず+敬語助動詞・補助動詞」の形で聞手に対する敬意的配慮をあらわしていたと考えられる(第2章参照)。

(26) 新田左兵衛督も、同じく坂本へ帰らんとし玉ひけるを、船田長門守経政、馬を遮りて申けるは、「軍の利、勝に乗る時、北るを追ふより外の質はあらじと存じ候ふ。(『太平記』2 p.238 ※船田長門守経政は新田左兵衛督の家臣)

一方、『虎明本狂言集』の会話文においては「と+存じ候」の形が27例、「候」の伴わない「と+存ず」の形が496例となっている。名乗りだけでなく、主従関係の「従」にあたる話者から「主」への発話という、明確な上下関係のある場面であっても、「候」を伴わない「と+存ず」の形が多く用いられている。

(27) (太郎冠者) 「某はみやうがをたぶるに依て、どんになつて物わすれして、よひかたなを一こしひろふてござあるが、びしやもんの御利生かと存る  
(主) 「何とよひ刀をひろふた (どんごむさう 上 p.538)

なお、「と+存じ候」の話者は、「住持」「出家」「法華僧」「巖嶋の社人」やくらままいりに向かう「主」、「出家」に事情を尋ねられた「所の者」、「閻魔王」「鬼」といった神仏関係等の畏怖の念を伴う場面に登場する者に偏っている。

このように、『虎明本狂言集』において、文末表現「と存ず」は、敬語助動詞・補助動詞を伴わない形で、あらたまつた、公的な性格を持つ思考動詞として用いられる傾向がみられ、これが軍記物語との相違点であるといえる。

ただし、軍記物語でも、キリシタン資料である『天草版平家物語』には、敬語助動詞や補助動詞を伴わない「と存ず(る)」の形が目上の聞手に対して用いられる例がみられ、『虎明本狂言集』における使われ方と類似していた。

- (28) 清盛いかにかにとあきれらるれば、ややあって重盛涙を押しへて申さるるは：この仰せを承るに御運は、早末になつたと存ずる：人の運命の傾かうとては、必ず悪事を思ひ立つものでござる。（『天草版平家物語』p.85）

『天草版平家物語』と『虎明本狂言集』において、全体として文末辞の用法等に類似性があるのは、その成立年代や口語的性格からして納得のいくところである。ただ、中世軍記物語とも共通して用いられた表現であり、また、立場の上下が関わる敬語形式である「と存ず」のような表現であっても、『天草版平家物語』は他の諸軍記物語よりも『虎明本狂言集』と共通性を持っていた。『虎明本狂言集』においてみられる「と+存ず」の用法は、室町時代の口語的表現を反映したものと考えられる。

### 3. おわりに

『虎明本狂言集』における「と+思ふ」「と+存ず」は、いずれも主として会話文にあらわれるが、両表現の使用にあたっては、話者・聞手の属性が関与している。基本的には話手の立場が聞手と同等以下の場合には「と+存ず」が、話手の立場が聞手と同等以上の場合には「と+思ふ」が用いられる点で、他の中世語資料における文末表現「と思ふ」「と存ず」と同様の傾向であった。また、観客への配慮表現として、名乗りや独白等の場面においても「と+存ず」が用いられることが多い。

『虎明本狂言集』において、目上の聞手（観客への配慮を含め）に対する発話で「と+思ふ」が少ないのは、「と+存ず」という謙譲・丁重の形式が多用されている中で、高い立場の聞手に対し、「と+思ふ」をあえて選択し、使用することははばかられるためであると推察される。また、「と+思ひ候」のように丁寧語化された形式であっても、女性による名乗りや注釈等、限られた範囲にしかあらわれない。ただし、「と思ひて」のように、文末形式以外の形であれば、「と+思ふ」を目上の聞手に対して使用しにくいという制限は弱まるようである。

なお、男性話者に比べ女性話者は「と+思う」を使用する傾向があり、これも「と+思ふ」の特徴といえる。「行く一参る」「する一致す」については、その使用に男女差はみられないため、これは謙譲語・丁重表現全体にみられる傾向とはいえず、「存ず」という語彙の持つ性格によるものであると考えられる。

なお、軍記物語においては「と+存じ候」と、「候」を付した形で目上の聞手への敬意的配慮をあらわすのに対し、『虎明本狂言集』においては目上の聞手に

対しても「候」を伴わない「と+存ず」の形が用いられることが多い等、異なる点もみられた。

### 【資料】

大塚光信編（2006）『大蔵虎明能狂言集 翻刻 註解』上・下 清文堂出版

北原保雄・小林賢次（1991）『狂言六義全注』勉誠社

国立国語研究所コーパス開発センター（市村太郎・渡辺由貴ほか）編（2015）『日本語歴史コーパス室町時代編 I 狂言』（短単位データ 0.9、中納言バージョン 1.5）<https://maro.ninjal.ac.jp>

近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ編（1999）『天草版平家物語語彙用例総索引』1 勉誠出版

長谷川端校注・訳（1994・1996・1997・1998）『新編日本古典文学全集 54～57 太平記 1～4』小学館

柳瀬喜代志・矢代和夫・松林靖明・信太周・犬井善壽校注・訳（2002）『新編日本古典文学全集 41 将門記・陸奥話記・保元物語・平治物語』小学館

※『新編日本古典文学全集』については、検索の際に Japan Knowledge Lib (<http://japanknowledge.com/library/>) を使用

## 第4章 文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」の史的変遷

### 1. はじめに

第2章・第3章では、文末表現「と思ふ」と「と存ず」について論じ、両表現の性格や差異を明らかにしたが、古典語において多用された文末思考動詞の一つとして、文末表現「とおぼゆ」についても検討する必要がある。本章では、文末表現「とおぼゆ」と「と思ふ」とを比較しながら、両者がどのように用いられてきたのか、その性格を明らかにし、両表現を中心とした文末思考動詞の変遷状況を検討する。

### 2. 資料と分析方法

本章では、主として中世から近代の資料における文末表現「と思ふ」「とおぼゆ」の使用状況を調査する。

調査にあたっては、文末で、発話者主体、非過去・非否定に該当する「と思ふ」と「とおぼゆ」の用例を、「ぞ」「なり」「候」等の助詞・助動詞が後接するものも含めて考察対象とした。また、第1章と同様に、文末表現「と思ふ」「とおぼゆ」の内部の情報を、A類・B類・C類の三つにわけ、その出現傾向の違いに注目して調査した。以下、文末表現「と思ふ」を例に三つの類の例をあげる。「とおぼゆ」についても同様に扱う。

A類：意志や願望表現をA類とする。

- (1) 「(略)。鎌倉へくだって、頼朝にあふて、物ひと詞言はんと思ふぞ。よれや、よれ」(『平家物語』<覚一本>下 p.299)

B類：推量・疑問表現をB類とする。

- (2) (略)、不断そなたのねがひに、目がつぶれたらよからふ、めがあひて有に依て、わき女をあそばすとおしやつたほどに、うれしからふと思ふ (『虎明本狂言集』中 p.191)

C類：A類・B類以外のもの、すなわち活用語の終止形やタ形、名詞、断定・当為表現等をC類とする。

(3) これはひとへに鼓判官がしわざと思ふぞ (『天草版平家物語』 p.332)

本章では上記のように文末思考動詞を認定・分類した上で、文末表現「と思ふ」「とおぼゆ」の使われ方やその資料について検討する。

### 3. 中世以前における文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」

#### 3. 1. 文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」のその内部

まず、『源氏物語』における文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」の使用状況をみると、文末表現「と思ふ」の内部については、A類が10例、B類が4例の計16例がみられ、いずれも会話文の用例であった。一方、文末表現「とおぼゆ」の内部については、会話の例が5例（うち1例は引用）で、いずれもB類の例であった。

(4) 「(略)、せまりたる大学の衆とて、笑ひ侮る人もよもはべらじと思ふたまふる」(『源氏物語』 3 p.23)

(5) 「(略)。今、やうやう忘れゆく際に、かれ、はた、えしも思ひ離れず、をりをり人やりならぬ胸こがるる夕もあらむとおぼえはべり。(略)」(『源氏物語』 1 p.84)

「おぼゆ」は上代に使われていた「おもほゆ」の変化した語であり、「平安初期の散文作品では『おもほゆ』にかわって『おぼゆ』が使われはじめ」(『日本国語大辞典第二版』)とされるが、既に『源氏物語』において、「おぼゆ」が文末でトと結びついた形式が用いられている。

次に、中世における文末表現「と思ふ」「とおぼゆ」のトの内部について、類別の用例数をみる。【表1】をみると、文末表現「と思ふ」はA類をトの内部にとる例に偏っており、文末表現「と思ふ」は、中世においては自らの感情や志向等、話手の主観を述べる際に用いられていることがうかがえる。現代語においては、「A類+と思う」「B類+と思う」「C類+と思う」がまんべんなくみられるが、このような中世における「A類+と思ふ」への偏りは、現代語とは大きく異なる傾向であるといえる。以下に、A類をトの内部にとる例をあげる。

(6) 「(略)、われらまでも、一蓮の縁をむすばばやと思ひ候也。(略)」(『曾我物語』 p.418)

(7) 「腰のしも常に火もゆるがごとし。六月に又内裏へまいらんと思ふなり」(『古今著聞集』 p.81)

【表1】中世における文末表現「と思ふ」の用例数<sup>11</sup>

	と思ふ						合計
	A類		B類		C類		
	会話文	地の文等	会話文	地の文等	会話文	地の文等	
発心集	14	1					15
保元物語	4						4
平治物語(半井本)	3						3
平家物語(覚一本)	12	2					14
愚管抄	1						1
正法眼蔵随聞記	1	1		1			3
宇治拾遺物語	10				1		11
十訓抄	5		1				6
古今著聞集	4						4
沙石集	4	1					5
徒然草	1						1
太平記(天正本)	16						16
曾我物語	6						6
義経記	1	1			1		3
史記桃源抄				2		2	4
毛詩抄				4		2	6
虎明本狂言集	20	3	5	1	1		30
御伽草子	2		2				4
合計	104	9	8	8	3	4	136

※以降、本章内の表では手紙文や会話文内の引用も「地の文等」に含めた。

一方【表2】をみると、文末表現「とおぼゆ」は「と思ふ」とは逆の偏りをみせ、その内部にA類をとる例は1例のみであり<sup>12</sup>、B類やC類をとる例が多い。動詞「おぼゆ」は自発の「ゆ」をとりこんだ形式であり、その語義から文末表現「とおぼゆ」は、推量や叙述等、外界の情報を述べる際に用いられ、自らの意志・願望を述べるA類のような情報をその内部にとりにくいのだと考えられる。

また、(8)のように根拠となる事象を示しながら「とおぼゆ」が使われている

<sup>11</sup> 『エソポのハブラス』には「と思ふ」「とおぼゆ」いずれの用例もみられなかった。また、抄物類については、(ア) 講述・注釈者の言葉、(イ) 原文の漢文中の登場人物の台詞の訳、(ウ) 原文中の登場人物の思考動作(すなわち本動詞)、の3つの異なる階層が考えられる。表には文末表現としての性格が強い(ア)の用例数のみを掲載した。以下に、(イ)(ウ)の例をあげる。

(i) ヲレハ年ヨツタ事ナレハ、御内ニ傳申サウトヲモフソ。(『史記桃源抄』4 p.131)

(ii) 絶新道トハ、秦カ始テ越ヘ通シタ道ヲ絶タウト思フソ。(『史記桃源抄』4 p.318)

<sup>12</sup> 「願望+とおぼゆ」の例は、下記の1例である。

(iii) 漢書ニハ、三公カ主ルホトニ、公主ト云ト注シタシト覺ルソ。サウテコソ、公主ト云義ハ、立ヘケレソ。(『史記桃源抄』2 p.180)

例も多くみられ、確信度の高い判断を表すために用いられている。

- (8) 「敵の馬の立て様、旗の紋、京家の人と覚ゆるぞ。(略)」(『太平記』  
<天正本> 2 p.175)

【表2】中世における「とおぼゆ」の用例数

	とおぼゆ						合計
	A類		B類		C類		
	会話文	地の文等	会話文	地の文等	会話文	地の文等	
発心集				2	1	1	4
保元物語			1		6		7
平治物語(半井本)			1		1		2
平家物語(覚一本)			2	2	15	1	20
愚管抄						1	1
正法眼蔵随聞記			1	5	2	6	14
宇治拾遺物語			1		1	3	5
古今著聞集				1			1
沙石集			1		6	1	8
太平記(天正本)			8		48	2	58
曾我物語			1		4		5
義経記			3		13	1	17
史記桃源抄		1					1
毛詩抄				1			1
御伽草子					1		1
合計	0	1	19	11	98	16	145

このように文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」とでその内部にとる情報の性質に違いがみられるのは、自らの思考をあらわす「思ふ」、外からの情報を知覚する「おぼゆ」という、それぞれの動詞自体のもつ意味の違いを反映しているためであろう。

なお、B類・C類を内部にとる例は文末表現「と思ふ」「とおぼゆ」ともにみられるものの、文末表現「と思ふ」は「とおぼゆ」に比べて少ない。ただし、(2)や次の(9)のような「B類+と思ふ」の例については、序章で述べた通り、「B類+と思ふ」が「A類+と思ふ」と「C類+と思ふ」の中間的な位置にあることに関連し、文末表現「と思ふ」の主観明示と不確定表示の二つの用法の連続性を示すものであろう。

- (9) 「(略)。たとひ、主に向つて弓を引、親に向つて太刀をぬき、牛馬の首を斬りたりとも、さんりんしたる悪人に、子細はあらじと思ふ也。(略)」(『御伽草子』「唐糸さうし」 p.128)
- (10) 「(略)。推量スルニ、城ノ後ノ山金峯山ニハ峻ヲ憑デ、敵サマデ勢ヲ置タル事アラジト覺ルゾ。(略)」(『太平記』<流布本>1 p.211)

また、「C類+と思ふ」は「B類+と思ふ」以上に少なく<sup>13</sup>、現代語のように推量的な意味を持つ形式として固定的に用いられているとはいえない。ただし、(11)～(13)の文末表現「と思ふ」は、推量相当の意味に解釈することが可能であろう。特に(11)の例は、推量の意味の副詞句「如何様にも」が共起しており、現代語において一種の推量表現として用いられる文末表現「と思う」の萌芽的用例とみられる。

- (11) 重ねて申(し)ければ、「如何様にも頼朝を猜むと思ふぞ。伊勢加藤次こゝろ許すな」と仰せられける。(『義経記』p.132)
- (12) (略)、思ひの外はやうおいとまを下され、仕合のよひもおかげじやと思ふ、(『虎明本狂言集』上 p.178)
- (13) 樂胥ノ胥ハヲキ字ト思ソ。(『史記桃源抄』4 p.356)

少ないながらも、内部にB類やC類をとる文末表現「と思ふ」の用例がみられることは、文末表現「と思ふ」はその内部に意志・願望表現をとる傾向にあるものの、それ以外の表現を全く内部に取り得なかったわけではないことを示している。

### 3. 2. 文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」の文体的特徴

次に、両表現の文体的特徴を確認する。文末表現「とおぼゆ」は【表2】の通り、軍記物語で特に多用されているが、『平家物語』諸本における文末表現「とおぼゆ」の使用数を比較すると、読み本系の延慶本は46例、語り本系の覚一本は20例、『天草版平家物語』に関しては3例と、諸本により使用数が大幅に異なる(【表3】)。さらに、諸本の対応する箇所では文末思考動詞が使われている(14)～(16)の例をみると、延慶本と覚一本で「C類+とおぼゆ」となっている部分が、『天草版平家物語』では「B類+と思ふ」となっており、文末表現「と思ふ」「とおぼゆ」のいずれも使用可能なB類・C類を内部にとる文では、硬い文体では文末表現「とおぼゆ」が、よりやわらかい文体では文末表現「と思ふ」が使わ

<sup>13</sup> 自らの心情の表現を内部にとる「と思ふ」が1例みられたが、自らの心情を述べる表現としては、「\*糸惜だろう」とはいえず、この「と思ふ」は推量表現とは解釈し難い。この例においては、「そのような感情を心に抱いている」という、本動詞として用いられているといえる。

(iv) 尼公又宣ク、「(略)。彼人ヲ此破屋ニヲキ奉テモ、スデニ三年ニナル。只一人オワスル女房ニモ劣ラズ、糸惜ト思フ也。(略)」(『平家物語』<延慶本>上 p.459)

れやすいと推測される<sup>14</sup>。

【表3】平家物語における文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」

		A類		B類		C類		合計
		会話文	地の文等	会話文	地の文等	会話文	地の文等	
と思ふ	平家物語(覚一本)	13	2					15
	平家物語(延慶本)	19	2					21
	天草版平家物語	9		2		1		12
とおぼゆ	平家物語(覚一本)			2	2	15	1	20
	平家物語(延慶本)			12	2	32		46
	天草版平家物語			3				3

- (14) 「(略)。猶モ北面ノ下藤共ガ諫申事ナムドアラバ、当家追討ノ院宣被下ヌト覚ゾ。(略)」(『平家物語』<延慶本>上 p.143)
- (15) 「(略)。此後も讒奏する者あらば、当家追討の院宣下されつと覚るぞ。(略)」(『平家物語』<覚一本>上 p.94)
- (16) この後も讒奏する者あらば、当家滅ぼせとの院宣を下されうずと思ふぞ：(『天草版平家物語』 p.42)

### 3. 3. 中世以前の文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」のまとめ

中世以前の文末表現「と思ふ」は内部に意志・願望等話者自身の心のあり方に関する主観的な情報をとることが多い。他方、「とおぼゆ」が内部に意志・願望表現をとることは極めてまれであり、推量・判断・叙述等、外界の事物に関する情報をとることが多い。また、両表現とも軍記物語を中心とする会話文に多くあらわれるが、文末表現「とおぼゆ」は「と思ふ」と比べて硬質な表現であった。

<sup>14</sup> なお、『天草版平家物語』の文末表現「とおぼゆ」は3例と少ないが、いずれも(v)のように助動詞「う」に接続する例であり、「とおぼゆ」を「と思ふ」に置き換えた場合、この「う」の意味が意志か推量かわかりにくくなる可能性がある。つまり、文末表現「とおぼゆ」の使用により、「う」が意志ではなく推量の意味であることを表示していることも考えられる。

(v) この風には見えねども、夜のうちに四国の地につかうとおぼゆるぞ：(p.327) さらに、『天草版平家物語』の「B類+と思ふ」の2例はいずれも「る+うずと思ふ」の形であり、意志の意味でないことが明らかな例である(もう1例は前出の(16)の例)。

(vi) さらば上れ、われは近う失はれうずと思ふ：この世に亡い者と聞くならば、相構へてわが後世を弔へと言うて、(p.63)

#### 4. 近世における文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」

近世語の資料においては文末表現「と思ふ」「とおぼゆ」とも中世語資料と比べるとまとまった用例がみられず、用例のみられる資料でも、最も多い『春色辰巳園』で文末表現「と思ふ」が5例、『戴恩記』で文末表現「とおぼゆ」が4例みられる程度で少ない。この点については、近世にこれらの表現が多くは用いられていなかったのか、あるいは、実際には多用されていたが確認した資料では用いられていなかっただけなのか、いずれの可能性も考えられ、現時点では結論を出すには至らない。

(17) 「(略)。そうしての。袖なしの肩入にするから太織島かなんぞ見繕て買

ふ<sup>15</sup>と思ふヨ。」(『浮世風呂』 p.167)

(18) (略)、四季折々の賑か、二軒茶屋其外、楊枝見せ・葭笛茶屋等の美婦は、紅粉を粧ひ、品形の美きを見れば、樂は外にあらじとおぼゆる。(『辰巳之園』自序 p.297)

【表4】近世における文末表現「と思ふ」の用例数

	と思ふ						合計
	A類		B類		C類		
	会話文	地の文等	会話文	地の文等	会話文	地の文等	
醒睡笑		1		1			2
好色一代男	1				2		3
ひとりね				1			1
根南志具佐			1				1
根無草後編	2						2
遊子方言	1						1
辰巳之園			1				1
椿説弓張月	2						2
浮世風呂	2						2
浮世床			2				2
花街鑑			1				1
春色梅児誉美			1				1
春色辰巳園			2		3		5
春告鳥			3				3
合計	8	1	11	2	5	0	27

15 「買(かは)う」。発話者(かき)は「はなくた」であり発音が不明瞭である。

【表5】近世における文末表現「とおぼゆ」の用例数

	とおぼゆ						合計
	A類		B類		C類		
	会話文	地の文等	会話文	地の文等	会話文	地の文等	
醒睡笑					1		1
戴恩記					2	2	4
折たく柴の記					1		1
根南志具佐						1	1
根無草後編					1		1
辰巳之園				1			1
椿説弓張月					3		3
合計	0	0	0	1	8	3	12

近世における文末表現「とおぼゆ」の例は、下記のように、いずれも文語文におけるものであり、すでに口語文においては用いられにくい表現となっていることがうかがえる。

- (19) 「(略)。なに物をも撰ばずして皆へすこしづゝ食ふ時は、たがひに相制する所あるにや、食のために傷らるゝ事はすくなしとおぼゆる也」と仰られき。(『折たく柴の記』 p.166)
- (20) 「若殿ばらは、かゝる事を聞おくにしかず。子ども多かる中に、八郎はわきて心勇ければ、いまだ學問をばようせずと覚るぞ。(略)」(『椿説弓張月』上 p.76)

他方で、文末表現「と思はる」がみられるようになる<sup>16</sup>。文末表現「と思はる」は、自発の助動詞をとりこんだ語形であり、内部に外界の情報をとる（意志・願望の情報をとらない）点からも、文末表現「とおぼゆ」と同等の機能を持つ表現であるといえる<sup>17</sup>。ただし、文末表現「とおぼゆ」は会話文での使用も多いのに対し、文末表現「と思はる」は主として(21)のように地の文で用いられる点で

<sup>16</sup> 以降、近世語資料については「と思はる」の表記に統一して述べる。

また、調査した資料のうち、『かなめいし』『浮世物語』『一休ばなし』『たきつけ草』『もえくる』『けしずみ』『好色五人女』『日本永代蔵』『堀川波鼓』『冥途の飛脚』『國性爺合戦』『心中天の網島』『女殺油地獄』『仮名手本忠臣蔵』『歌意考』『黄表紙本金々先生栄華夢』『雨月物語』『箱まくら』『興斗月』には「と思ふ」「とおぼゆ」「と思はる」いずれの表現も用例がみられなかった。

なお、今回調査した中世語資料には、文末表現としての「と思はる」の用例はみられなかった。

<sup>17</sup> 「と思はる」の現代語形「と思われる」は自発構文とされ、「ある動きや思考、感情などが、能動主体の意志とは関係なく、あるいはそれに反して主体の中で自然に起きてくることを表すもの」(日本語記述文法研究会編(2009) p.284)であり、話者の判断行為を背景化することによって、客観的態度で表現しようとする形式である。

出現の傾向が異なる<sup>18</sup>。今回の調査の範囲では、会話文の用例は(22)のみであった。

- (21) シバシ有テ、池中ヨリ物有テ頭サシ出ス。水面ニアラハルハ所、半身バカリト思ハル。龍ニモ蟒ニモアラデ、マガフベクモナク、甚大ナル鯉魚ニテゾ有ケル。(『孔雀樓筆記』 p.282)
- (22) 「(略)、丹次郎より外にやア、マア私が目をかけてやらうとおもふ者は一人もねへかとおもはれますは。(略)」。(『春色梅児誉美』 p.105)

【表6】近世における文末表現「と思はる」の用例数

	と思はる						合計
	A類		B類		C類		
	会話文	地の文等	会話文	地の文等	会話文	地の文等	
好色一代男				1		1	2
孔雀樓筆記						2	2
蘭東事始				1		2	3
花街鑑				1			1
春色梅児誉美			1			1	2
春告鳥						1	1
合計	0	0	1	3	0	7	11

近代には文末表現「とおぼゆ」が用いられなくなるが(後述)、【表5】と【表6】をみると、「とおぼゆ」と「と思はる」の両表現がみられる近世においても、同一資料内に文末表現「とおぼゆ」と「と思はる」が同時に出現することはない。このことから、文末表現「と思はる」が「とおぼゆ」のかわりに用いられるようになった可能性が高い。中世には「と思ふ—とおぼゆ」という対応関係であったが、近世になると、動詞「思う」の自発形であることが明確で、一語化した「おぼゆ」より形態の境界の明確な「思はる」を使用した「と思はる」が選択され、「と思ふ—と思はる」という対応関係に整理されていったと考えられる。

加えて、文末表現「と思はる」の出現の背景には、動詞「おぼゆ」自体が古い語感を持ちつつあったことも考えられる。単に自発の「ゆ」のついた形式が古くなったのであれば、「とおぼえる」の形で文末表現「とおぼゆ」を引き継ぐことも可能だったはずであるが、そもそも動詞「おぼえる」自体が、「と思われる」と解釈できるような意味では使われなくなっていたようである。

江戸中期までの資料では、動詞「おぼゆ」「おぼえる」は「記憶する・習得する」「思われる・感じる」のどちらの意味でも用いられ、『戴恩記』『折たく柴の記』

<sup>18</sup> 現代語において、『思われる』『考えられる』などは、書きことばでは多用されるものの、話しことばではあまり用いられないなどの文体的特徴をもつ(日本語記述文法研究会編(2009) p.285)とされているが、これにつながるものであろう。

『雨月物語』『椿説弓張月』等、文語的文章で書かれた随筆や文学等では「思われる・感じる」の意味の用例の方が多数である。しかし洒落本や人情本では、「思われる・感じる」の意味の用例が少なく、それも(23)のように多くは地の文かつ「形容詞連用形+おぼえる」の形であり、「と+おぼゆ」の形は(18)の『辰巳之園』序文の例以外みられなかった。

(23) 泪は顔に玉の露、折から朧の雲はれて、明光〜と照る月に、見わたす方は遙々と、目もとゞかざる田甫道、里をはなれし荒寺の、なを物すごくおぼへけり (『春色梅児誉美』 p.71)

このように、文末表現「とおぼゆ」衰退の背景には、文末表現「と思ふ」との対応関係が明白な「と思はる」の形が使われるようになったこと、そもそも動詞「おぼえる」が「記憶する・習得する」の意味を担うようになり、「思われる・感じる」の意味では使われなくなったために、「とおぼえる」の形であっても文末表現「とおぼゆ」の用法を引き継げなかったことがあると考えられる。

## 5. 近代における文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」

近代になると、文末表現「とおぼゆ」は衰退傾向を強め、(24)のように文語的表現の中でわずかに用いられる表現となっている。

(24) (略)、胴よりは足の長い女とおぼゆると言ふ、すて筆ながく引いて見ともなかりしか可笑し、(略) (『ゆく雲』<sup>19</sup> p.209)

一方文末表現「と思ふ」は、第1章でみた通り、口語文においてその内部にC類をとり、一種の推量表現となる例が多く用いられるようになる。文学作品以外でも、以下のように洋学資料や自伝の類等にも用例がみられる(第5章および第6章参照)。

(25) Yoshiya itashité mo, shosen shôchi sen' no wa mochiron no koto to omoimasu. (『会話篇』 p.118)

(26) 凡二百ページ餘のものであつたと思ふ (『福翁自傳』 p.42)

文末表現「と思はる」は主に「と思はれる」の形で引き続き用いられているが、近代の文末表現「と思はる」も近世と同様、硬質な文章語で用いられるという性

---

<sup>19</sup> 『ゆく雲』には「と思ふ」の用例なし。

質をもっており、大半は(27)のように地の文で用いられている。

- (27) (略)、我ながら我爲た事の馬鹿らしさに、殆どいふべき言葉をも看出し得ぬのであるが、しかし考へて見ると、妻の誤解したのも無理はないと思はれる。(『其面影』 p.311)

内部にC類をとる形式としては文末表現「と思はる」が成立しているものの、文末表現「と思はる」は書き言葉への偏りがある。そのため、動詞「思ふ」を用いた文末表現に統一されていく中で、会話で使われやすい文末表現「と思ふ」も同様に内部にC類をとる形式で一種の推量表現として用いられるようになり、会話文において推量表現に準ずる機能を担うようになったと推測される。

古典語において対応関係にあった、個人的な意見・情報であることを表示する「と思ふ」と、情報を客観的な態度で表示する文末表現「とおぼゆ」が、近代以降、単にそれぞれ文末表現「と思ふ」と文末表現「と思はる」とに引き継がれただけでなく、文末表現「とおぼゆ」から文末表現「と思れる」へと移行するのと同時期に、文末表現「と思ふ」は、推量や叙述等、外界の情報を述べる表現を内部にとりやすくなっており、文末表現「と思ふ」の拡大と文末表現「とおぼゆ」の衰退とに関連性をみてよいと考える。

## 6. おわりに

中世まで、文末表現「とおぼゆ」はその内部に外界の事物についての情報をとる形式で用いられた一方、文末表現「と思ふ」は主として話者自身の心のあり方の情報をその内部にとる主観明示の表現として用いられた。しかし、文末表現「とおぼゆ」は動詞「おぼえる」が記憶の意味に特化していったことに伴い、衰退傾向をみせる。そして、既に多用されていた文末表現「と思ふ」との対応関係が明確な「と思はる」が、文末表現「とおぼゆ」を引き継ぐこととなった。ただし文末表現「と思はる」は主に文章語で用いられる表現であるため、より口語的な表現において使われやすい文末表現「と思ふ」が、近代以降その内部に外界の事物についての情報を取り、一種の推量表現としての用法にまで拡大するのを妨げなかった。

このように、文末表現「と思ふ」の拡大と文末表現「とおぼゆ」の衰退とには少なからず関連性がうかがえる。中世において文末表現「とおぼゆ」という形式が用いられていたこと、推量表現としての性格は持たないものの、文末表現「と思ふ」が表現形式としては多用されていたこと等、二種の思考動詞表現が分担しつつ発達していたことが、近代以降、文末表現「と思ふ」による推量表現が発達する土台となったと考えられる。そして文末表現「と思ふ」の発達により、「ゆ」

「れる・られる」等の自発形式を伴わなくとも文末思考動詞が外界の事柄内容を直接受け、推量の意味を表示できるようになり、また、口語的な表現の中でも、文末思考動詞による推量表現が多用されるようになった。

なお、文末表現「と思ふ」による推量表現が近代に発達したことには、文末表現「とおぼゆ」との関連だけではなく、近代に「分析的傾向」(田中 1965)が進み、古典語の推量助動詞の多くが衰退したこととも関連していよう。この点については、第9章で検討したい。

### 【資料】

『源氏物語』『枕草子』『太平記』<天正本>『正法眼蔵随聞記』『かなめいし』『浮世物語』『一休ばなし』『たきつけ草』『もえくる』『けしずみ』『出世景清』『堀川波鼓』『女殺油地獄』『浮世床』『春告鳥』以上、『新編日本古典文学全集』、小学館

『保元物語』『平治物語』<金刀比羅本系>『太平記』<流布本>『曾我物語』『義経記』『愚管抄』『宇治拾遺物語』『古今著聞集』『御伽草子』『醒睡笑』『戴恩記』『好色一代男』『好色五人女』『日本永代蔵』『冥途の飛脚』『國性爺合戦』『折たく柴の記』『心中天の網島』『ひとりね』『仮名手本忠臣蔵』『根南志具佐』『歌意考』『孔雀樓筆記』『根無草後編』『遊子方言』『辰巳之園』『金々先生栄華夢』『雨月物語』『椿説弓張月』『浮世風呂』『蘭東事始』『春色梅児誉美』『春色辰巳園』以上、『日本古典文学大系』、岩波書店

坂詰力治・見野久幸編(1997)『半井本平治物語本文および語彙索引』<半井本>武蔵野書院

梶原正昭他校注(1991・1993)『新日本古典文学大系 44・45 平家物語上・下』<覚一本>岩波書店

北原保雄他編(1990)『延慶本平家物語 本文篇上・下』<延慶本>勉誠社

長谷川端他編(1994)『神宮徴古館本 太平記』<神宮徴古館本>和泉書院

近藤政美他編(1999)『天草版平家物語語彙用例総索引(1)』勉誠出版

亀井孝他(1965・1967・1970・1971・1973)『史記桃源抄の研究 本文篇1~5』日本学術振興会

倉石武四郎他校訂(1996)『毛詩抄 詩経 1~4』岩波書店

大塚光信・来田隆編(1999)『エソポのハブラス本文と総索引 索引編』清文堂

池田廣司他(1972・1973・1983)『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇上・中・下』表現社(会話文の認定が困難な萬集類は調査対象外とした)

『甲駅新話』『風流裸人形』『箱まくら』『花街鑑』『興斗月』以上、『洒落本大成』中央公論社

Stefan Kaiser 編(1995) "Kuaiwa hen, twenty-five exercises in the Yedo

colloquial, for the use of students” “The western rediscovery of the Japanese language v.5” Curzon Press.

菅聡子・関礼子校注（2001）『新日本古典文学大系 明治編 24 樋口一葉集』 岩波書店

佐志傳編著（2006）『「福翁自傳」の研究 本文編』 慶應義塾大学出版会

伊藤整他編（1961・1964）『日本現代文學全集 23・24 夏目漱石集(1)(2)』 講談社

伊藤整他編（1962）『日本現代文學全集 4 坪内逍遙・二葉亭四迷集』 講談社

『新潮文庫 明治の文豪』 CD-ROM（1997）新潮社

日国オンライン（JapanKnowledge Lib）<http://japanknowledge.com/library/>

## 第5章 文末表現「と思ふ」の口語性—近代の論説文を中心に—

### 1. はじめに

前章まで、文末表現「と思ふ」による推量表現が発達する以前の文末思考動詞の状況をみてきた。そして、近世以前には、文末表現「と思ふ」とは機能や文体・待遇面での性格を異にする「と存ず」「とおぼゆ」が、文末思考動詞として多用されていたことがわかった。本章以降では文末表現「と思ふ」が一種の推量表現としての機能を獲得した後の近代における文末思考動詞の状況についてみていきたい。

既に第1章で、中古から近代の文学作品における文末表現「と思ふ」の用例を調査し、推量表現に準ずる文末表現「と思ふ」が多く用いられるようになったのは近代であることを確認した。そして、近代文学作品の中でも、文語文で書かれた資料においては文末表現「と思ふ」は「A類+と思ふ」1例を除いてみられない一方、口語文で書かれた資料においては多用されていることが明らかになった。

しかし、文末表現「と思ふ」が近代口語文において使われやすく、文語文においては使われにくい、という点について検証するためには、さらなる調査が必要であろう。例えば、文語文で書かれた文学作品は近代初期に多く、そもそもその時期には文末表現「と思ふ」が定着していなかった可能性がある。また、文末表現「と思ふ」が筆者の使用語彙であるか否かという点についても検討する必要がある。

そこで本章では、近代における文末表現「と思ふ」の使用の多寡は、資料の文体と関わるのか、それ以外の要因によるものなのかを明らかにしたい。具体的には、主として明治期に、同一の著者によって書かれた口語文・文語文両方の文章を比較し、文末表現「と思ふ」の使用状況をみる。同一の著者による複数の資料をみることによって、文末表現「と思ふ」の使用が文体によるものなのか、個人の使用語彙によるものであるのかについても検討できると考えたためである。また、自らの考えを述べる文の多くみられる論説文においては、文末表現「と思ふ」の用例が多くあらわれると考えられるため、本章では近代語資料のうち、論説を考察対象とする。

### 2. 資料と分析方法

本章では、福沢諭吉(1834-1901)、坪内逍遙(1859-1935)、森鷗外(1862-1922)による著作を調査対象とする。この三者は近代日本を代表する知識人であり、口語文・文語文それぞれの文体で書かれた文章が豊富で、文学作品以外にも、評論

等の著書がある。加えて、この三者が近代・現代語の発展過程における重要な人物であるということにも注目した。福沢諭吉と坪内逍遙は、言文一致に関わる代表的な人物である。また、森鷗外については、文学作品の執筆を口語文だけでなく文語文（擬古文）でもおこなっている。第1章でみた通り、鷗外作品のうち『キタ・セクスアリス』『阿部一族』のような、口語文で書かれた作品では文末表現「と思ふ」の使用がみられた一方、『舞姫』や『うたかたの記』のような文語文で書かれた作品には、文末表現「と思ふ」はみられなかった。このように、作品の文体により文末表現「と思ふ」の出現状況が異なっていたが、論説にもそのような傾向があらわれている可能性がある。

資料の選定においては、その文体と成立年代とに幅を持たせるために、文語文で書かれた論説・口語文で書かれた論説それぞれについて、その著者の著した比較的初期の文章から、晩年に近い文章まで広く見渡すことを目指した。

本章においても、文末表現「と思ふ」のトの内部の情報を、A類（意志・願望表現をトの内部にとるもの）・B類（推量・疑問表現をトの内部にとるもの）・C類（判断・叙述の表現をトの内部にとるもの）の3つにわけた上で、出現状況を考察する。

以下、福沢諭吉、坪内逍遙、森鷗外の順に、文末表現「と思ふ」の使用の状況をみていく。各節冒頭に資料名を列挙し、( )でその資料の文の概数を示したが、文の認定が困難な場合があり、あくまで目安である。

### 3. 各資料における出現状況

#### 3. 1. 福沢諭吉

福沢諭吉については、以下の資料における文末表現「と思ふ」の出現状況を調査した<sup>20</sup>。

##### 【文語文】

「慶應義塾之記」（慶應4年・約30文）

『学問のすゝめ』（明治5年～・約1500文）

『文字之教』（明治6年・約620文）

『文明論之概略』（明治8年・約2320文）

「学問之独立」（明治16年・約230文）

「交詢社第十三回大会に於て演説」（明治25年・約40文）

「時事新報第五千号」（明治30年・約40文）

---

<sup>20</sup> 以降、本章では書籍の形式で公開された資料には『 』を、それ以外の形式で公開された資料には「 」を付して示す。

## 【口語文】

- 「演説事始め」(明治7年・約30文)
- 「英吉利法律学校開校式の演説」(明治18年・約50文)
- 「福澤先生浮世談」(明治31年・約340文)
- 「交詢社第十九回大会に於て演説」(明治31年・約90文)
- 『福翁自傳』(明治32年・約3350文)

なお、上記のうち「交詢社第十三回大会に於て演説」は、演説の2日後に『時事新報』に掲載されたもので、演説がもととなった文章ではあるが文語文で書かれている。「演説事始め」は明治初期に口語体でつづった演説の草稿である。「英吉利法律学校開校式の演説」は開校式祝辞の速記録である。「交詢社第十九回大会に於て演説」も演説を速記したものであり、冒頭で「左の一篇は一昨日交詢社大会に於ける福澤先生の演説を速記したるものなり。」(p.424)と断っている。また、注に「(略)原稿なしの覚書による演説」(p.425)であると示されている。「福澤先生浮世談」『福翁自傳』は、明治後期にかかれた口語文であり、いずれも矢野由次郎によって記録された口述筆記である。

福沢諭吉によるこれらの文章に、文末表現「と思ふ」は計52例みられた(【表1】)。その多くを『福翁自傳』の用例が占めている。文語文で書かれた「慶応義塾之記」『学問のすゝめ』、『文字之教』「学問之独立」『文明論之概略』「時事新報第五千号」「交詢社第十三回大会に於て演説」には、文末表現「と思ふ」は1例もみられなかった。口語文の文章では、明治初期の草稿「演説事始め」には用例がなかったものの、それ以外の文章では、短い文章でありながら、いくつかの用例を確認することができた。なお、全て地の文における用例であった。

【表1】福沢諭吉の文章における文末表現「と思ふ」の用例数

	A類	B類	C類	合計
英吉利法律学校開校式の演説	0	1	0	1
交詢社第十九回大会に於て演説	1	0	0	1
福澤先生浮世談	0	0	2	2
福翁自傳	2	19	27	48
合計	3	20	29	52

※「交詢社第十九回大会に於て演説」は、『福沢諭吉著作集第5巻』の編者による表題(凡例による情報)である。

### ■A類をトの内部にとる例

願望や意志をトの内部にとる文末表現「と思ふ」は計3例みられた。次の例は、

願望表現「たいもの+と思ふ」の例である。

- (1) それはさておき、今日でもあの書いたものを見れば、文久三年の事情はよくわかって、外交歴史の材料にもなり、すこぶる面白いものであるが、何分にも首には易えられず焼いてしまったが、もしも今の世の中に誰か持っている人があるなら見たいものと思います。(『福翁自傳』 p.160)

また、意志をトの内部にとる例は1例みられた。

- (2) 「左様さ、まず日本一の大金持になって思うさま金を使うてみようと思います」(『福翁自傳 p.20』)

次の例は、「と思ふ」の主語が「貴方がた」であるようにも解釈でき、その場合、この例における「思ふ」は「貴方がた」の実際の動作を表す本動詞であるということになるが、「と思ふ」直後の「それが私の道楽、死ぬまでの道楽。何卒皆さんも御同意下さるように。」の言葉から、一人称主語である「私」の願望であると解釈し、文末表現「と思ふ」として扱うこととした。

- (3) 私は死ぬまでそれを遣る。貴方がたは命の長い話であるから、何卒してこの人間世界、世界は率ざ知らず、日本世界をもっとわいゝとアヂテーションをさせて、そうして進歩するように致したいと思う。それが私の道楽、死ぬまでの道楽。何卒皆さんも御同意下さるように。(「交詢社第十九回大会に於て演説」 p.431)

#### ■B類をトの内部にとる例

推量表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」は「英吉利法律学校開校式の演説」に1例、『福翁自傳』に19例みられた。

- (4) 是までは随分拙者は隠君子でやると云っても、何うか斯うか無理にも政府へ潜り込みて役人になり、国民の租税を食むだが、そう沢山入ることは出来まいと思う。(「英吉利法律学校開校式の演説」 p.365)

『福翁自傳』には推量表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」の用例が多い。以下は、それぞれ「だろう」「う・よう」をトの内部にとる用例である。

- (5) 人に金を借用してその催促に逢うて返すことが出来ないというときの心

配は、あたかも白刃をもって後ろから追っ蒐けられるような心地がする  
だろうと思います。(『福翁自傳』 p.249)

- (6) 就学勉強中はおのずから静かにして居らなければならぬ、という理屈が  
ここに出てこようと思う。(『福翁自傳』 p.94)

#### ■C類をトの内部にとる例

『福翁自傳』には、文末表現「と思ふ」が 52 例みられるが、そのうち外界の  
事物への判断・叙述の表現をトの内部にとる用例が 29 例と最も多くなっている。

また、『福翁自傳』には、「過去形＋と思ふ」の形が 8 例と多くみられるのが特  
徴的である。これは、自伝という回想的な性格の文章が多くあらわれる資料であ  
るためであろう。

- (7) その時にも私は学業の進歩が随分速くて、塾中には大勢書生があるけれ  
ども、その中ではマア出来の宜い方であったと思う。(『福翁自傳』 p.44)
- (8) ところがまた不幸な話で、九月の十日ごろであったと思う。(『福翁自傳』  
p.47)
- (9) 何でも、加藤弘之、津田真一郎（真道）なども御目附か御使番かになっ  
ていたと思う。(『福翁自傳』 p.190)
- (10) 後にその松木が寺島宗則となって、参議とか外務卿とかいう実際の国事  
に当たったのは、実は本人の柄において商売違いであったと思います。(『福  
翁自傳』 p.181)

また、同様に自伝という資料の性格から、「ころと思う」「時だと思う」等、時  
の表現をトの内部にとる形も多くみられる。

- (11) これは私の十六、七のころと思います。(『福翁自傳』 p.20)
- (12) それからその時に私は十五、六の時だと思う。(『福翁自傳』 p.23)
- (13) ある歳、安政三年か四年と思う。(『福翁自傳』 p.89)

なお、現代語において、自らの不確かな記憶について述べる場合の文末表現「と  
思う」は、森山（1992）や宮崎（2001）が述べるように、「だろう」には置き換  
えられない。例えば森山（1992）は、「と思う」は使えるが「だろう」は使用で  
きない例として、「話し手が直接確認できたようなことであって、かつ、確実なこ  
ととして断定しがたいこと（例えば、記憶が不確かな場合など）であれば、『だろ  
う』などの推量の形式を使って表現することができず、その代わりに、『と思う』  
しか使えないことになる」（p.108）としている。

「た+と思ふ」の形であっても、(7)や(10)のような評価的な内容を述べるような例については、現代語においても「と思う」を「だろう」に置き換えることが可能であろう。しかし、(8)(9)および(11)～(13)のような過去の事実を叙述する例については、現代語では「だろう」ではあらかわすことができない、不確かな記憶について述べる例である。このような例において、近代語でも「と思ふ」を用いて表現することが可能であったことがわかる。とはいえ、トの内部の情報を断定せず、不確かなものとして述べる点で、これらの文末表現「と思ふ」も推量表現の一種と位置づけてよいと思われる。

他に判断や叙述の表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」の用例としては、以下のようなものがある。

(14) 自分でも不思議のようにあるが、これは如何しても私の家の風だと思います。(『福翁自傳』p.59)

(15) 後で考えれば却って危ないことだと思う。(『福翁自傳』p.39)

なお、C類をトの内部にとる文末表現「と思ふ」は、『福翁自傳』と同じく口述筆記である「福澤先生浮世談」にも2例みられる。口頭の言葉において、文末表現「と思ふ」による推量表現が用いられやすかったと考えられる。

(16) 或は又英雄色を好むと云い、心身屈強な者は必ず色に溺れると斯う云て、妙な所に説を附ける者があるが、私は丸で反対で、如何しても色に溺れる者は弱い者だと思う。(『福澤先生浮世談』p.227)

(17) 真実強い屈強な精神を持って居る者でなければ、己に克つと云うことは出来ないことと思う。(『福澤先生浮世談』p.228)

このように、福沢諭吉の著書においては、文末表現「と思ふ」は口語体の文章にのみあられ、文語体の文章にはあられない。初期の著作に文末表現「と思ふ」があられにくいのは、当時の著作が文語文で書かれていたことがその一因であろう。口語体の文章では、文章量が少ない資料にも、文末表現「と思ふ」がみられた。口語体であることにくわえ文章量も多い『福翁自傳』では、文末表現「と思ふ」が非常に多くあられ、特に推量・疑問および判断・叙述をトの内部にとるタイプの文末表現「と思ふ」の数が多い。

なお、文語文である「学問之独立」には、文末表現「と思ふ」はみられなかったものの、「と信ず」が3例みられた。

(18) 蓋しその然る所以は、武人の政府、文を軽ろんずるの弊などゝて嘆息する者もありしかども、我輩の所見は全く之に反し、政府の文武に拘わら

ず、子弟の教育を司る学者をして政事に参与せしむるは国の大害にして、徳川の制度慣行こそ当を得たるものと信ずるなり。（「学問之独立」 p.230）

- (19) 蓋し医学の秘密は是等の注意に由て發明することもあらんと信ず。（「学問之独立」 p.251）

この文末表現「と信ず」については、帝国議会議録（明治23年～）においてもみられる表現である。文末表現「と信ず」は、単なる思いつきを述べるのではなく、強い信念を表明する際に用いられているようである（第8章参照）。

### 3. 2. 坪内逍遙

坪内逍遙については、以下の資料における文末表現「と思ふ」の出現状況を調査した。

#### 【文語文】

- 「新聞紙の小説」（明治23年・約100文）
- 「方今の小・中學の徳育 並びに其弊」（明治31年・約90文）
- 「新聞小説鑑裁の標準」（明治35年1・2月『早稻田學報』所載・約200文）
- 「文學藝術の三作用」（明治41年・約80文）

#### 【口語文】

- 「倫理入門講話」（明治35年・約810文）
- 「文學入門」（明治37年・約1090文）
- 「時代おくれの脚本」（明治39年・約110文）
- 「文部大臣の訓令につきて」（明治39年・約80文）

【表2】坪内逍遙の文章における文末表現「と思ふ」の用例数

	A類	B類	C類	合計
倫理入門講話	2	13	14	29
文學入門	2	12	6	20
時代おくれの脚本	0	4	3	7
文部大臣の訓令につきて	0	4	3	7
合計	4	33	26	63

調査した資料のうち、文末表現「と思ふ」は計63例みられた。

口語文で書かれた「倫理入門講話」「文學入門」「時代おくれの脚本」「文部大臣の訓令につきて」には、文末表現「と思ふ」の用例がみられた。一方で、文語文

で書かれた「新聞紙の小説」「方今の小・中學の徳育 並びに其弊」「新聞小説鑑裁の標準」「文學藝術の三作用」は、文章量が少ないことも関係していようが、文末表現「と思ふ」が1例もみられなかった。

文末表現「と思ふ」の用例がみられない「新聞小説鑑裁の標準」と、用例がみられた「倫理入門講話」は、いずれも明治35年に発表されている。「文學藝術の三作用」にいたっては、明治40年代に入ってからのものである。つまり、文語文で書かれた文章は、時代的に新しいものであっても文末表現「と思ふ」はあらわれにくい。このことから、文末表現「と思ふ」の使用には、発表年代の新旧より、文体差の方が大きく関係していると推測される。

#### ■A類をトの内部にとる例

願望表現をトの内部にとるものが「倫理入門講話」に1例みられる。「たいと思う」の形である。

- (20) だから皆さんに向つても、高尚な善悪邪正を説くに先立つて、先づ最も浅近な善悪すなはち善悪の根本、善悪のアイウエオはどこにあるかと云ふことを説いて、明瞭な、精確な、周匝な觀念を得て貰ひたいと思ふ。  
（「倫理入門講話」 p.194）

意志をトの内部にとる用例は、下記のようなものである。

- (21) それを取調べて見ようと思ふ。（「倫理入門講話」 p.201）  
(22) それゆゑに文學と云ふことを或ひは全く心得てゐないお方、又は十分に御存じでないお方のために文學と云ふことに就いて概畧のお話をしようと思ふ。（「文學入門」 p.159）

#### ■B類をトの内部にとる例

推量・疑問表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」は計33例であった。「倫理入門講話」に13例、「文學入門」に12例、「時代おくれの脚本」には4例、「文部大臣の訓令につきて」に4例みられた。坪内の論説においては、推量・疑問をトの内部にとる文末表現「と思ふ」が多くみられる。トの内部には「まい」「う」「だろう」等の推量表現をとっている。

- (23) (略) 共に満足させるには出来まいと思ふ。(「時代おくれの脚本」 p.245)
- (24) 更に一層進んで云ふと、犬や猫でもアハレ程度には感ずるであらうと思ふ。(「文學入門」 p.172)
- (25) とにかく、悪の根を私慾一方とするはほゞ當を得てゐるだらうと思ふ。(「倫理入門講話」 p.178)
- (26) 青年の意氣銷沈といふことにも、種々の原因があらうと思ふ。(「文部大臣の訓令につきて」 p.706)

#### ■C類をトの内部にとる例

判断や叙述をトの内部にとる推量の助動詞に準ずる文末表現「と思ふ」の用例は、26例である。「倫理入門講話」に14例、「文學入門」に6例、「時代おくれの脚本」に3例、「文部大臣の訓令につきて」に3例みられた。C類をトの内部にとる文末表現「と思ふ」は、B類に次いで多くみられた。

- (27) 兼愛すなはち自他を兼ね愛する心でなければ善の根にはならぬと云ふことは、只今お話をしたので、ほゞ分つて居ると思ふ。(「倫理入門講話」 p.215)
- (28) 文明人も未開人も月を見ても花を見ても只アハレアハレと感ずるばかりは同じであると思ふ。(「文學入門」 p.172)
- (29) これからの作は自然の初めに戻らねばならぬと思ふ。(「時代おくれの脚本」 p.254)
- (30) 青年の心機を轉ぜしむる工夫が第一だと思ふ。(「文部大臣の訓令につきて」 p.712)

坪内逍遙の著作においても、口語体の文章には文末表現「と思ふ」が使われやすく、文語体の文章には使われていないことがわかる。また、多くの文章で、推量・疑問および判断・叙述表現をトの内部にとるタイプの文末表現「と思ふ」が多く使われていることがわかる。これは、福沢諭吉の文章においてみられたものと同様の傾向であるといえる。また、文末表現「と思ふ」の使用の多寡には、発表年代より、文体差の方が大きく関係していたと推察される。

### 3. 3. 森鷗外

森鷗外の文学作品については、既に第1章において『舞姫』『うたかたの記』『キタ・セクスアリス』『阿部一族』の文末表現「と思ふ」を調査した。その結果は、文語文である『舞姫』および『うたかたの記』では文末表現「と思ふ」の用例が

みられなかったのに対し、『キタ・セクスアリス』に 11 例、『阿部一族』に 1 例と、口語文に例がみられたというものであった。

ここでは、森鷗外による文学作品以外の資料として、以下のものを調査した。

#### 【文語文】

「日本兵食論大意」(明治 19 年 1 月「陸軍医学会雑誌」三・約 110 文)

「日本家屋説自抄」(明治 21 年 12 月 5・6 日「読売新聞」・約 70 文)

「衛生新誌の真面目」(明治 22 年 3 月 25 日「衛生新誌」一・約 120 文)

「リツヒヤルト・デエメルが澳地利労働者唱歌組合新聞に投ぜし自記の略伝」  
(明治 41 年 1 月 10 日「詩人」八・原題 Autobiographie. Nach der “Österreichischen Arbeiter-Sängerzeitung.”・約 50 文)

#### 【口語文】

「服乳の注意」(明治 22 年 3 月 25 日「衛生新誌」一・約 90 文)

「靴？履？」(明治 22 年 5 月 25 日「衛生新誌」三・約 130 文)

「鷗外漁史とは誰ぞ」(明治 33 年 1 月 1 日「福岡日日新聞」・約 140 文)

「假名遣意見」(明治 41 年 6 月 26 日・約 440 文)

「長谷川辰之助」(明治 42 年 8 月発行『二葉亭四迷』に寄せた追悼文・約 200 文)

「Resignation の説」(明治 42 年 12 月『新潮』・約 60 文)

「夏目漱石論」(明治 43 年 7 月『新潮』・約 30 文)

【表 3】森鷗外の文章における文末表現「と思ふ」の用例数

	A類	B類	C類	合計
服乳の注意	0	1	0	1
假名遣意見	3	41	10	54
長谷川辰之助	0	3	1	4
Resignationの説	0	3	0	3
夏目漱石論	0	0	2	2
合計	3	48	13	64

以上の資料のうち、文語文の作品の中で、文末表現「と思ふ」のあらわれたものはなかった。一方、口語文として上に挙げたもののうち、文末表現「と思ふ」があらわれなかったのは、「靴？履？」「鷗外漁史とは誰ぞ」のみで、口語体で書かれた文章の多くに文末表現「と思ふ」があらわれており、計 64 例の用例がみられた。文末表現「と思ふ」の使用状況に、文章量の多寡が関わっている可能性はある。しかし、口語文の文章のうち、「服乳の注意」「Resignation の説」「夏目漱石論」は文語文の資料として調査したものと同等かそれ以下の分量であるにも

関わらず、「と思ふ」の用例がみられることを考えると、やはり文末表現「と思ふ」は口語文に用いられやすい表現であることがうかがえる。

#### ■A類をトの内部にとる例

願望表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」の例は次の1例で、これは、話の導入として使われている表現である。

- (31) そこで假名遣の歴史に付きまして自分の観察を異にして居る點を二、三申したいと思ひます。(「假名遣意見」 p.388)

意志をトの内部にとる例は「假名遣意見」に2例あり、これも(31)の例と同様に、論の導入の部分にみられるものである。

- (32) 是れから少しく自分の意見を述べようと思ひます。(「假名遣意見」 p.391)

(31) や (32) のような、「(意見を) 申したい／述べようと思う」と言った後に自らの意見を述べ、論を進める話法は、鷗外以外の文章にもみられるものである。例えば、帝国議会議事録にも多くみられ(第8章参照)、また、前掲の坪内逍遙「文學入門」においては(22)の例の他、「つゞいては文學の體式といふことに説き及ぼさうと思ふ。」(「文學入門」 p.190)の例がある。これは、説明しようという意志を宣言した後に説明を行うもので、上述の話法と類似したものであるといえよう。このように「願望・意志+と思ふ」の形で論の進行を表明する形式は、近代には定着していたといえる。

また、このような表現は現代語でも多く用いられており、例えば内田(2008)は、学術論文において日本語母語話者が使う文末表現として、「～と思う」をあげ、「『今後もこの研究を進めていきたいと思う』『次の節で考察しようと思う』など、論文の進行を構築する文である」(p.45)と説明している。また、川本(2010)は、祝賀会において、「来賓の挨拶でも『お祝いを申し上げたいと思います』『祈念申し上げたいと思います』と、『と思います』の連発」(p.18)であったと述べているが、このようなものも、(31) や (32) と同様の使われ方をする文末表現「と思う」の例であるといえる。

#### ■B類をトの内部にとる例

推量・疑問表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」の数は、「服乳の注意」に

1例、「假名遣意見」に41例、「長谷川辰之助」と「Resignationの説」に各3例ずつの、計48例であり、森鷗外の文章においてはこのタイプの文末表現「と思ふ」が最も多かった。「だろうと思う」の形のほか、「まい」をトの内部にとるものもある。

- (33) 要するに正だとか邪だとか云ふことが絶待的に假名遣にあるとは申しませぬけれども幾分か正しい側と云ふことがあるだらうと思ひます。(「假名遣意見」 p.393)
- (34) 斯う云ふ風に認めて居りますが、或は我邦の古代でも文語になつて居る言葉の外に澤山の方言があつたのではあるまいかと思ふのであります。(「假名遣意見」 p.389)
- (35) これと同じ場合に、言はれたり書かれたりしたことが、世の中には澤山あるだらうと思ふ。(「長谷川辰之助」 p.401)
- (36) これは確に思想の貧弱な徴候だらうと思ふのです。(「Resignationの説」 p.403)

なお、「假名遣意見」では、「かと思う」の形が多くみられた。

- (37) 少くも此の假名遣を少数者の用に供する者だと云ふ側から之れを排斥しますれば、其の反対の側に立ちますると云ふと、斯う云ふ風に言へるかと思ひます。(「假名遣意見」 p.391)
- (38) 少数者のして居ることにもう少し重きを措くのが宜しいかと思ふ。(「假名遣意見」 p.392)

#### ■C類をトの内部にとる例

判断や叙述の表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」の用例は、「假名遣意見」に10例、「長谷川辰之助」に1例、「夏目漱石論」に2例あり、合計13例であった。

- (39) 何も私が尋ねて行かなくても好いと思ふ。(「長谷川辰之助」 p.400)
- (40) 二度ばかり逢つたばかりであるが、立派な紳士であると思ふ。(「夏目漱石論」 p.404)
- (41) さうして見ると假名遣は既に出來た初めから少数者の假名遣を多数者に用ゐさせるものではなかつたらうかと云ふ疑があり得ると思ひます。(「假名遣意見」 p.389)

文語体で書かれた「衛生新誌の真面目」と、口語体で書かれた「服乳の注意」はともに、明治22年3月25日に同じ『衛生新誌一』に掲載された文章であるが、文語文である「衛生新誌の真面目」には文末表現「と思ふ」が1例もあらわれていないのに対し、口語体である「服乳の注意」では1例ながら、文末表現「と思ふ」がみられる。坪内逍遙の文章においてみられた傾向と同様に、同じ時期の文章であっても、口語文には文末表現「と思ふ」があらわれやすく、文語文にはあらわれにくいようである。

文語文である「リツヒヤルト・デエメルが澳地利労働者唱歌組合新聞に投ぜし自記の略伝」には文末表現「と思ふ」がみられなかったが、福沢諭吉の「学問の独立」と同様、文末表現「と信ず」がみられたことは注目される。

- (42) 余は此書を以て Goethe、Byron 以来、前人の百方之を求むれども得ること能はざりし、現代叙事詩の形式を成熟したるものと信ず。(「リツヒヤルト・デエメルが澳地利労働者唱歌組合新聞に投ぜし自記の略伝」p.278)

このように、文語文において文末表現「と思ふ」が使われにくい一方で、文末表現「と信ず」がみられるのは、強い信念をあらわす表現である文末表現「と信ず」の方が、文末表現「と思ふ」よりも硬質な表現であるためであろうか。文語文において文末思考動詞自体が使われにくいというより、文末表現「と思ふ」がもつ性格によって、文語文に文末表現「と思ふ」が使われにくかったという可能性がある。すなわち、文末表現「と思ふ」は、熟考を経たり、その信念と長く心に持っていたりというようなニュアンスをもたず、また、いわば個人的な考えを比較的気軽に表明する表現であるために、硬質な文語文になじまず、文語文においては「と信ず」等の文末表現が好まれたとも考えられる。

短い文章であっても、口語文であれば、多くの文章において文末表現「と思ふ」が用いられていた。また、「假名遣意見」は、文末表現「と思ふ」の数が54例と多いが、これは内容としても自らの意見を述べるものであり、しかも文章量も約440文と多いためであろう。鷗外の文章に限らず、口語体で、ある程度の分量がある文章では、文末表現「と思ふ」が多くあらわれることがわかる。一方、文語体の文章では文章量の多寡に関わらず、文末表現「と思ふ」の用例がみられなかった。

また、福沢や坪内同様、判断・叙述や推量・疑問の表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」が大半を占めている。

#### 4. おわりに

以上の調査から、福沢諭吉・坪内逍遙・森鷗外の3人の著者に共通して、文末表現「と思ふ」は口語文に出現しやすいことがわかった。

同じ人物の著作でも、口語文には文末表現「と思ふ」が多くみられたのに対し、文語文にはあられわれず、口語文において「B類+と思ふ」「C類+と思ふ」が多く用いられるようになった時期以降に書かれた資料であっても、文語文による論説には文末表現「と思ふ」があらわれないようであった。つまり、近代における文末表現「と思ふ」の出現の多寡は、個人の使用語彙や著作の発表年代よりも、口語・文語という文体の差によるものであるといえる。

文末表現「と思ふ」のトの内部の情報別にみると、意志・願望表現のA類、推量・疑問のB類、判断・叙述等のC類、いずれも口語文のみにあらわれた。願望・意志表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」と比べ、判断・叙述や推量・疑問の表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」の使用が多くみられ、文全体として推量表現となる場合に使われている例が多いことがわかった。これは、近代文学作品においてみられたのと同様の傾向である。

文語文においては、文末表現「と思ふ」があらわれにくい一方で、文末表現「と信ず」がいくつかの論説にみられた。このことから、文末思考動詞自体が文語体の文章になじまないというより、文末表現「と思ふ」のもつ、個人的な考えをいわば気軽に表明するという性格のために、文末表現「と思ふ」が硬質な文語文には用いられにくかった可能性がある。「と信ず」をはじめとした、他の文末思考動詞の使用状況およびその性格については、次章以降で検討したい。

#### 【資料】

福沢諭吉：

『学問のすゝめ』『文字之教』『日本現代文学全集2 福沢諭吉・中江兆民・岡倉天心・徳富蘇峰・三宅雪嶺』講談社 1980

『文明論之概略』 岩波書店 1962

『福翁自傳』 富田正文校訂 岩波書店 1978

「慶應義塾之記」「学問之独立」「交詢社第十三回大会に於て演説」「時事新報第五千号」「演説事始め」「英吉利法律学校開校式の演説」「交詢社第十九回大会に於て演説」西川俊作・山内慶太編『福沢諭吉著作集 第5巻』慶應義塾大学出版会 2002

「福澤先生浮世談」西澤直子編『福沢諭吉著作集 第10巻』慶應義塾大学出版会 2003

坪内逍遙：

「新聞紙の小説」「方今の小・中學の徳育 並びに其弊」「新聞小説鑑裁の標準」「文學藝術の三作用」「倫理入門講話」「文學入門」「時代おくれの脚本」「文部大臣の訓令につきて」逍遙協会編『逍遙選集』6・10・11・別冊3 第一書房 1977

森鷗外：

「鷗外漁史とは誰ぞ」「假名遣意見」「長谷川辰之助」「Resignation の説」「夏目漱石論」『明治文學全集 27 森鷗外集』筑摩書房 1965

「日本兵食論大意」「日本家屋説自抄」「衛生新誌の真面目」「服乳の注意」「靴？ 履？」『鷗外選集 第11巻』岩波書店 1979

「リツヒヤルト・デエメルが澳地利労働者唱歌組合新聞に投ぜし自記の略伝」『鷗外選集 第16巻』岩波書店 1980

## 第6章 洋学資料における文末思考動詞

### 1. はじめに

これまでみてきたように、トの内部に判断や叙述の表現をとり、推量表現に準じて用いられる文末表現「と思ふ」が多用されるようになったのは言文一致の進んだ明治 20 (1887) 年代頃である。その要因として、日本語内部に起こった古典語助動詞の衰退 (北原 1982 等)、「とおぼゆ」の衰退 (第4章参照) 等が考えられるが、一方、外的要因として、欧文脈の影響があるか否かについても検討されるべきであろう。例えば、英語の“I think”のような表現の直訳として文末表現「と思ふ」が定着したという推論も十分ありうるものであろう。

そこで本章では、江戸時代末から明治期の近代洋学資料にみられる文末思考動詞を調査し、日本語文における文末思考動詞の出現状況をみるとともに、それに対応する英文を確認し、文末思考動詞と欧文脈の関係を考えたい。

### 2. 各資料における出現状況

本章では、近代洋学資料のうち、「直訳物」、「会話書」、「文典」の3つのジャンルの資料および『和英語林集成』における文末思考動詞を調査する<sup>21</sup>。

また、前章までと同様、文末思考動詞のトの内部の情報を、A類 (意志・願望表現)、B類 (推量・疑問表現)、C類 (判断・叙述表現等) の3つにわけて考察する。

なお、用例をあげる際は、原文の表記で記すよう努めたが、日本語文内で人名が「一」と表記されている場合には、該当する人名を英文から補って示した。また、直訳物の日本語文については、英文の下に付された日本語訳を、本文中に示された数字の順番に従って並べ替えて示した。

#### 2. 1. 直訳物

直訳物として調査した資料は下記の通りである。

栗野忠雄訳『パーリー氏万国史直訳』(1885)

飯塚栄太郎訳『ニューナショナル第三リードル独案内』(1887)

---

<sup>21</sup> 資料については、『日本語学研究事典』の「洋学資料」の項目や森岡 (1999) 等を参考に、閲覧が可能なものを調査対象とした。

- 西山義行訳『ロングマンズ第三読本直訳』（1887）  
 斎藤八郎訳『スウキントン氏 英文典直譯』（1887）  
 斎藤八郎訳『ピネヲ氏 英文典直訳』（1887）  
 大島国千代訳『ロングマンズ第三読本直訳注釈』（1895）

上記のうち、『スウキントン氏 英文典直譯』、『ピネヲ氏 英文典直訳』については、内容としては文典であるが、文体としては欧文直訳体で書かれていることから、直訳物として扱うこととした。

直訳物における文末思考動詞の用例数を【表 1】に示す。

【表 1】直訳物における文末思考動詞

	と思ふ			と考へる			と考へらる			と想像さる		
	A類	B類	C類	A類	B類	C類	A類	B類	C類	A類	B類	C類
パーリー氏万国史直訳(1885)						1			2			5
ニューナショナル第三リードル独案内(1887)	1		3		1	3						
ロングマンズ第三読本直訳(1887)					1	1						
ロングマンズ第三読本直訳注釈(1895)					1	1						
合計	1		3		3	6			2			5

直訳物においては、各文末思考動詞に数例ずつの用例がみられるのみであるが、これは、直訳物がそもそも文末表現「と思ふ」のあらわれにくい文語文（第5章参照）で書かれているためであろう。一方で、文末表現「と思ふ」より、動詞「考へる」を用いた文末表現「と考へる」「と考へらる」の表現が多く使われていることも注目される。また、「と思ふ」以外の文末思考動詞がトの内部にA類の意志・願望表現をとることが少ない点は、現代語や他の近代語資料における傾向と同様である。以下、文末表現「と思ふ」「と考へる」「と考へらる」の例をあげる。

- (1) 私ハドウカ忘レタイト思フ。（『ニューナショナル第三リードル独案内』 p.170）
- (2) 然リ、私ハ 其ガ 正シク 有ルデ アロウト 考フル、（『ニューナショナル第三リードル独案内』 p.250）
- (3) 而シテ雨ガ三月ニ於テ止ミタコトト考ヘラル、（『パーリー氏万国史直訳』 p.18）

また、文末表現「と思ふ」の用例のうち、次の(4)(5)は「汝が見ヌ」「汝が知ル」のような一時的な思考内容を表明する文であり、これらの文においては

文末表現「と考へる」という論理的な思考を示す表現が適切ではなかったと考えられる。また、この(4)(5)は、幼い子供が登場する会話文である。幼い子供が話したり聞いたりする言葉としては、文末表現「と考へる」という表現が硬質な印象だった可能性がある。

(4) 私ハ 汝ガ見ヌト 想フ、 如何トナレバ 彼ラガ 總テ 海 ノ 底ニ 於テ 生ズル ソウシテ 汝ハ 彼等ヲ 見ル 時ニ 彼等ガ ナス 如ク 然時ニ 見ヘ 爲サヌ 故ニト 伯母ノ Maryガ 言ヒシ。(『ニューナショナル第三リードル独案内』 p.237)

(5) 私ハ 私モ 亦 彼ノ ロニ マデ 小刀ヲ 入レル 或ル者ヲ 見ルベク 好ミ 爲サヌヲ 汝ガ 知ルト 想フ、 George ヨト Harryガ 言ヒシ；(『ニューナショナル第三リードル独案内』 p.247)

「と想像さる」は、『パーリー氏万国史直訳』のみに5例みられた。いずれも「～ことと想像さるる」の形であった。

(6) 「シエム」ノ子孫ハ「イユーフレーツ」ニ近キ國ノ上ニ彼等自ラヲ分ケタト 想像サル、(『パーリー氏萬國史直譯』上 p.21)

(7) 彼女ノ國ハ埃及ノ南ニ亞佛利加ニ於テアリタト 想像サル、(『パーリー氏萬國史直譯』上 p.58)

さて、直訳物において、日本語文の文末思考動詞と英文とはどのように対応しているだろうか。英文の併記されている『ニューナショナル第三リードル独案内』について、文末思考動詞との対応をみたところ、A類を内部にとる文末表現「と思ふ」に対応する英文として“I wish”が1例、C類を内部にとる文末表現「と思ふ」に対応する英文として“I suppose”が1例みられたが、用例も少なく、文末表現「と思ふ」に対応する一定の英文があるとは判断できなかった。

文末表現「と考へる」に対応するの英文をみると、“I think”が3例、“I suppose”が1例であった。“I suppose”が文末表現「と思ふ」「と考へる」いずれにも訳されていることを考えると、やはり、ある英語の表現を必ずある文末思考動詞に対応させるといような、一定の訳があるとは言い難い。

なお、直訳物においては、文末思考動詞に限らず動詞「考へる」の例が多くみられる。例えば、次の例では think に対応する日本語として、動詞「考へる」があたっている。

(8) You can think how great was their fear.

汝ハ 彼ラノ 心配ガ 如何ニ 大キク 有リシ カヲ 考へ 能フ

その他、『ニューナショナル第三リード独案内』で確認できた日本語訳付きの“think” (thought 等、過去形や名詞形を含む) 83 例のうち、「struck-by-a-sudden-thought (俄カニ思ヒ付タ)」(p.89)を除いたすべての例で、日本語訳として「考える」があたっている。『ニューナショナル第三リード独案内』においては、動詞“think”が日本語文において「考える」と直訳されていた可能性がある。

ただし、『ロングマンズ第三読本』をもとにした『ロングマンズ第三読本直訳』と『ロングマンズ第三読本直訳注釈』の二書で、同じ英文がもとになっているとみられる箇所「と考へる」の例をみると、以下の例のように、一方で「であろうと考える」となっている箇所が、もう一方で「であろう」となっており、後者では文末思考動詞が用いられていない。このように、英文の“think”が日本語文の「考える」に対応する傾向はあるものの、必ずしも文末思考動詞としての定訳があったわけではないようである。

(9) 然レトモ彼等ハ彼等ヲ取ルデアロウ以來我ハ亦タ行クデアロウト考ヘル  
(『ロングマンズ第三読本直訳』 p.39)

(10) 乍併彼等ガ彼等ヲ取ルデアロー故ニ私ガ猶又行クデアロー  
(『ロングマンズ第三読本直訳注釈』 p.29)

直訳物においては、文末表現「と思ふ」は用例が少なく、また、動詞“think”が多く用いられているものの、その訳には「思ふ」ではなく「考へる」があたっていることが多い。このことから、直訳物が文末表現「と思ふ」の定着に影響した可能性は低いと考えられる。

むしろ、直訳物でみられた文末表現「と考へる」「と想像さる」等は、近世の洒落本・滑稽本・人情本では確認できないものであり、文末思考動詞の新たなバリエーションとして、初期の重要な用例であるといえそうである。

## 2. 2. 会話書

会話書として調査した資料は下記の通りである。

J.LIGGINS 『FAMILIAR PHRASES IN ENGLISH AND ROMANIZED JAPANESE』 (1860)

ウエンライト 『和英商話』 (1862)

BROWN 『COLLOQUIAL JAPANESE OR CONVERSATIONAL SENTENCES IN ENGLISH AND JAPANESE』 (1863)

- 渡辺氏蔵梓『英蘭會話篇訳語』（1868）  
 島一恵訳『挿譯英吉利會話篇』（1872）  
 アーネスト・サトウ『會話篇』（1873）  
 ブリンクリ『語学独案内』（1875）

會話書には、英語の学習用と日本語の学習用があり、例えば『挿譯英吉利會話篇』や『語学独案内』は英語の学習書であるが、日本語の會話文が多く掲載されたものとして、ここではまとめて扱うこととする。

【表2】 會話書における文末思考動詞

	と思ふ			と存ず			と思はる		
	A類	B類	C類	A類	B類	C類	A類	B類	C類
FAMILIAR PHRASES IN ENGLISH AND ROMANIZED JAPANESE (1860)			1			1			
和英商話(1862)	1								
COLLOQUIAL JAPANESE OR CONVERSATIONAL SENTENCES IN ENGLISH AND JAPANESE(1863)	5	5	7		2	1			
英蘭會話篇訳語(1868)	1	2	11			2			
挿譯英吉利會話篇(1872)	1		7			1			
會話篇(1873)	8	6	2		1	1			
語学独案内(1875)	6	8	6	3	16	12			1
合計	22	21	34	3	19	18			1

※『挿譯英吉利會話篇』は『英蘭會話篇訳語』と同一内容のようであり、巻2までの両者の文末思考動詞の用例は同一のものであるが、巻3以降を閲覧・確認することができなかった。そのため、【表2】では確認できた巻2までの用例数を示している。

會話書において主に使われている文末思考動詞は、「と思ふ」と「と存ず」であり、直訳物にみられた文末表現「と考へる」「と想像さる」はみられなかった。すなわち、直訳物と會話書とで、使われている文末思考動詞の種類が異なっているようである。

さて、會話書においては以下のような文末表現「と思ふ」の例がみられた。

- (11) イエ。シカシ。ワタクシ。マナボウト。ヲモイマス（『和英商話』 p.10）  
 (12) シジウハサヨウデゴザリマシヨウトオモイマス／ツイニハソウデアロウトオモウ（『COLLOQUIAL JAPANESE OR CONVERSATIONAL SENTENCES IN ENGLISH AND JAPANESE』 p.187）

- (13) 私ハ委イ月日ハ思ヒ出セマセヌガナンデモ先月ノ末ダト思ヒマス (『語学独案内 二編』 p.181)

なお、【表2】には掲載していないが、中浜万次郎訳の英語会話集である『英米対話捷徑』(1859)に、以下の例がある。この箇所は、紙面では「きのとく」の後に汚れがあり判読ができず、「きのとくにおもふ」の可能性もある。ただ、「きのとくとおもふ」の例であるとする、本動詞として用いられた「と+思ふ」の例が、古い英語会話書にもみられることになる。

- (14) わたくしはそのあなたがち、さまのやまひであるとき、きのとく おもふ  
I am sorry to hear that your Grandfather is sick. (p.115 6ウ)

次に、文末表現「と存ず」をみると、以下のような例があった。洋学資料における文末表現「と存ず」は、全て「と存じます(る)」の形であり、中世の『虎明本狂言集』や『天草版平家物語』においてみられた、敬語助動詞・補助動詞を伴わない「と存ず」の例はみられなかった。

- (15) Madzu, kana wo yoku oboete, mo zun-zun to yomeru kurai ni nattara, sore kara chitto kanji wo oboe nasaru ga yokaro to zonzimasu. (『会話篇』 p.10)  
(16) ワタクシハ、アノオトコガ、モハヤ、ソコヘ、キマシタト、ゾンジマス (『英蘭會話篇訳語』 p.15)

また、文末表現「と思はる」には以下のような用例がみられた。

- (17) 彼人ガ所持シテ居タノハ此ヨリ些ト短イト思レマス (『語学独案内』 二編 p.139)

次に、会話書で多く用いられていた文末表現「と思ふ」「と存ず」について、対応する箇所の英文をみていくと、様々なバリエーションがみられる(【表3】【表4】)。

文末表現「と思ふ」「と存ず」とも、“I think”があたっている例がやや多いが、その他にも、“I suppose” “I would” “I fancy”、文末の“I believe” “I think”、挿入句の“I think” “I believe”等、様々なものがみられた。文末表現「と思ふ」と「と存ず」とで対応する英文が大きく異なっているわけではなく、両者は特に訳しわけられていないようである。

【表3】 会話書における文末表現「と思ふ」にあたる英文

	FAMILIAR PHRASES IN ENGLISH AND ROMANIZED JAPANESE	和英商話	COLLOQUIAL JAPANESE OR CONVERSATIONAL SENTENCES IN ENGLISH AND JAPANESE	挿譯英吉利 會話篇	會話篇	語学独案内
A類						
I am going			1			2
I think			1		2	1
I think (挿入句)						1
I think of					1	2
I wish					2	
I am thinking of					1	
I intend		1		1	1	
I have reasons for wishing					1	
I must			1			
B類						
I think			2		1	1
I think(文末)						2
I suppose						1
I conclude						1
one think						1
I judge						1
I fancy						1
I don't think					1	
I am afraid			1		1	
It seems to me					1	
In my opinion,					1	
(該当する英語表現なし)					1	
C類						
I think	1		2	1	2	3
I fancy						1
To think						1
I look on						1
I do not think			1			
I do not see			1			
I would			1			
I believe				2		
I think(文末)				1		
I believe(文末)				2		
I fear(文末)				1		

※ 『COLLOQUIAL JAPANESE OR CONVERSATIONAL SENTENCES IN ENGLISH AND JAPANESE』については、一つの英文に対し二つの和文がついている例があるため、【表2】と、【表3】【表4】の用例数とは一致しない。

逆に英文の方からみると、これら“I think”等の英語表現に対する日本語が、必ずしも文末思考動詞となっているわけではない。以下、(18)は文末の“I believe”に「そうです」が対応している例、(19)は“I suppose”に「まい」が対応している例、(20)は“I think”に「ようだ」が対応している例である。

(18) Ano toki ni wa kega-nin ga taiso atta so.des'.

A great many people were seriously hurt on that occasion, I believe.

(『会話篇』 p.52)

(19) Bettu ni tenarai-jisho ga nakutcha narimasumai.

I suppose I must have a special teacher for handwriting.

(『会話篇』 p.10)

(20) ソレハオモイノホカタカイヤウダ

I think that is too much.

(『COLLOQUIAL JAPANESE OR CONVERSATIONAL SENTENCES IN ENGLISH AND JAPANESE』 p.253)

【表4】 会話書における文末表現「と存ず」にあたる英文

	FAMILIAR PHRASES IN ENGLISH AND ROMANIZED JAPANESE	和英商話	COLLOQUIAL JAPANESE OR CONVERSATIONAL SENTENCES IN ENGLISH AND JAPANESE	挿譯英吉利會話篇	会話篇	語学独案内
A類						
I think						1
I propose						1
I intended						1
B類						
I think			2		1	4*
I think(文末)						3
I fancy						2
I do not think						2
I am afraid						1
I fancy(文末)						1
but I doubt it.						1
could be (該当する英語表現なし)						1
C類						
I think	1				1*	3
I would			1			
I believe(文末)				1		
I think(文末)						3
I think(挿入句)						2
I fancy						1
I believe(挿入句)						1
(該当する英語表現なし)						2

※表内の用例数の横に \* のあるものについては、“I really think” “I rather think”のように、“I”と“think”の間に副詞が挿入されている例を含んでいる。

このように、英語文の思考動詞と日本語文の思考動詞との対応関係は固定的であるとはいえない。英文の思考動詞の定訳として文末表現「と思ふ」「と存ず」が用いられるようになった可能性が高いのであれば、英文の“I think”に対応する日本語文の多くが文末思考動詞となっていると想像される。しかし実際には、会話書においては一定の表現が対応しているわけではなく、例えば、英文の思考動詞に対応する箇所が日本語文では助動詞になっている例も少なくない。会話書の日本語文においては多くの文末思考動詞がみられ、C類をトの内部にとる推量表現に準ずる例も使用されているものの、このような状況から判断するに、英文の影響で文末思考動詞が用いられているとは考え難い。むしろ会話書は、日本語の自

然な会話を学習するための資料であり、会話書において用いられている日本語は、当時の自然な会話における言葉に近いと考えられるため、この頃には、推量表現に準ずる文末表現「と思ふ」および「と存ず」は、中世に多く用いられていた意志・願望表現をトの内部にとる用法とあわせ、自然な日本語として認められていた可能性が高い。

## 2. 3. 文典

文典として調査した資料は下記の通りである。

アストン 『A SHORT GRAMMAR OF THE JAPANESE SPOKEN LANGUAGE SECOND EDITION』 (1871)

アストン 『A GRAMMAR OF THE JAPANESE LANGUAGE, WITH A SHORT CHRESTOMATHY』 (1872)

馬場辰猪 『An elementary grammar of the Japanese language』 (1873年初版)

チェンバレン 『A Handbook of Colloquial Japanese 2nd edition』 (1889)

【表5】 文典における文末思考動詞

	と思ふ			と存ず			と考へる			と思はる		
	A類	B類	C類	A類	B類	C類	A類	B類	C類	A類	B類	C類
A GRAMMAR OF THE JAPANESE LANGUAGE, WITH A SHORT CHRESTOMATHY (1872)	1		1									
A HANDBOOK OF COLLOQUIAL JAPANESE 2nd edition (1889)		2	2		1			1	2		2	

文典には、アストン 『A SHORT GRAMMAR OF THE JAPANESE SPOKEN LANGUAGE SECOND EDITION』 『A GRAMMAR OF THE JAPANESE LANGUAGE, WITH A SHORT CHRESTOMATHY』 の二書のように、全く文末思考動詞がみられない資料もある。これは、文典には文法事項の解説等が多く、内容的に個人の主張や推測が入りにくいという、資料の性格によるところもある。

チェンバレン 『A Handbook of Colloquial Japanese 2nd edition』 には文末表現「と思ふ」4例、文末表現「と考へる」3例等、比較的用例が多くみられるが、これは、この本のテキスト量が他の資料に比べて多く、さらに「READER」として読み物が多く掲載されており、ある程度まとまった長さのある口語文がみられることが関わっていると考えられる。さらに、他の三資料と比べ出版時期が新しく、この本が出版された1889年頃には言文一致が進んでいることとも関係

があらうか（近代の口語文において、文末思考動詞が多く用いられる傾向があることについては、第5章参照）。

文末思考動詞の種類としては、「と思ふ」「と存ず」「と考へる」「と思はる」がみられる。

- (21) Yukan to omou. (『A GRAMMAR OF THE JAPANESE LANGUAGE, WITH A SHORT CHRESTOMATHY』 p.60)
- (22) Hontō da to omoimasū. (『A HANDBOOK OF COLLOQUIAL JAPANESE 2nd edition』 p.79)
- (23) Sore ga Jinta-miso to iu koto darō to zonjimasū. (『A HANDBOOK OF COLLOQUIAL JAPANESE 2nd edition』 p.434)
- (24) (略), Yasokyō hodo no kōnō wa nakarō to kangaemasū. (『A HANDBOOK OF COLLOQUIAL JAPANESE 2nd edition』 p.442)
- (25) (略); sō shite kokumin no kifū ya shisō no ōi naru genso ni natte iru mono to kangaeru. (『A HANDBOOK OF COLLOQUIAL JAPANESE 2nd edition』 p.444)
- (26) Are ga yokarō to omowaremasū. (『A HANDBOOK OF COLLOQUIAL JAPANESE 2nd edition』 p.127)

【表6】 文典における文末思考動詞にあたる英文

		A GRAMMAR OF THE JAPANESE LANGUAGE, WITH A SHORT CHRESTOMATHY	A HANDBOOK OF COLLOQUIAL JAPANESE 2nd edition
と思ふ	A類	I am thinking of	1
	B類	I think	1
		surely	1
C類	I think	1	
と存ず	B類	I consider	1
		I take	1
と考へる	B類	I venture to think	1
	C類	(該当する英語表現なし)	2
と思はる	B類	I think	1
		I am inclined to think	1

これらの文末思考動詞と対応する英文についても、直訳物・会話書と同様、一定の英文に日本語の文末思考動詞があたっているわけではない。例えば、日本語文における文末表現「と思ふ」に対応する英文としては、A類の意志・願望をトの内部にとるものでは“I am thinking of”、B類の推量・疑問をトの内部にとるものでは“I think” “surely”等がある。他の文末思考動詞についても、「と思はる」に“I think”があたっている例が1例あることから、文末思考動詞と“I think”が結

びつきやすいようにみえるものの、特定の英文と文末思考動詞が対応しているとは言い難い。

また、英文の“I think”に対応する日本語文をみていくと、下記の例では、助動詞「う」がもちいられていた。

(27) Kare kore tarimashō.

I think it will be about enough.

(『A GRAMMAR OF THE JAPANESE LANGUAGE,  
WITH A SHORT CHRESTOMATHY』 p.298)

(28) Yoshita hō ga yokarō.

I think it will be best to give up the idea.

(『A GRAMMAR OF THE JAPANESE LANGUAGE,  
WITH A SHORT CHRESTOMATHY』 p.309)

英文の“I think”にひかれて日本語文が文末表現「と思ふ」等の文末思考動詞になってもよさそうな箇所においても、思考動詞ではなく「う」のような助動詞が選択されていることもあり、英文“I think”類と日本語文の文末思考動詞との結びつきは強いとはいえない。

## 2. 4. 和英語林集成

『和英語林集成』をみると、「OMOI、-ō、-ōta、オモフ、思、t.v.」の項目では初版（1867）・再版（1872）・三版（1886）のすべてに、一人称主語が英文に明示されていないものの、“Yoi to omō, think well of it.”の用例がみられる。文末表現「と思ふ」という表現自体は辞書に例文が掲載されるレベルで定着していたと考えられる。

ただし、英和の部の方で“think”の項目を確認してみると、再版・三版の例文で、推量的な意味を持つ“I think”が文末表現「と思ふ」ではなく「ましょう」「であろう」と訳されている。以下の例は、いずれも再版の「THINK」の項目の例文である。

(29) I think it will rain to-morrow, miyō-nichi ame furi-mashō.

(30) I think he is a bad man, warui hito de arō.

また、「SUPPOSE」の項目では、“suppose”の訳として“Omō; darō; de arō; ”のように、「おもう」と「だろう」「であろう」が当てられている。ここから、思考動詞に推量表現のニュアンスがあると認識されていることがうかがえるもの

の、用例として「と思ふ」等の文末思考動詞はあげられていない。『和英語林集成』においても、必ずしも“I think”等英語の思考動詞に対応する訳として文末思考動詞が用いられているわけではないようである。

### 3. おわりに

本章では、洋学資料における文末思考動詞について検討した。もっとも英文との結びつきが強いと考えられる直訳物において文末表現「と思ふ」の用例が少なかつたこと、比較的自然の会話に近い表現が用いられていると考えられる会話書において文末表現「と思ふ」「と存ず」が多くみられたこと、さらに、いずれの資料においても、日本語文における文末思考動詞と英文における“I think”等の思考動詞を用いた表現との結びつきは強いとはいえなかつたことを考え合わせると、欧文脈によらず、既に当時、話し言葉として「と思ふ」「と存ず」等の文末思考動詞が定着していた可能性が高い。

このように、推量表現に準ずる文末表現「と思ふ」の定着に関して、欧文脈の影響ははっきりとは認めがたく、文末表現「と思ふ」による推量表現の定着は、外国語の影響ではなく、第4章等でみたように、日本語内部の変化がもたらしたものであると考えるのが妥当であろう。

ただし、文末表現「と考へる」「と想像さる」等は、直訳物の中に多くみられるが、調査の範囲では近世以前の日本語資料にはみられない。このことから、これらの思考動詞による文末表現は洋学資料による影響で定着した可能性がある。洋学資料は、文末表現「と思ふ」等の思考動詞による文末表現の型の定着ではなく、「と考へる」「と想像さる」等、文末思考動詞のバリエーションを増やすことに貢献したと考えられる。

#### 【資料】

※以下、出典として示した URL は、国立国会図書館近代デジタルライブラリーにおける本文画像のページをあらわしている。

#### ■直訳物

『パーリー氏万国史直訳』栗野忠雄訳（1885）

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/768497>

『ニューナショナル第三リードル独案内』飯塚栄太郎訳（1887）

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/870988>

『ロングマンズ第三読本直訳』西山義行訳（1887）

<http://kindai.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/87109>

『スウキンソン氏 英文典直譯』(1887)

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/87028>

『ピネヲ氏英文典直訳』斎藤八郎訳(1887)

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/870291>

『ロングマンス第三読本直訳註釈』大島国千代訳(1895)

<http://kindai.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/871117>

## ■ 会話書

『英米対話捷徑』中浜万次郎(1859) 杉本つとむ編 1985『日本英語文化史資料』八坂書房

“FAMILIAR PHRASES IN ENGLISH AND ROMANIZED JAPANESE”

J.LIGGINS (1860) 杉本つとむ編 1985『日本英語文化史資料』八坂書房

『和英商話』ウエンライト(1862) 日新堂 (早稲田大学古典籍データベースにて本文画像を確認した)

“COLLOQUIAL JAPANESE OR CONVERSATIONAL SENTENCES IN ENGLISH AND JAPANESE” BROWN (1863) 李長波編 2010『近代日本語教科書選集』1 クロスカルチャー出版

『英蘭會話篇訳語』渡部氏蔵梓(1868)

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/995067>

『挿譯英吉利會話篇』島一恵(桂潭)訳(1872)

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/871542>

“Kuaiwa hen, twenty-five exercises in the Yedo colloquial, for the use of students” Ernest Satow (1873) Stefan Kaiser 編 1995 “The western rediscovery of the Japanese language v.5” Curzon Press.

『語学独案内』ブリンクリ(1875) ブリンクリ「語学独案内」復刻版刊行委員会 1977『語学独案内』桐原書店

## ■ 文典

“A SHORT GRAMMAR OF THE JAPANESE SPOKEN LANGUAGE SECOND EDITION” W.G.ASTON (1871) 李長波編 2010『近代日本語教科書選集 第9巻』クロスカルチャー出版

“A GRAMMAR OF THE JAPANESE LANGUAGE, WITH A SHORT CHRESTOMATHY” W.G.ASTON (1872) 李長波編 2010『近代日本語教科書選集 第9巻』クロスカルチャー出版

“An elementary grammar of the Japanese language” 馬場辰猪(1873年初版) 李長波編 2010『近代日本語教科書選集 第1巻』クロスカルチャー出版

“A HANDBOOK OF COLLOQUIAL JAPANESE 2nd edition” チェンバレン (1889) Stefan Kaiser 編 1995 “The western rediscovery of the Japanese language v.8” Curzon Press

■辞書

飛田良文・李漢燮 (2000) 『ヘボン著 和英語林集成 初版・再版・三版対照総索引』 港の人

飛田良文・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺編 (2007) 『日本語学研究事典』 明治書院

## 第7章 国定国語教科書における文末思考動詞

### 1. はじめに

これまで述べてきたように、文末表現「と思ふ」による一種の推量表現は明治20年代頃に定着したが、その後、現代にいたるまで、文末表現「と思ふ」はどのように使用されてきたのであろうか。その一端を明らかにするため、本章では、国定国語教科書における文末思考動詞の使用状況を確認する。

国定国語教科書は明治時代後期の第一期から、第二次世界大戦後の第六期にいたるまで、約45年間使用された教科書であり、近代から現代への日本語の流れを、いわば定点観測のような形で追うことのできる資料の一つである。

国定国語教科書の概要は下記の通りである。

- 第一期 明治37年より使用『尋常小学読本』一～八（通称：イエスシ読本）
- 第二期 明治43年より使用『尋常小学読本』巻一～十二（通称：ハタタコ読本）
- 第三期 大正7年より使用『尋常小学国語読本』巻一～十二（通称：ハナハト読本）
- 第四期 昭和8年より使用『小学国語読本』巻一～十二（通称：サクラ読本）
- 第五期 昭和16年より使用『ヨミカタ』一～二 『よみかた』三～四  
『初等科国語』一～八（通称：アサヒ読本）
- 第六期 昭和22年より使用『こくご』一～四 『国語』第三学年（上下）  
第四～六学年（各上中下）（通称：みんないいこ読本）  
（『国定読本用語総覧』による）

各期の教科書にはそれぞれ特色があり、そこで用いられている言語表現についてもその時代と関わっているとされている。高梨（1993a）は、全六期の国定読本の改訂時期と、戦争等の社会変動の年代とを照らし合わせた上で、次のように述べている。

国定読本が日本の近代化とそれにともなう対外関係や国内社会の変化を契機として改訂されていることは、あきらかであろう。全六期にわたる国定読本には、それぞれの読本が編纂された時代の社会情勢や時代思潮が色こくうつしだされている。それは、もっとも直接には、課を単位として提出される教材のなかにあらわれているが、さらに、各課の用語を中心とする言語表現にも時代とのかかわりを見ることができる。（p.43）

本章では、国定国語教科書という一定の枠組みの中での、思考動詞による文末

表現の使用状況を確認したい。それによって、近代学校教育の中で、どの学年においてどのような思考動詞による文末表現を習得することが想定されていたか、文末思考動詞の出現する文体的特徴はどのようなものであったのか、また、二つ以上の期で共通して掲載されている単元である「共通教材」をみることで、文末思考動詞と代替可能な表現としてはどのようなものがあつたのか等、具体的に検討したい。

第一期から第六期までの国定国語教科書にみられる思考動詞による文末表現としては、「と思ふ」(104例)「と存ず」(20例)「と思はる」(5例)「と考へる」(2例)「と存ぜらる」(1例)「とおぼゆ」(1例)「と考へらる」(1例)、「と信ず」(1例)があり、「と思ふ」と「と存ず」が中心的な表現となっていることがわかる。そこで本章では、文末表現「と思ふ」「と存ず」を中心に、国定国語教科書にみられる思考動詞による文末表現を考察していく。

## 2. 国定国語教科書における文末表現「と思ふ」「と存ず」

### 2. 1. 文末表現「と思ふ」「と存ず」の期別・トの内部別出現状況

まず、文末表現「と思ふ」「と存ず」の使用状況をみていく。文末表現「と思ふ」「と存ず」の期別・トの内部別用例数と、参考に動詞「思ふ」「存ず」全体の用例数を【表1】に示す。前章までと同様に、トの内部について、意志・願望表現のA類、推量・疑問表現のB類、判断・叙述表現のC類の3つに分類した上で考察する。

なお、国定国語教科書における文末表現「と存ず」は、会話文では「と存じます」、手紙文においては「と存じます」「と存じ候」「と存じ参らせ候」のように、「と存ず」+敬語助動詞・敬語補助動詞の形で用いられている。

【表1】国定国語教科書の文末表現「と思ふ」「と存ず」

	と思ふ			動詞「思ふ」 全体	と存ず			動詞「存ず」 全体
	A類	B類	C類		A類	B類	C類	
第一期	1		1	48	1			3
第二期	2	3		89		1	6	19
第三期	1	5	2	150	1		2	17
第四期	7		8	288	1	3	2	14
第五期	15		6	330	1	1		8
第六期	27	5	21	319	1			5

※1 動詞「存ず」全体の用例数には「知る」の意味の例も含む。

※2 第三・五・六期「と思ふ」のC類の用例数には主語が明示された例を1例ずつ含む。

※3 第四期「と思ふ」のC類の用例数には主語が明示されている例を2例含む。

※4 第一期については、【表1】の用例数と別に、高等小学読本に「と存ず」のB類の例が2例みられる。

## 2. 1. 1. 文末表現「と思ふ」について

全体的な傾向としては、文末表現「と思ふ」の用例数が、期を経るごとに増加傾向をみせていることが指摘できる。特に、A類・C類をトの内部にとる文末表現「と思ふ」は、第六期に最も多く用いられている。ただし、文章量の少ない第一期で用例が少なくなっており、用例の多寡については、期ごとに文章量が異なるという点についても考慮に入れる必要がある。

既にみてきたように、文末表現「と思ふ」が判断・叙述表現等のC類をトの内部にとる用法は、明治20年代には定着している。第一期の教科書が明治37年から使用されていることを考えると、国定国語教科書には初期からC類をトの内部にとる文末表現「と思ふ」の用例がある程度みられることが予想されたが、実際には第一期では1例、第二期では0例、第三期でも2例と、文末表現「と思ふ」の用例が少ない。この要因としては、初期の国定国語教科書に、文末表現「と思ふ」の使われにくい文語文（文末表現「と思ふ」の口語性については、第5章を参照）による教材が多く掲載されていることが考えられる。また、第四期頃までは文末表現「と存ず」が比較的多く使用されていることや、教材の内容として、自らの考えを表明する場面が多くないこと等が、「と思ふ」の用例が少ないことと関係していると考えられる。

## 2. 1. 2. 文末表現「と存ず」について

文末表現「と存ず」についても文末表現「と思ふ」と同様に、期ごとに文章量が異なることも考慮にいれつつ、その使用状況を概観したい。

文末表現「と存ず」は、第二期頃までは文末表現「と思ふ」との間に用例数の大きな開きはみられない。しかし、その後使用の増えた文末表現「と思ふ」とは異なり、文末表現「と存ず」はやや減少傾向で、第五期には2例、第六期には1例のみとなっている。それ以前の第二期から第四期までは、ある程度の数の用例がみられていたことを考えると、文末表現「と存ず」の使用が現代に至る過程で減少しているように見える。

なお、第一期については、文末表現「と存ず」の用例が少ない。前述の通り、第一期の教科書は文章量自体が少なく、特に、他の期と異なり小学校が四年制であったことから、高学年向け文章が少ない。次節で述べるが、文末表現「と存ず」は低学年の教材においてはあらわれにくく、このことが第一期において文末表現「と存ず」の用例が少ないことに影響していると思われる。

このような状況を考慮し、【表1】には含めていないが、第一期における高学年向け教科書にあたる「国定高等小学読本」を調査したところ、B類をトの内部にとる文末表現「と存ず」が2例みられた。

- (1) お二人とも、ひごろおできなさるのでございますから、改めて御勉強なさらないでもよいかとぞんじます、ねんのため、今まで習っていらっしやったことを、よくおさらひなさいましたら、じゅーぶんだらうかとぞんじます。(第一期 高等小學讀本四 十八課 高等女學校に入學するについて問合の手紙とその返事。)
- (2) このよ一すにては、いま一週間も、たち候はば、全快すべしと存候。(第一期 高等小學讀本一 第八課 箱根山。)

なお、第六期にみられる文末表現「と存ず」の例は老人の発言であり、これは、この時期には文末表現「と存ず」が硬さと同時に古い語感をもつ語であるにとらえられていることのあらわれである可能性もある。

- (3)「(略)。はなはだですぎたことかもしれませんが、このかんしゃの氣持を、あらわしたいとぞんじます。みなさん、いかがでしょう。」はくしゅが四方からおこった。(第六期 卷七 四 汽車の中)

## 2. 2. 文末表現「と思ふ」「と存ず」の提出段階

次に、文末表現「と思ふ」「と存ず」の提出段階についてみていく。

文末表現「と存ず」は「と思ふ」のあらたまりの表現であることを考えると、あらたまりのニュアンス等を持たないいわばニュートラルな表現である文末表現「と思ふ」の方が先に提出されていることが予想されるが、実態はどのようになっているだろうか。また、A類・B類・C類というトの内部の情報ごとに、提出される学年が異なることがあるかどうかについても確認したい。

【表2】・【表3】に、文末表現「と思ふ」「と存ず」それぞれがどの期・巻に提出されているか、トの内部の情報別に示した。

全体的な傾向としては、文末表現「と思ふ」の方が文末表現「と存ず」より早い巻で出現していることがわかる。特に、第四期以降は、第一学年の教科書から文末表現「と思ふ」がみられる。第一期においては、文末表現「と思ふ」「と存ず」の初出の例が同じ単元内にみられ、文末表現「と存ず」の方がやや先にあらわれているが、(4)のように手紙の中で文末表現「と存ず」の使われた直後に文末表現「と思ふ」が用いられている例であり、文末表現「と存ず」を「と思ふ」より大幅に早く習得させることが想定されているわけではないようである。

- (4) あしたは、にちよ一びでございますから、お晝から、こ一えんに、まゐりたいとぞんじます。(略)、このごろは、つつじが盛ださうでございま

すから、それを見たいと思ふのでございます。(第一期 巻七 第八 公園。)

【表2】文末表現「と思ふ」が提出された期・巻

	第一学年		第二学年		第三学年		第四学年		第五学年			第六学年			
	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七	巻八		巻九	巻十		巻十一	巻十二	
第一期	A類						1								
	B類														
	C類							1							
第二期	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七	巻八		巻九	巻十		巻十一	巻十二	
	A類		1								1				
	B類					2		1							
第三期	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七	巻八		巻九	巻十		巻十一	巻十二	
	A類				1										
	B類					2	2			1					
第四期	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七	巻八		巻九	巻十		巻十一	巻十二	
	A類		3	1	1									2	
	B類														
第五期	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七	巻八		巻九	巻十		巻十一	巻十二	
	A類		4	1	1		2	1		1	4			1	
	B類														
第六期	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七	巻八	巻九	巻十	巻十一	巻十二	巻十三	巻十四	巻十五
	A類			1	4	3		1		1	14	1	1		1
	B類									1	1				3
	C類	1	3		2	2		1		2		4		1	5

【表3】文末表現「と存ず」が提出された期・巻

	第一学年		第二学年		第三学年		第四学年		第五学年			第六学年			
	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七	巻八		巻九	巻十		巻十一	巻十二	
第一期	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七	巻八							
	A類						1								
	B類														
第二期	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七	巻八		巻九	巻十		巻十一	巻十二	
	A類										1				
	B類						1	1		1	1		2		
第三期	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七	巻八		巻九	巻十		巻十一	巻十二	
	A類							1							
	B類														
第四期	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七	巻八		巻九	巻十		巻十一	巻十二	
	A類					1									
	B類						1			1				1	
第五期	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七	巻八		巻九	巻十		巻十一	巻十二	
	A類													1	
	B類													1	
第六期	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七	巻八	巻九	巻十	巻十一	巻十二	巻十三	巻十四	巻十五
	A類						1								
	B類														
	C類														

※斜線部分は該当の巻がないことを表す。

他方、文末表現「と存ず」の用例は、低学年ではあらわれにくい。いずれの期においても、初めて提出されるのは中学年から高学年の教科書であり、文末表現「と存ず」は、中学年以降に習得されることが想定されていたようである。

トの内部別にみると、文末表現「と思ふ」は、基本的にはA類をトの内部にとる形がB類・C類より先に出現しているか、同時期に提出されている。

ただし、第六期はこれと逆で、A類をトの内部にとる文末表現「と思ふ」は巻三で提出されるが、それより前に、C類をトの内部にとる文末表現「と思ふ」が巻一と巻二で既に提出されている。以下に、第六期におけるC類の例をあげる。いずれも同じ単元内にあらわれるものである。

- (5) ここが 一ばん おもしろかったとおもいます。(第六期 巻一 十 ゆうぎ)
- (6)「人の など、そうで ない ものとに、わけたら いいとおもいます。」と いました。(第六期 巻二 一 「あ」の つく ことば)
- (7)「くさの など、とりの など、その ほかの ものとに、わけたら いいとおもいます。」と いました。(第六期 巻二 一 「あ」の つく ことば)
- (8)「目に みえる ものと、みえない ものとに、わけたら いいとおもいます。」と いました。(第六期 巻二 一 「あ」の つく ことば)

C類をトの内部にとる文末表現「と思ふ」は、公の場で自らの意見を表明する際に使用されることが多く、上記の例も、感想を述べたり、話し合いにおいて発言をしたりする場面のものである。第六期国定国語教科書においては、話し合いで意見を述べる場面が多くみられるが、このことが、第六期においてC類をトの内部にとる文末表現「と思ふ」が出現しやすいことと関連があると考えられる。

文末表現「と存ず」については、A類の用例がない第二期を除くと、B・C類と同時期かそれより先にA類の表現が提出されているようである。ただし、第一期・第六期にはそもそもB類・C類をトの内部にとる文末表現「と存ず」の用例がなく、はっきりとした傾向は見出だし難い。

とはいえ、文末表現「と思ふ」「と存ず」とも、基本的にはA類をトの内部にとる形がB類・C類をトの内部にとる形より先に出現しているか、ほぼ同時期に提出される傾向があるといっていよう。

## 2. 3. 文末表現「と思ふ」「と存ず」が出現しやすい文体と場面

次に、文末表現「と思ふ」「と存ず」の使用状況について、文体の面からみていく。

【表4】で文末表現「と思ふ」、【表5】で文末表現「と存ず」が出現した文体を示した。文体の整理にあたっては、『国定読本用語総覧』の凡例に従い、用例を手紙文、会話文、候文、文語文、その他（『国定読本用語総覧』で注記のない口語文・散文・地の文）のようにわけた。ただし、候文でもあり手紙文でもあるような場合は、どちらの数にも含めているので、【表1】から【表3】における用例数の合計とは異なる。

文末表現「と思ふ」「と存ず」とも、手紙文・会話文の用例が多い。

文末表現「と思ふ」が候文において使用されている例はみられなかったが、文末表現「と存ず」は、第二期と第三期に、候文の手紙において使用されている例がみられる。

- (9) 極南暑熱の御地にてても同じことと存候。(第二期 卷十一 第二十四課 樺太より臺灣へ)

【表4】 文末表現「と思ふ」の文体別出現数

		文語文	手紙文	候文	会話文	その他
第一期	A類		1			
	B類					
	C類				1	
第二期	A類	1			2	
	B類				1	2
	C類					
第三期	A類		1			
	B類		1		4	
	C類				1	1
第四期	A類				7	
	B類					
	C類		2		5	1
第五期	A類		3		12	
	B類					
	C類		1		4	2
第六期	A類		5		5	15
	B類		1		1	3
	C類		4		15	

【表5】文末表現「と存ず」の文体別出現数

		文語文	手紙文	候文	会話文	その他
第一期	A類		1			
	B類					
	C類					
第二期	A類					
	B類		1	1		
	C類		6	4		
第三期	A類		1			
	B類					
	C類		2	2		
第四期	A類				1	
	B類				3	
	C類		1	1	2	
第五期	A類	1			1	
	B類		1			
	C類			1		
第六期	A類				1	
	B類					
	C類					

しかし、手紙文においても、文末表現「と存ず」の使用は第二期をピークに、期を経るごとに減っていき、次第に文末表現「と思ふ」が使われるようになっていく。

手紙文における文末表現「と思ふ」「と存ず」について具体的にみると、第一期では同じ手紙の中に文末表現「と思ふ」「と存ず」がそれぞれ1例ずつみられ、また、高等小學読本において文末表現「と存ず」が2例みられる。第二期においては、手紙文では文末表現「と思ふ」の使用がなく、文末表現「と存ず」が7例みられる。第三期には、中学年の教科書までは文末表現「と思ふ」が、高学年の教科書では文末表現「と存ず」が用いられている。

第四期・第五期では両期で共通して掲載されている「静寛院宮」の単元で、宮が朝敵の汚名をすすぐために天朝へ書いた手紙の中で、「と存じ参らせ候」（第四期）「と存じまゐらせ候」（第五期）と記している例がある。特別な立場にある人物が、「と存じ参らせ候」という特に丁寧な言葉を使用している様が描かれていると考えられる。

- (10) 心中御憐察あらせられ、願の通り家名の處、御憐愍あらせられ候はば、私は申すまでもなく一門家僕の者共、深く朝恩を仰ぎ候事と存じ参らせ候。（第四期 卷十二 第二十六 静寛院宮）

しかし、この2例以外では、「静寛院宮」が掲載されているのと同じ学年の教科

書においても手紙文で文末表現「と思ふ」が使われている。第六期にも手紙文がみられるが、ここでも文末表現「と存ず」は使われておらず、「と思ふ」が使用されている。

手紙文以外では、会話文の中でも特に、話し合い等、人前で意見を述べる場面で文末表現「と思ふ」が使われる例が多い。文末表現「と存ず」についても、人前で意見を述べる場面で用いられている例があり（前出の（3）の例）、思考動詞による文末表現が、意見を述べる場面で用いられやすいことがうかがえる。

- (11) 金ニヒロヘアリマスガ、中デ一番人ノ役ニ立ツノハ、私ドモノ仲間ノ銅デアラウト思ヒマス。(第三期 卷六 第三 ヤクワントテツピン)
- (12) 「(略)。それで、よきように、『このかぼちゃはだれのものか。』という話しあいをやってみたら、おもしろいだろうと思います。」こういいたしたのは、根のしるしをつけた老人でした。(第六期 卷十四 六 とりいれまつりの夜)

第六期においては文末表現「と思ふ」が「その他」、すなわち地の文に出てくる例が他の期と比べて多い。これは、次の例のような、読手に対して語りかけるような説明文や、自分の考えを述べるような文が地の文に多くみられることが関係していると思われる。

- (13) みなさんも、大きくなったら、自分たちの國が持っているこのよい藝術を味わうことを、喜ぶだろうと思います。(第六期 卷十 七 ぶす能ときょうげんについて)
- (14) もちろん、これは、まわりの空気の温度によってもちがいますが、おおよそのけんとうは、わかるだろうと思います。(第六期 卷十四 七 茶わんの湯)
- (15) 姉だけにわかるへんなことばをいっています。わたしも早くそれを覚えたいと思います。(第六期 卷十二 三 わたしの民ちゃん)

なお、文末表現「と思ふ」が文語文で使われているのは、古典文学作品の1例のみである。

- (16) 戦場に出でん時は髪を染めんと思ふなり。(第二期 卷十 第十五課 齊藤實盛)

これは軍記物語の例であるが、第1章から第3章でみたように、中世軍記物語においてはA類をトの内部にとる文末表現「と思ふ」が非常に多く使われている。

(16) の例の元となっている『平家物語』の該当箇所では、文言は若干異なるものの、文末表現「と思ふ」が用いられており、これが反映されて文末表現「と思ふ」が使われていると考えられる。

(17) 実盛、六十にあまつて軍の場に向かはんには、鬢、鬚を墨に染めて若やがんと思ふなり。(『平家物語』百二十句本 p.197)

第1章および第5章で、近代以降、推量表現に準ずる文末表現「と思ふ」は口語文において出現するようになるが、文語文においては出現しにくいことを述べた。国定国語教科書においても同様に、推量表現に準ずる文末表現「と思ふ」は文語文には出現しにくいようである。

このように、文末表現「と思ふ」「と存ず」とも、手紙文・会話文の用例が多く、特に文末表現「と存ず」については全て手紙文か会話文中の用例であった。手紙文における文末表現「と存ず」の使用は第二期をピークに、期を経るごとに減少していき、手紙文においても文末表現「と思ふ」が使用されるようになっていった。文末表現「と思ふ」については、手紙文以外では、話し合い等、人前で意見を述べる場面で使われる例が多い。また、国定国語教科書においても他の資料と同様、文語文においては推量表現に準ずる文末表現「と思ふ」は出現しにくいことがわかった。

## 2. 4. 文末表現「と思ふ」「と存ず」の話手と聞手

ここでは、文末表現「と思ふ」と「と存ず」の使用状況を、話手と聞手の面からみていく。文末表現「と存ず」の使用に関しては、話手と聞手の立場の上下関係や、場のあらたまり等の要因が関係していると考えられるため、これらの点に留意しながら検討する。

文末表現「と思ふ」「と存ず」の話手と聞手（手紙の場合は書手と読手）の立場の上下関係を【表6】に示す。立場の上下関係については、主従関係や、親族内での関係に基づき判断した。ただし、地の文や、引用文中の用例は数に含めていない。表内の「話手 $\geq$ 聞手」は、話手が聞手と同等以上の立場であることを示し、「話手 $<$ 聞手」は、話手より聞手の立場が上であることを示す。また、「その他」は、次の例のように、初対面同士や聞手が複数いる場合、敵同士等で上下関係が明確に特定できないものである。

(18) 小ぶくろの方は私どものだんなが國へおやりになる金ですが、だんなはなさけ深い方ですから、此の金をあなたにさし上げましても、おしかりになることはあるまいと思ひます。(第三期 卷七 第十七 安倍川の義

- 夫 話手：見すばらしいなりをした一人の男 聞手：人夫)  
 (19) をじさんを圍んで、いろいろお話をお聞きしようと思ひます。(第五期  
 卷九 十八 飛行機の整備 話手：勇 聞手：子ども常會の人々等、複  
 数)

【表6】文末表現「と思ふ」「と存ず」の話手と聞手の上下関係

	と思ふ			と存ず		
	話手 $\geq$ 聞手	話手 $<$ 聞手	その他	話手 $>$ 聞手	話手 $\leq$ 聞手	その他
第一期	2	0	0	1 <sup>注</sup>	0	0
第二期	2	0	0	6	1	0
第三期	5	0	2	1	1	1
第四期	2	1	12	0	3	3
第五期	5	2	12	0	1	1
第六期	0	5	40	0	0	1

注 この他、「高等小学読本」に2例みられる。

#### 2. 4. 1. 文末表現「と思ふ」の話手と聞手

話手が聞手と同等以上の立場にある場合に文末表現「と思ふ」が用いられているのは、現代語と同様である。さらに、第四期以降、文末表現「と思ふ」が目上の聞手に対して使われている例がみられるようになっている点が注目される。軍記物語を中心とする中世語資料においては、目上の聞手に対する文末表現「と思ふ」の用例が少なく(第2章・第3章)、第三期までの用例のあらわれ方はこれに一致しているが、第四期以降はこれとは異なる傾向を示していることになる。

仮に「と思ふ」と「と存ず」の関係が中世と同様のものであるとして、他の箇所において文末表現「と存ず」という丁寧な表現が使われているにも関わらず、目上の聞手に対して文末表現「と存ず」ではなく文末表現「と思ふ」が使用されている理由の一つに、国定国語教科書においては、上下関係とはいえ、親子等の親族関係にあたる例が多いことが考えられる。明確な主従関係であればともかく、親族関係の中では文末表現「と存ず」ほどのあらたまりの表現を用いる必要は必ずしもなかったのであろうか。

- (20) ミヤコ へ 行ッテ、エライ 人 ニ ナリタイ ト 思ヒマス。(第四期 卷三 十五 一寸ボフシ 話手：一寸ボフシ 聞手：オヂイサン)  
 (21) 「ぼくには、よくわかりませんが、そのマリアは、たいへん美しくて、いかにもおかあさんらしいと思ひます。」(第六期 卷十三 七 ある)

画像 話手：ぼく 聞手：おじさん)

- (22) よく説明しておもらいになるといいと思います。ちっともむずかしいことはありません。(手紙) (第六期 卷十四 一 おかあさん 書手：わたし 読手：おかあさん)

また、文末表現「と存ず」の持つあらたまりの語感や文体的な硬さにより、子どもの使用する表現としては文末表現「と存ず」が用いられにくかったことも考えられる。そのため文末表現「と存ず」を避けて文末表現「と思ふ」が選択されている可能性がある。(20) (21) の例においても、話手にあたる人物が子どもであるために文末表現「と思ふ」が使用されていると考えられる<sup>22</sup>。

しかし、現代においては、子どもに限らず大人であっても、目上の聞手に対して「と思います」の形で文末表現「と思う」を使用することが多い。これに関しては、現代に至る過程で、文体的な硬さを持つために日常の気軽な会話においては使いにくい文末表現「と存ずる」ではなく、「と思います」が選択されていくようになったことが考えられる。話手より聞手の方が高い立場にある場合にも文末表現「と思ふ」を使用する例がみられるのは第四期以降であるが、この時期の国定国語教科書には文末表現「と存ず」の使用自体が少なくなっていることとあわせて考えると、文末表現「と存ず」にかわる目上の聞手への表現として「と思います」を使用することが多くなったのは、この時期の前後である可能性がある。

## 2. 4. 2. 文末表現「と存ず」の話手と聞手

文末表現「と存ず」は文末表現「と思ふ」の謙譲表現であるので、次の例のように話手より聞手の身分が上位の関係にある場合に使用されやすい。

- (23) つきましては、新しく家を建てて、心ばかりのおもてなしをいたしたいと存じます。(第四期 卷六 一 神武天皇 話手：兄うかし 聞手：天皇)
- (24) 併し老病の事故、よほど大事にしなければならぬと存じます。(第二期 卷八 第十九 手紙 書手：浅吉(小ぞう) 読手：井上勉藏(主人))

しかし、特に手紙文の場合は、書手が読手と同等以上の身分であっても、「と存ず」を使用している例が少なくない。手紙文においては、「と存じます」「と存じ候」等の形式が、丁寧さをあらわす定型的な表現として用いられていたのである

<sup>22</sup> (22) の例については、書手が就職した際に、老いた母へ書いた手紙であるので、年齢的な意味での「子ども」の表現ではない。

う。

- (25) さて御父上様の御葉書ならびに御前様の御手紙により、御母上様にはさる二日御安産にて、玉の様なる女の御子御生れの由承り、誠にめでたくうれしき限りと存じ候。(第三期 卷十 第二十 手紙 書手：叔母 読手：さち子)

このように、手紙をやりとりする場面では、書手と読手の上下関係に関わらず、双方が文末表現「と存ず」を使っている例が多い。【表6】をみると、話手が聞手より高い立場の場合に文末表現「と存ず」が使われている例が第二期に6例みられるが、すべて手紙文の用例である。次の(26)(27)の例では、藤村孝藏・中林作之助が互いに「と存候」を使い、手紙をやりとりしている双方がともに丁寧な言葉遣いをしている。

- (26) 同學士は御承知の通り、多年府縣の技師をも務め、學理にも通じ、實地にも明かなる人に候へば、其の講話は定めて有益なる事と存候。(第二期 卷十 第二十五課 講話會の案内文 書手：藤村孝藏 読手：中林作之助)
- (27) 仰の如く本村にも耕地整理の必要これあり、折々會合の節は其の話も出で、何れ熟考の上實行せんと申合せ居り候事とて、此の際其の道の専門家の講話を承るは、大いに参考に相成るべしと存候。(第二期 卷十 第二十五課 講話會の案内文 書手：中林作之助 読手：藤村孝藏)

なお、用例(4)として既にあげたが、第一期に、一つの手紙の中で文末表現「と存ず」と「と思ふ」の両方が使われている例がある。ただし、この例における文末表現「と思ふ」も、「と思ふのでございます」と、敬語形式のついた丁寧な形で用いられている。

- (28) あしたは、にちよ一びでございますから、お晝から、こ一えんに、まゐりたいとぞんじます。(略)、このごろは、つつじが盛ださうでございませうから、それを見たいと思ふのでございます。(第一期 卷七 第八 公園。 手紙の書手：つる 読手：おふみ ※用例(4)と同一例)

このように、国定国語教科書における文末表現「と思ふ」および「と存ず」を、話手と聞手の関係性からみてみると、文末表現「と思ふ」を目上の聞手に対して使用する例や、文末表現「と存ず」を話手が聞手と同等以上の関係にある時に使用する例が少なくない。国定国語教科書においては、文末表現「と思ふ」と「と

存ず」の使用は、話手と聞手の上下関係によって厳密に選択されているというより、学年や話者の年齢、手紙文等の文体によって判断されることが多いことがわかる。すなわち、目上の聞手（読手）に対する待遇表現であった「と存ず」が、硬いあらたまり語としての性格を強めているといえる。

### 3. その他の文末思考動詞について

ここで、文末表現「と思ふ」「と存ず」以外にみられた文末思考動詞の例についても簡単にふれておきたい。

文末表現「と思はる」は第三期に1例、第四期に3例、第五期に1例の計5例みられ、いずれもトの内部に推量表現をとるものである。

- (29) 目は小さくて、あれでも、下に落ちて居る物が、よく見えるのだらうかと思はれます。(第三期 卷五 十六 日本三景 地の文)
- (30) しかも、空気も水もないとすると、地球上のやうに、太陽から来る光や熱を調節するものがないから、月の世界では、晝はこげつくやうな暑さ、夜はその反対に、ひどい寒さであらうと思はれます。(第五期 卷十 六月の世界 にいさんの説明 話手：にいさん 聞手：僕)

文末表現「と考へる」は第六期の単元「あなたの思っていることは」に2例みられる。いずれもトの内部に願望表現をとるものである。

- (31) そうして、うちじゅうの人たちに、めいわくをかけないようにしたいと考えます。(第六期 卷十 四 あなたの思っていることは)
- (32) いつも、全体の中の部分、部分があつての全体、というつながりをわすれないで、あいての人をうやまうとともに、自分のつとめをはたすだけの勇気を、もちたいと考えます。(第六期 卷十 四 あなたの思っていることは)

文末表現「と考へる」は、動詞「考える」の語義から、文末表現「と思ふ」と異なり、論理的思考による考えであることを示す表現であるため、基本的には「アイスを食べたいと考える。」「今から昼寝をしようと考える。」のような思いつきや、個人的な願望・意志を表示する際には用いにくい。ただし、上記(31)(32)の例は、「ぼく」を含めた数人が、自らの考えていることを発表し合っている場面での用例であり、公の場面における自らの考えの発表という状況が「と考える」というやや硬質な表現の使用を可能にしているのであろう。なお、「願望表現＋と考える」の例については、帝国議会会議録にも多くみられるもので、この点につい

ては第8章であらためて検討する。

文末表現「と存ぜらる」は第三期に1例みられた。候文の手紙文の例である。

- (33) 平生甚だ御達者にて、近來は殊に御元氣のやうに承り居り候事とて、此の度の御報は全く夢かと存ぜられ候。(第三期 卷十 第二十 手紙)

文末表現「とおぼゆ」は第五期に1例みられた。古典を題材にした文語文の教材の例である。

- (34) 「敵、前後をさへぎつて、御方は陣をへだてたり。今は、のがれぬところとおぼゆるぞ。いざや、まづ前なる敵を一散らし追ひまくつて、後なる敵と戦はん。」(第五期 卷十二 十二 菊水の流れ 湊川の戦 話手：正成 聞手：正季)

なお、題材となった『太平記』の対応する箇所においても、「とおぼゆ」が使われており、これが反映されているとみられる。

- (35) 「敵前後をさへきりて寄は陣を隔たり、今は遁ぬ所と覚るそ、誘や真先なる敵を追捲て、後なる敵にたゝかはむ」(『太平記』(神宮徴古館本) p.486)

文末表現「と考へられる」は第四期に1例みられた。説明文における用例である。

- (36) 我が國へは、アジヤ大陸から青銅器を作ることが傳へられ、従つて青銅の劔や、ほこや、矢じりや、又銅鐸といつて釣鐘のやうな形をした器物が発見されるのであるが、我が國の青銅器時代は極めて短く、やがて次の鐵器時代にはいつたものと考へられる。(第四期 卷十二 第三 古代の遺物)

文末表現「と信ず」は第六期に1例みられた。これは著名人の言葉を集めた単元「その人のことば」の中に出てくる、アインシュタインによる言葉であり、原文は日本語ではないと思われる。文語で書かれた論説の中にも「と信ず」の例がみられたが(第5章参照)、文末表現「と信ず」の用例は、国定国語教科書を通してこの1例のみであり、文末表現「と信ず」は、当時の日常語、少なくとも小学

校において学ぶべき表現として一般的なものであったわけではないと考える<sup>23</sup>。

(37) 私には、あなたがた日本の小学校のみなさんに、このあいさつを送るだけの特別の権利があると信じます。といいますのは、私は、あの美しいあなたがたのお國を親しくおたずねして、町や、家や森や、山をながめたり、また、そうした風景から、自分の國を愛するということを学んでいる日本の子どもさんたちにも、お目にかかったことがあるからです。  
(第六期 卷十五 五 その人のことば)

このように、国定国語教科書には、文末表現「と思ふ」「と存ず」以外にも、用例数は少ないものの、文体や場面等に応じ、様々な文末思考動詞が用いられていることがわかる。

#### 4. 文末思考動詞の類似表現について

最後に、二つ以上の期で共通して掲載されている単元である、共通教材における文末表現「と思ふ」「と存ず」について確認する。共通教材における文末思考動詞について、別の期の対応する箇所でのどのような表現が用いられているかを調査することで、「と思ふ」を中心とした文末思考動詞に類似した意味・機能をもつ表現としてどのようなものがありうるかを探る試みとしたい。

なお、国定国語教科書における共通教材の数の目安としては、高梨(1997)によって「(略)、ことなりにして、約一六〇課の共通教材が得られる。それらを何期にわたって共通教材として用いられているかという点から分類すると、二期間の共通教材がもっとも多く約一一〇課、つぎに三期間の共通教材が約三〇課である。」(pp.222-223)と示されている。

さて、共通教材をみていくと、複数の期にわたって、文末表現「と思ふ」あるいは「と存ず」が使用されている教材がある。例えば、次の「羽衣」においては、第四期から第六期の3つの教科書において、同一内容と思われる箇所でトの内部に意志表現をとる文末表現「と思ふ」が使われている。

(38) 持って かへって、うちのたから物にしよう と思ひます。  
(第四期 卷四 二十一 羽衣)

(39) 持ってかへって、うちのたからにしよう と思ひます。(第五期 卷四 二十五 羽衣)

<sup>23</sup> ただし、第8章で述べるとおり、帝国議会会議録には「と信ず」の例がみられ、硬質な口語においては使用されているようである。

- (40) もって かって、うちの たからに しようと 思います。(第六期 卷四 十三 はごろも)

その一方、ある期で文末表現「と思ふ」が使用されているが、別の期では文末思考動詞以外の表現となっている教材もある。

次の「ヤクワントテツビン」をみると、第二期の教科書では「デセウ」となっている箇所が2箇所(用例(41)、(43))あるが、この箇所に対応する部分が第三期の教科書ではいずれも「デアラウト思ヒマス」(用例(42)、(44))となっている。

- (41) 「金ニヒロ<sup>レ</sup>アリマスガ、ナカデー番人ノ役ニ立ツノハ、私ドモの仲間ノ銅<sup>デセウ</sup>。(略)」(第二期 卷六 第八 ヤクワントテツビン)
- (42) 金ニヒロ<sup>レ</sup>アリマスガ、中デー番人ノ役ニ立ツノハ、私ドモノ仲間ノ銅<sup>デアラウト思ヒマス</sup>。(第三期 卷六 第三 ヤクワントテツビン)
- (43) 「ナルホド銅ハタクサンアツテ、役ニモ立チマセウガ、ソレヨリモツトタクサンアツテ、モツト役ニ立ツモノハ鐵<sup>デセウ</sup>。(略)」(第二期 卷六 第八 ヤクワントテツビン)
- (44) 「ナルホド、銅ハタクサンアツテ、役ニモ立チマセウガ、モツトタクサンアツテ、モツト役ニ立ツ物ハ鐵<sup>デアラウト思ヒマス</sup>。(略)」(第三期 卷六 第三 ヤクワントテツビン)

また、次の「水師營の會見(水師營)」は、第二期は文語文・韻文で書かれていたが、第五期は口語文・散文となっている。(45)と(46)、また、(47)と(48)はそれぞれほぼ同一内容の箇所であるが、第二期で「獻ずべし」となっていた箇所が第五期では「さしあげたいと思ひます」に、第二期で「ながくいたはり養はん」となっていた箇所が第五期では「いつまでも愛養いたしたいと思ひます」にかわっている。

- (45) 『我に愛する良馬あり。今日の記念に獻ず<sup>べし</sup>。』(第二期 卷十 第十二課 水師營の會見)
- (46) 「(略) については、今日の記念に、閣下にさしあげたいと思ひます。(略)」(第五期 卷十 十二 水師營)
- (47) 『(略)。軍のおきてにしたがひて、他日我が手に受領せば、ながくいたはり養はん。』(第二期 卷十 第十二課 水師營の會見)
- (48) 「(略)。閣下から馬をいただければ、いつまでも愛養いたしたいと思ひま

す。」(第五期 卷十 十二 水師營)

このことから、文語文において、意志・願望表現等のA類をトの内部にとる文末表現「と思ふ」が対応する表現の例としては「べし」「ん(む)」があり、推量表現等のB類をトの内部にとる文末表現「と思ふ(と思ひます)」の代替表現の例としては、「でせう」があることが推測される。特に、第1章・第5章でみたように、文語文においては文末表現「と思ふ」が用いられにくく、かわりに助動詞等、文末思考動詞以外の表現が使われていることがあるようである。

これらとは逆に、前の期では文末表現「と思ふ」であったが次の期以降では別の表現になっている例もみられた。次の例は、「航海の話。(二)(航海の話(二))」のものであるが、内容はほぼかわらないものの、全体的に文言が大幅にかえられている箇所である。この箇所の文言変更の意図は不明であるが、「海になれておくといふことは、よほど、必要なことだと思ひます」という箇所が、「海になれておくやうにしたいものです」となっている。

(49)「(略)。みなさんの中には、大きくなって、航海をする人もありませう。貿易をする人もありませう。漁業をする人もありませう。かよ一なしごとをする人はいふまでもないことですが、たとひ、農業をする人でも、工業をする人でも、小さいときから、海になれておくといふことは、よほど、必要なことだと思ひます。」(第一期 卷七 第十九 航海の話。(二))

(50)「(略)。皆さんの中にも、大きくなつてから外國へ商賣その他の用事で出かける人もありませう。又漁業その他海の仕事に出かける人もありませう。それですから小さい時から海になれておくやうにしたいものです。」(第二期 卷七 第二十五 航海の話(二))

共通教材において確認された、「でせう」「べし」等の表現は、文末思考動詞とまったく同じ意味・機能を持つものであるとはいえない。しかし、ほぼ同一の文脈において文末思考動詞と同様に用いられる表現であることが示されていることは確かであり、文末思考動詞との類似性がうかがえる。これらの表現と文末思考動詞を比較することで、近代以降、一種の推量表現として用いられる文末表現「と思ふ」が定着した要因を探る手掛かりとなろう。また、文末表現「と思ふ」による推量表現がみられない資料において、これらの表現が多く使われている可能性もあり、相補的な分布をなしているのか、調査する価値がありそうである。

## 5. おわりに

本章では、国定国語教科書における文末表現「と思ふ」「と存ず」を中心とした文末思考動詞について、期別・トの内部別出現状況、提出時期、出現しやすい文体、話手と聞手、および文末思考動詞に対応する類似表現等を、他の章で示した文末思考動詞の使用傾向と比較しながら検討した。

国定国語教科書という枠の中で文末思考動詞をみたが、そのあらわれ方は期ごとに異なっていた。全体的な傾向としては、文末表現「と思ふ」の用例数が期を経るごとに増加している。一方で文末表現「と存ず」は、第二期から第四期にかけて多く用いられていたが、第五期・第六期と現代に近づくにしたがって、用例数が減少していることがわかった。また、文末表現「と存ず」より文末表現「と思ふ」の方が早い巻で提出されることが多く、文末表現「と思ふ」の方がその謙讓表現である文末表現「と存ず」よりも先に習得されることが想定されているようであった。

また、文末思考動詞のトの内部の情報に着目すると、意志・願望の表現をトの内部にとる文末思考動詞の方が、推量や判断の表現をトの内部にとる文末思考動詞よりも先に提出される傾向もみられた。これは、第一章でみた「と思ふ」の史的発達過程と対応するものであり、「意志・願望+と思ふ」は、文末表現「と思ふ」の用法として基本的なものであるという可能性を示唆している。

文体の面からみると、文末表現「と思ふ」「と存ず」とも、手紙文や会話文に多くあらわれた。また、文末表現「と思ふ」については、第三期までは目上の聞手に使用されている例がないものの、第四期以降は目上の相手に対しても用いられていた。これは、子どもの発話としては硬質な文末表現「と存ず」より、文末表現「と思ふ」が使いやすいためということもあろうが、現代と同様、文末表現「と存ず」のかわりに「と思います」の形が使われるようになっていった過程を示唆しているとも考えられる。文末表現「と存ず」に関しても、手紙文を中心に、目下の相手に対しても用いられており、敬語としての謙讓表現というより、あらたまり語としての性格が強くなっていると考えられる。

文末表現「と思ふ」の用例が、期を経るごとに増えていることや、文末表現「と存ず」の主な使用場面であった手紙文においても、期を経るにしたがって「と思ふ」が使われるようになっていくことから、国定国語教科書においても文末表現「と思ふ」が重要な位置を占める表現になっている様子がわかる。また、共通教材を比較することで、文末思考動詞と助動詞との関わりもみることができた。これは、文末表現「と思ふ」を中心とした文末思考動詞の体系と、「べし」「ん(む)」等の助動詞との関連を考える手がかりとなるものであろう。

#### 【資料】

海後宗臣編（1963-1964）『日本教科書大系 近代編』第6巻～第9巻（国語3～

6) 講談社

国立国語研究所編 (1985-1997) 『国定読本用語総覧 1～1 2』三省堂

水原一校注 (1980) 『新潮日本古典集成 平家物語 中』新潮社

長谷川端・加美宏・大森北義・長坂成行編 (1994) 『神宮徴古館本 太平記』和泉書院

## 第8章 帝国議会会議録における文末思考動詞

### 1. はじめに

これまでみてきたように、明治 20 年代頃には文末表現「と思ふ」の推量の助動詞に準ずる使われ方が定着したと考えられるが、近代には、文末表現「と思ふ」が多用されていることに加え、「と存ず」「と考へる」「と思はる」等の表現もみられ、文末思考動詞の種類が多様化していることも注目される。

文末思考動詞による推量表現の多様性は、現代語の特徴の一つであり、その前身である近代語の文末思考動詞のバリエーションをみることは、古典語から現代語へと移り変わる流れの一側面をみることに繋がると思われる。

これまでみてきたように、「と思ふ」を中心とした文末思考動詞は、場面や文体により出現の仕方が異なる。例えば、文末表現「と思ふ」は近代の口語的な資料において多くみられたが、文語文においては「と信ず」のような文末表現がみられた。また、国定国語教科書において、話し合いの場面で文末表現「と思ふ」が多くみられたことにふれたが(第7章)、文末思考動詞は、自らの考えを述べる際に多く使われることもその特徴の一つである。そのような場面的条件を考えた時に、どのような資料を調査するのが適切であろうか。そこで、近代の口語資料であるが、日常会話と異なり論理的な意見を述べる公的な場での口語であり、思考動詞の状況を見る上で重要な資料である帝国議会会議録を調査し、どのような文末思考動詞が使用されているかをみていく。

### 2. 資料と分析方法

帝国議会会議録とは、帝国議会全会期(明治 23 年 11 月～昭和 22 年 3 月)の本会議・委員会の速記録である。用例の採収にあたっては、国立国会図書館が公開している「帝国議会会議録検索システム」を利用した。

帝国議会会議録のうち、貴族院の本会議を対象とし、その回次の 1 号が 1890 年、1900 年、1910 年、1920 年、1930 年、1940 年にあたる回次を選び、その回次の 2 号・5 号・11 号を調査した。ただし、第一五回(1900 年)の 11 号は分量が少なく、文末思考動詞の用例が 4 例のみであったため、次の 12 号を対象とした。

本章においても、文末思考動詞をトの内部の情報別に A 類(意志・願望)・B 類(推量・疑問)・C 類(判断・叙述)の三種にわけ、その出現状況を確認する。

なお、現代の国会会議録に関しては、速記録から会議録への編集過程で、字句整理作業が行われる。青山(1989)によると、言い誤り、脱落等軽微なものに限

り整理をするとされているようであるが、松田編（2008）には、現代語の議事録の「整文規準が不明確なもの」の例として「お聞きしたいです。→お聞きしたいと思います。」と整文された例があがっている（p.54）。帝国議会会議録についても同様に、発言した言葉がそのまま文字化されているとは限らないが（諸星 1986 等）、仮に同時代的に軽微な修正が加えられていたとしても、当時の公的な場での話し言葉を反映した言語資料であることに変わりないと考えられる。

### 3. 帝国議会会議録における文末思考動詞

帝国議会会議録における文末思考動詞について、【表1】に回次・号ごとの各表現の用例数を示した。また、参考に各号の文字数の概数を示した。

【表1】回次・号ごとの各表現の用例数

		と思ふ	と存ず	と考へる	と信ず	と認む	その他	計	文字数(概数)
第一回 (1890年)	2号	20	5	2	1	2	1	31	19000
	5号	45	20	15	0	1	2	83	45200
	11号	47	9	21	2	5	2	86	54700
第一五回 (1900年)	2号	18	0	1	2	0	0	21	14100
	5号	22	0	1	0	1	0	24	22800
	12号	12	2	2	1	4	0	21	14100
第二七回 (1910年)	2号	1	6	0	0	8	0	15	44300
	5号	1	0	1	0	11	2	15	19000
	11号	16	1	4	0	19	0	40	43200
第四三回 (1920年)	2号	40	15	9	2	1	2	69	33700
	5号	19	1	3	0	0	1	24	13700
	11号	75	18	54	6	1	6	160	73800
第五八回 (1930年)	2号	38	4	4	2	1	1	50	24300
	5号	27	7	4	2	9	1	50	27900
	11号	10	6	10	0	18	1	45	19900
第七六回 (1940年)	2号	4	6	6	1	3	6	26	21500
	5号	8	2	2	1	1	1	15	14700
	11号	1	5	0	1	13	0	20	25300
計		404	107	139	21	98	26	795	

※引用における例は数に含めていない。

「と思ふ」の他、「と存ず」「と考へる」「と信ず」等、様々な種類の思考動詞による文末表現がみられ、これらが固定した表現として定着していたことがわかる。なお「その他」には、「と思はる」「と考へらる」「と確信す」「と判断さる」「と判断す」「と記憶す」「と認定す」「と信ぜらる」「と思考す」「と心得る」等の文末思考動詞が含まれ、第6章でみた洋学資料等と比べても、文末思考動詞の種類が多様である様子が見えてくる。

【表1】をみると、1890年から1940年の50年間で、文末思考動詞の使用傾向が大きく変化しているということはないようである。しかし文末思考動詞の使用状況は回・号ごとに差がある。これは、会議録の分量の多寡も影響するが、意見書案や報告等の文語文には文末思考動詞が出現しないため、これらが多い号で

は、用例が少なくなることも関係している。【表1】の中で文末思考動詞の用例数が少ない号をみると、例えば第一五回の2号は、会議録の文字数が14100字程度と少ない上、文語文で記された「實業教育費國庫補助法中改正法律案」(p.20)や人名のみの「實業教育費國庫補助法中改正法律案特別委員」(p.21)の朗読等が含まれている。第二七回2号は、文字数でみると4万字を超える比較的分量の多い号であるが、この号の大半(35800字程度)は「商法中改正法律案」(p.22～)等の朗読となっているため、議論が交わされている部分の分量は少ない。

なお、帝国議会議録において文末思考動詞のバリエーションが多く出現している理由として、この時期に文末思考動詞が定着し、多様化しつつあるということに加え、同一話者の発言が長くなる際、文末の表現が単調になることを避けるべく様々な文末表現を使用していることが影響していると考えられる。例えば、次の(1)は富田鐵之助の一続きの発言であるが、その中に「と確信す」「と思ふ」「と存ず」「と考へる」の4種類の文末思考動詞が使われている。

- (1) 其要領ハ理由書ニ記シテ置キマシテ併セテ谷君ガ御演説ガゴザイマシタニ就キマシテ此建議ノ趣意ハ委シク御分リニナツテ居リマスルコトト確信イタシマス、然ルニ只今加藤君ヨリ否トスルト申ス御議論ガ提出ニナリマシタ、私ドモハ帝國ノ政府ハ病人トハ考ヘラレマセヌ誠ニ健全ナル政府デゴザイマスト思ヒマス、(中略)、尤モ加藤君モ此精神ハ同意デアアル只病人デ無イカラ建議シナクツテモ宜イト云フ御議論デアツテ大體ハ御不同意ト云フノデハ無イト存ジマス、(中略)、いぎりすガー國ヲ護養イタシタノモ一ト大事件デゴザイマセウト考ヘマス、(中略)、何レノ國デモ同シコトデ決シテ自然ニ任セテ國ノ發達シタモノハナカラウト思ヒマス、(第一回5号 pp.64~65)

上記の下線部の文末思考動詞を全て「と思います」としても、文としての意味はほぼ変わらないといってよい。このような同一話者による発言の中での単調さの回避が、文末思考動詞にバリエーションをうむ一つの契機となっている点は注目すべきである。

#### 4. 各文末表現の特徴

各文末表現のトの内部に注目し、トの内部に意志・願望表現をとるA類、推量・疑問表現をとるB類、判断・叙述等の表現をとるC類、の3つにわけて各文末表現の特徴を考察する。用例の後に、回次・号・頁・頁内の位置(上/下、もしくは何段目か)・発話者を示す。

#### 4. 1. 文末表現「と思ふ」の特徴

文末思考動詞の中で、最も多くみられるのが「と思ふ」である。今回の調査で得られた 795 例中、404 例と半数以上が文末表現「と思ふ」の例であった。トの内部は、A類の意志・願望、B類の推量・疑問、C類の判断・叙述のいずれの例もみられる。

【表 2】文末表現「と思ふ」の用例数

	A類	B類	C類
第一回	16	61	35
第一五回	8	26	18
第二七回	5	8	5
第四三回	20	68	46
第五八回	15	32	28
第七六回	2	1	10
計	66	196	142

##### ■A類をトの内部にとる文末表現「と思ふ」の例

「う・よう」「たい」等の助動詞をトの内部にとり、以下のように、これから自らの考えを述べることを表明したり、相手に説明を求めたりする場合等、議論を進行する際に使用されている例が多い。

- (2) 賛成ダカラ其理由ヲ申述ベヤウト思ヒマス、(一回 2号 p.25 上 山口尚芳)
- (3) 本人ガ希望イタシテ居ッタト云フ證據ガアリマスナラバ、其點ヲ舉ゲテ御説明ヲ願ヒタイト思フ、(四三回 5号 p.96 下 湯浅倉平)

##### ■B類をトの内部にとる文末表現「と思ふ」の例

「であろう」「まい」等の表現をトの内部にとり、妥当性や必要性を述べる例、未来の事態を推測する例等がみられた。

- (4) 餘リ當然スギルコトデアラウト思ヒマス、(一回 5号 p.6 下 加藤弘之)
- (5) 併シ本年ハ恐ラク困ルデアラウト思ヒマス、(四三回 11号 p.278 上 中村是公)
- (6) 斯様ナ譯デ、調査ヲスッカリシタ上ニ發表シヨウト云フヤウナコトデハ、其ノ間ニ多クノ委員ノ中ニ色々ノ意見ナドガ出マシテ、容易ニ實行出來マ

イト思ヒマス、(七六回5号 p.47-4 田中館愛橘)

■C類をトの内部にとる文末表現「と思ふ」の例

未来の事態を推測する例や、トの内部に過去形をとる例、当為表現の例、物事への評価・判断を述べる例等がみられた。

- (7) 然レドモ是レハ今ノ通りニシテ此法律ガ幾分カ干涉シテ置キマセヌト自然内務省ノ免狀ヲ得タル所ノ醫者モ初メハ飯モ食ヘナイヤウナ事柄ニナルト思ヒマス、(一回11号 p.180上 島内武重)
- (8) ソレカラ昨日御答ヲ補充イタスル中ニ、黒澤尻横手間ト云フ、元鐵道敷設法ニ確カアツタト思ヒマス、(四三回11号 p.28上 元田肇)
- (9) 寧ロ私ドモハ政府ノ意見ノ方ガ國家經濟ノタメニ宜イト思フ、(一五回12号 p.130上 都築馨六)

これらの例の中には、文末表現「と思ふ」の部分を推量の助動詞「ダロウ」等に置き換えることが可能なものも多く、このような場合に、文末表現「と思ふ」は一種の推量表現として用いられているといえる。

#### 4. 2. 文末表現「と存ず」の特徴

文末表現「と存ず」のトの内部にも、A類の意志・願望、B類の推量・疑問、C類の判断・叙述のいずれもみられる。一般に文末表現「と存ず」は「と思ふ」のあらたまり・丁重表現とされるが、用例(1)でみたように一続きの発話の中で文末表現「と思ふ」と「と存ず」とがともに出現する例もある。このような例では、聞手との関係によって文末表現「と思ふ」と「と存ず」とを使い分けているというより、同じ文末表現を繰り返すことで単調になるのを避けるために、文末表現「と存ず」を使用している可能性がある。

【表3】文末表現「と存ず」の用例数

	A類	B類	C類
第一回	2	15	17
第一五回	0	0	2
第二七回	3	1	3
第四三回	7	7	20
第五八回	7	3	7
第七六回	7	2	4
計	26	28	53

■A類をトの内部にとる文末表現「と存ず」の例

- (10) 併シ當席ニ登リマシタコトデゴザイマスカラ終リニ一言ヲ致シテ置キタイト存ジマス、(一回2号 p.28上 山口尚芳)

なお、「意志+と存ず」は下記の一例のみで、他は全て「願望+と存ず」の例であった。

- (11) ソレ故ニ本員モ此大學教育ノ過去、竝ニ將來ニ關シマシテ、重大ナル關係ノアリマスル點ヲ大略申述ベマシテ、本案ニ賛成イタシタ理由ヲ明カニシヤウト存ジマス、(二七回11号 p.139上 伊澤修二)

■B類をトの内部にとる文末表現「と存ず」の例

- (12) 本員ノ考ヘル所デハ此外交問題ニ就テノ尤モ急要ナル事件ト謂フモノハ此治外法權ヲ撤去スルト謂フコトガ第一ノ問題デアラウト存ジマス、(一回5号 p.68上 尾崎三良)
- (13) マダ特別委員ノ選舉ニ移リマセヌカラ少シ時機ガ早イカト存ジマス (二七回2号 p.41上 議長・公爵徳川家達)

■C類をトの内部にとる文末表現「と存ず」の例

- (14) 然レバ或ル場合ノ人ガ或ル學術其他ノコトニ依リマシテめーとるバカリヲ用キンナラヌト云フ人ノタメニモ此度量衡ノ改正ヲ致シマスルコトニ付テ何ノ不都合モナイコトト存ジマス、(一回2号 p.23上 陸奥宗光)
- (15) 是ハ所謂我憲法ノ精神ヲ擁護スル上ニ於テ大切ナル事柄ト存ズル、(四三回2号 p.29上 仲小路廉)

なお、(15)の例のように「ます」の後接しない「と存ず(る)」の形は、帝国議会会議録に6例みられた。うち2例は第一回2号の重野安繹による一続きの発言内の、うち4例は第四三回2号の仲小路廉による一続きの発言内のものであった。重野安繹・仲小路廉とも、「と存じます」の形を全く用いていないわけではなく、「と存ず(る)」の形の前後に「と存じます」の形の例がみられる点で共通している。さらに、仲小路廉については、同じ発言の中で、「ます」の後接しない「と思ふ」の例もみられることから、長い発言の中で、一部の文末において「ます」を省略したか、あるいは発言した言葉が会議録として文字化された際に、長大な

会話内の敬語形式が一部省略された可能性がある。なお、この6例を除くと、文末表現「と存ず」は専ら「と存じます」の形で用いられていた。

また、今回の調査範囲内において文末表現「と存ず」を使用する話者のうち、文末表現「と思ふ」を一度も使用しない話者がいる（桂太郎、佐佐木行忠、東條英機、細川潤次郎、松平頼壽等）一方、文末表現「と思ふ」を多く使用しながら、文末表現「と存ず」を一度も使用しない話者もいる（島内武重、鈴木喜三郎、竹越與三郎、田中義一、外山正一、原敬、村田保等多数）。文末表現「と存ず」の使用に関しては、個々の場面のとらえ方や個人的嗜好によるところも大きいようである。

#### 4. 3. 文末表現「と考へる」の特徴

文末表現「と考へる」は、文末表現「と思ふ」に次いで用例数が多い。ほぼ同時期の資料である国定国語教科書においては、文末表現「と考へる」は第六期の同一単元内に2例みられたのみであることを考えると（第7章3参照）、文末表現「と考へる」の使用が多いことは帝国議会会議録の特徴であるといえる。動詞「考へる」が過程的・論理的なニュアンスを持つ語であるため、文末表現「と考へる」という表現が帝国議会会議録のような公の場での発言として使われやすかったであろう。

文末表現「と考へる」のトの内部は文末表現「と思ふ」「と存ず」同様、意志・願望、推量・疑問、判断・叙述のいずれもみられる。

【表4】文末表現「と考へる」の用例数

	A類	B類	C類
第一回	2	14	22
第一五回	1	0	3
第二七回	1	1	3
第四三回	15	19	32
第五八回	3	6	9
第七六回	0	1	7
計	22	41	76

#### ■A類をトの内部にとる文末表現「と考へる」の例

- (16) 今日ハ時間モ切迫イタシテ居リマス故ニ「ニコラエウスク」ノ問題ニ付テ當局大臣ノ御説明ヲ求メタイト考ヘマス（四三回2号 p.35 下 男爵 阪谷芳郎）

- (17) 本日ハ大分時間モ經チマシタカラ、諸君ニ於テ御異議ガナケレバ、是デ延會ヲ致サウト考ヘマス (四三回 11 号 p.305 下 議長・公爵徳川家達)

ここで、「意志・願望+と考える」という表現について考えてみたい。

内田 (2008) は「~と思う」の機能の一つとして「②表現者 (話し手・聞き手) 個人の意志・願望に対して、聞き手・読み手に配慮してやわらげて表示する。」をあげ、「(5) では、これから乾杯の音頭をとらせていただこうと (○思います/×考えます)。」「(6) (論文で) 今後もこの研究を進めていきたいと (○思う/×考える/×考えられる/×思われる)。」等の用例を示し、「~と考える」はこの機能を持たないとしている (p.40)。これは、文末表現「と考える」が「と思う」と異なり、論理的思考によることを示す表現であり、思いつきや個人的な願望・意志を表示しにくいためであると考えられる。

しかし、帝国議会会議録には「意志・願望+と考へる」の例が少なくない。文末表現「と考へる」の全 139 例の用例中、22 例が意志・願望をトの内部にとるものである。これらの用例をみると、私的な希望を述べたものはなく、いずれも会議の延期や説明を求めるといった、議会進行のための意見を述べたものである。私的な思考であるというニュアンスをもつ文末表現「と思ふ」よりも、公的であらたまった言い方として、場の中で共有すべき意志や願望を文末表現「と考へる」を用いて表示しているのだと思われる。

#### ■B類をトの内部にとる文末表現「と考へる」の例

- (18) ソレカラ又或ハ今日ハ識者ノ中ニハ大學ノコトニ付イテ意見ヲ持ッテ居ル人ガ随分澤山ニアリマスガ、其多數ハ矢張り本員等ノ如ク成ルベク大學ノ數ヲ多クシテ、サウシテ今日ノ國力ニ相當スル大學ヲ拵ヘルガ宜イト云フコトハ、是ハ大多數ノ意見デハナイカト考ヘマス、(二七回 11 号 p.139 下 伊澤修二)
- (19) 此問題ハ政府ノ御答辯ガ如何ニモ明瞭ヲ缺イテ居リマスルデ、一般ノ國民モ殆ド迷ウテ居ルダラウト考フル、(四三回 11 号 p.294 上 江木千之)

#### ■C類をトの内部にとる文末表現「と考へる」の例

- (20) 論旨ガ盡キタト考ヘマス、(一回 5 号 p.75 上 議長・伯爵伊藤博文)
- (21) 現ニ二割半ナリ三割ト云フ利益ガアル以上ハ此外國人ト押合ガ出來……日本今日ノ商人ハ微力デアルト考ヘマス (一五回 12 号 p.129 上 瀧兵右衛門)

(22) 大正九年度ノ豫算ハ實ニ今日ノ場合重要ノ豫算ト考ヘル、(四三回 2号 p.29 下 仲小路廉)

なお廣澤金次郎は、四三回 11号において文末表現「と考へる」を 29回使用している。廣澤金次郎のこの他の文末思考動詞の使用状況をみると、「と思ふ」5例、「と存ず」1例、「と思はる」2例で、これらに比べて「と考へる」の使用が多くなっている。このように、文末表現「と考へる」の使用についても文末表現「と存ず」同様、話者によるところがありそうである。

#### 4. 4. 文末表現「と信ず」の特徴

文末表現「と信ず」は、現代の会話においてはそれほど多く使われないが(本章 5も参照)、帝国議会会議録ではその使用が少なくない。「遠からず」「決して」「當に」「急務」「であります」等の語とともに、とりたてて強い確信や信念を述べる際に用いられている例が多い。21例の用例のうち、トの内部に意志・願望をとる例はみられず、説明を求めたり議事を進行したりする際には用いられないようであった。

【表 5】 文末表現「と信ずる」の用例数

	A類	B類	C類
第一回	0	2	1
第一五回	0	1	2
第二七回	0	0	0
第四三回	0	1	7
第五八回	0	0	4
第七六回	0	0	3
計	0	4	17

##### ■B類をトの内部にとる文末表現「と信ず」の例

(23) 之ニ付テ政府ハ銳意救濟ヲ講ジテ財界ノ安定ヲ得ルコトニ深甚ノ注意ヲ致シテ居リマスルカラ、遠カラズ其安定ヲ見ルデアラウト信ズルノデアリマス、(四三回 2号 p.24 上 國務大臣原敬)

##### ■C類をトの内部にとる文末表現「と信ず」の例

(24) 是レハ存シテ置イテ十一條ハ源デアル十三條ハ流レデアル源ガ潤レタ以上流レヲ存シテ置ク譯ニ參ラヌト云フ御論ハ本員更ニ了解ヲ致シマセヌ、又サウ云フ道理ハ決シテ無イト信ジマスル、(一回 11号 p.185 上 子

爵清岡公張)

- (25) 國體ノ本義ニ基キ庶政ヲ一新シ、以テ國防國家體制ヲ確立スルハ、現下内政ノ急務デアルト信ズルノデアリマス、(七六回2 p.10-3 國務大臣近衛文麿)

#### 4. 5. 文末表現「と認む」の特徴

文末表現「と認む」の例の多くは、議長・副議長による議事進行の場面で、主に「御異議ないと認めます」「過半数と認めます」の形で使用されているものである。前者の「御異議ないと認めます」は70例あり、類似した表現として「御異議が無いと認めます」「御異存ないと認めます」が各1例みられる。後者の「過半数と認めます」は11例で、類例として「三分の二以上と認めます」が5例、その他、「多数(少数)と認めます」「定規の賛成があったと認めます」等、議会における賛成者の数を確認する表現がみられる。この「と認む」は、ある立場からの判断・認定をあらわす表現であるという点および、事態の蓋然性をあらわす表現ではないという点において、他の文末思考動詞とはやや性格を異にしている。

議事進行の表現としての文末表現「と認める」は、現代の国会会議録においても同様に使われており(本章5にて後述)、これは国会における定型的な表現であるとみられるが、第一回の帝国議会の時点で既に文末表現「と認む」という表現が確立していたことがわかる。

【表6】文末表現「と認む」の用例数

	A類	B類	C類
第一回	0	0	8
第一五回	0	0	5
第二七回	0	0	38
第四三回	0	0	2
第五八回	0	0	28
第七六回	0	0	17
計	0	0	98

- (26) 此案ハ是レデ終局ト認メマス、(一回5号 p.78 上 議長・伯爵伊藤博文)
- (27) 過半数ト認メマス、(一回11号 p.164 上 議長・伯爵伊藤博文)
- (28) 御異議ナイト認メマス、(二七回2号 p.21 上 議長・公爵徳川家達)

なお、上の【表6】の数には含めなかったが、引用文の中に文末表現「と認む」が用いられている例が4つあり、この場合のみ、議事進行以外の場面で使われて

いた。次の(29)の例は、発言者の花井卓藏が引用した、政府の答弁の中にあらわれた文末表現「と認む」の例である。

(29) 然ル所之ニ對シマシテハ政府ノ答辯ハ、第一ニ對シマシテハ、國務大臣ノ職務ハ國法上各省所管ノ事務ニ局限セザルモノト認ム、第二ニ付キマシテハ、國務大臣ノ發言ハ必シモ其所管事務ニ拘束セラルベキモノニ非ズト認ム、第三ニ對シマシテハ、國務大臣ノ發言ニ付テ其總員ガ政治上及道德上ノ言責ニ任ズベキヤ否ヤハ各事項ニ付テ決定スベキ問題ニシテ概括的ニ答辯スルコトヲ得ズト、斯ウ云フ答辯ヲ得タノデアリマス、(五八回5号 p.34-4 花井卓藏)

#### 4. 6. その他

これまであげたものの他に、「と思はる」「と考へらる」「と確信す」「と判断さる」「と判断す」「と記憶す」「と信ぜらる」「と思考す」「と心得る」の文末思考動詞がみられた。これらの表現はいずれも推量・疑問、もしくは判断・叙述をトの内部にとる形で使用されており、意志・願望をトの内部にとる例は1例もみられなかった。

##### 4. 6. 1. 文末表現「と思はる」について

文末表現「と思はる」は12例みられた。トの内部にB類の推量・疑問およびC類の判断・叙述をとり、客観的な判断であることを示す表現である。

【表7】文末表現「と思はる」の用例数

	A類	B類	C類
第一回	0	1	2
第一五回	0	0	0
第二七回	0	0	0
第四三回	0	4	1
第五八回	0	1	1
第七六回	0	1	1
計	0	7	5

##### ■B類をトの内部にとる文末表現「と思はる」の例

(30) 即チ此裁判權ヲ我レニ取り税權ヲ回復スルト云フナラバ彼ノ治外法權ト云フコトハ痕跡ハ無イコトニナラウト思ハレル、(一回5号 p.73 下

男爵渡邊清)

- (31) 國語ト云フモノハ國力ノ大ナル一要素デアルコトハ疑ハレマセヌ、何レノ國ニ致シマシテモ、單ニ物資ノ配給トカ金融ノ統制トカ云フコト以外ニ、國語ニアル所ノ國力ヲ見ナケレバ、往々ニシテ見誤ルコトガアラウト思ハレマス、(七六回5号 p.46-4 田中館愛橘)

■C類をトの内部にとる文末表現「と思はる」の例

- (32) 又ソレガ人民ノ便利トモナリ、夫レカラ其職務ヲ行フ所ノ辯護人ノ便利ニモナリ、夫レカラ又醫者ニモ即チ其方ガ便利デアル、其便利デアル所ヲ缺イテ窮屈ヲ與ヘテ不便ニスルノハ得策デナイト思ハレル、(一回 11号 p.169 下 加藤弘之)
- (33) 窮狀斯克ノ如キニモ拘ラズ、今回抗戰建國ヲ標榜スル主ナル原因ハ、英米殊ニ米國ノ援助ニ望ミヲ掛ケルト共ニ過去ノ行懸リニ捉ハレテ居ル爲デアルト思ハレマス、(七六回2号 p.11-3 國務大臣松岡洋右)

4. 6. 2. 文末表現「と考へらる」について

文末表現「と考へらる」は、二七回に2例、四三回に1例の合計3例みられた。今回の調査の範囲では、「と考へらる」のトの内部として、C類の判断・叙述表現のみみられた。

■C類をトの内部にとる文末表現「と考へらる」の例

- (34) 然ルニ其期間内ト雖モ事件ノ取扱ヲ停止セネバナラヌト云フ格段ノ理由ハ無イト考ヘラレマス、寧ロ平常ノ如クニ事件ヲ取扱ヒマシテ訴訟ノ進行ヲ圖リマスコトガ機宜ニ適シタル處置デアルト考ヘラレマス、(二七回5号 p.61 上 政府委員河村讓三郎)

4. 6. 3. 文末表現「と確信す」について

文末表現「と確信す」については、トの内部にB類の推量・疑問をとる例が1例(四三回)、C類の判断・叙述をとる例が2例(一回および五八回)の計3例みられた。

■B類をトの内部にとる文末表現「と確信す」の例

- (35) 又露西亞ニ致シテモ相當ナル政府デアリマシテ、國際上ノ大義ヲ考へ、列國ノ間ニ情誼ニ重キヲ置ク政府デアリマスレバ、必ズ我國ニ満足ヲ與ヘルデアラウト確信スルノデアリマス、(四三回 11 号 p.298 上 國務大臣原敬)

■C類をトの内部にとる文末表現「と確信す」の例

- (36) 其要領ハ理由書ニ記シテ置キマシテ併セテ谷君ガ御演説ガゴザイマシタニ就キマシテ此建議ノ趣意ハ委シク御分リニナツテ居リマスルコトト確信イタシマス、(一回 5 号 p.64 上 富田鐵之助)

4. 6. 4. 文末表現「と判断さる」について

文末表現「と判断さる」は2例みられたが、今回の調査の範囲では、トの内部はC類の判断・叙述表現のみみられた。いずれも七六回2号における東條英機の発言である。

■C類をトの内部にとる文末表現「と判断さる」の例

- (37) 是等ハ専ラ我ガ空軍トノ戦闘ヲ避ケテ居ル状態デアリマス、又今日彼ノ軍ノ裝備ノ不良ナル、給養ノ悪化ハ甚ダシキモノガアルト判断サレルノデアリマス、(七六回 2 号 p.14-2 國務大臣東條英機)

4. 6. 5. 文末表現「と判断す」について

文末表現「と判断す」は、今回の調査では1例のみみられた。

■C類をトの内部にとる文末表現「と判断す」の例

- (38) 其ノ實際的效果ハ、我ガ輸入路ノ封鎖強化等ヨリ見マシテ大ナルモノハナイト判断スルモノデアリマス、(七六回 2 号 p.13-4 國務大臣東條英機)

(38) の発言者である東條英機は、(37) の例のように文末表現「と判断さる」も使用しているが、今回の調査の範囲では、「判断する」系統の文末思考動詞は、

東條英機以外の人物による使用がみられなかった<sup>24</sup>。これは、物事の判断を行うような、ある程度高い立場にある者でないと使いにくい表現であることも関係していよう。

#### 4. 6. 6. 文末表現「と記憶す」について

文末表現「と記憶す」は、1例のみみられた。「記憶する」という動詞の意味が強く残っており、自らの記憶を再生しながら述べる例となっている。

##### ■C類をトの内部にとる文末表現「と記憶す」の例

(39) 其急ナ線路ガ何時カラ始マツテ居ルカ、是ハ確カ十一年度カト記憶シマス、(四三回 11号 p.276 上 中村是公)

#### 4. 6. 7. 文末表現「と信ぜらる」について

文末表現「と信ぜらる」は、1例のみみられた。

(40) 敵ノ困窮ハ日ト共ニ甚ダシキモノガアルト信ゼラレマス、(七六回 2号 p.14-2 國務大臣東條英機)

自発の助動詞を取り込んだ語形である「と思はる」「と考へらる」「と判断さる」「と信ぜらる」等の文末思考動詞は、動詞の種類がそれぞれ「思ふ」「考へる」「判断す」「信ず」と異なるものであるが、いずれもトの内部に意志・願望をとる例がみられない点で共通している。

#### 4. 6. 8. 文末表現「と思考す」について

文末表現「と思考す」は、1例のみみられた。

(41) 日佛提携ノ必要ヲ認識シタカラニ外ナラヌト思考致シマス、(七六回 2

---

<sup>24</sup> 現代の国会会議録にも、用例は多くないものの、下記のような「と判断する」の例がみられる。

(i) 農業改革二法案に見られるように、水田農業全体に担い手の農地集積八割といった構造政策と米価下落に対応できる大幅な生産コスト引下げを要求する中では、中山間地向けの日本型直接支払という今回の促進法では、中山間地農業は支え切れないと判断します。(第一八六回 13号 村田武)

#### 4. 6. 9. 文末表現「と心得る」について

文末表現「と心得る」は、今回の調査では1例のみみられた。

- (42) 然レバ源ガ涸レタ以上ハ流レ出マシタ第十三條モ自ラ消滅イタサネバナ  
ラヌ譯デアルト心得マスル、(第一回 11号 p.182 穂積陳重)

なお、【表1】には含めていないが、矢代書記官朗讀の建議案に文末表現「と認定す」の例が1例あった。

- (43) 帝國議會ノ貴族院ハ帝國ノ産業ヲ護養シ且帝國々庫ノ歳入ヲ増益センカ爲  
メ海外ヨリ輸入スル商貨ニ對シ帝國ノ情勢ニ適應ナル程度ヲ量リ海關稅ヲ  
増課スルヲ以テ最大必要ノ事件ト認定ス (一回5号 p.60下)

#### 5. 現代の国会会議録との比較

ここまでみてきた帝国議会議録における文末思考動詞の特徴が、会議録という資料性によるものであるか、時代性によるものであるのかについてさらに検討するため、ここでは現代の国会会議録での文末思考動詞をみていく<sup>25</sup>。帝国議会議録での号の選定方法と同様に、2013年(第一八三回)の2号・5号・12号<sup>26</sup>を調査した。

【表8】をみると、文末表現「と思う」「と考える」が多く、次いで文末表現「と存ずる」が用いられている。帝国議会議録と同様、「と認める」の用例もみられる。以下に用例をあげる。

【表8】現代国会会議録における文末思考動詞の用例数

		と思う	と存ずる	と考える	と信じる	と認める	その他	計	文字数(概数)
第一八三回 (2013年)	2号	11	1	20	0	3	0	35	26600
	5号	25	0	10	0	0	0	35	34000
	12号	12	8	11	0	3	2	36	45700
計		48	9	41	0	6	2	106	106300

##### ■文末表現「と思う」の例

<sup>25</sup> なお、現代国会会議録における思考動詞の研究として渡邊(2010)がある。これは、戦後の国会会議録において、「補文+という{ように/ふうに} 思います」の形式を「補文+と 思います」の形式と比較し、その比率が上昇していることを示したものである。

<sup>26</sup> 11回は文字数900字程度と文章量が少ないため対象外とし、次の12号を調査した。

- (44) 金子洋一議員から、私の金融政策については評価をいただいたこと、大変感謝を申し上げたいと思います。(第一八三回 5号 内閣総理大臣安倍晋三)
- (45) これは、政権交代から一か月という時間的な制約の中でまとめ上げたことを考えると、慎重な議論のためにはむしろ的確な決断であったと思います。(第一八三回 12号 横山信一)

■文末表現「と存ずる」の例

- (46) 質疑はなおございますが、これを次会に譲りたいと存じます。(第一八三回 2号 議長平田健二)
- (47) 価格表示の在り方を検討するに当たっては、消費税率の引上げに際しての事業者による円滑な転嫁の確保や、事務負担への配慮に加え、消費者への配慮の観点も踏まえる必要があろうと存じます。(第一八三回 12号 国務大臣麻生太郎)

■文末表現「と考える」の例

- (48) 民主党はその内容をしっかり精査、吟味していきたいと考えます。(第一八三回 2号 岡崎トミ子)
- (49) 次世代を担う若者に、納税者として国、地方、政府の税金の使い道に関心を持たせ、税の意識を育てるために、義務教育時代から税の教育が必要だと考えます。(第一八三回 12号 寺田典城)

■文末表現「と認める」の例

- (50) 御異議ないと認めます。(第一八三回 2号 議長平田健二)

■その他の例

「その他」の2例は、いずれも文末表現「と思われる」の例である。

- (51) こうした状況下で固定費を増大させる給与引上げは、企業にとって非常に厳しいことと思われます。(第一八三回 12号 川合孝典)

なお、上記の3つの号には入っていないが、2013年中の12号までの参議院本会議において、文末表現「と信じる」の用例も1例みられた。

(52) 皆さんの社会での活躍が日本の新たな活力を生み出すと信じます。(一八三回8号 内閣総理大臣安倍晋三)

現代の国会会議録、帝国議会議録ともに文末表現「と思う(と思ふ)」「と考える(と考へる)」の用例が多く、また、議長等による議事進行の場面で文末表現「と認める(と認む)」を使用する点等をみると、現在の国会会議録にみられる文末思考動詞の使用傾向と近い形が、既に明治期に確立していたようである。近代・現代と共通して、会議という場面において文末思考動詞のバリエーションが多くあらわれていることがわかる。ただし、現代の国会会議録では文末表現「と存ずる」がやや少ない印象を受ける。文末表現「と存じます」を用いずとも、文末表現「と 생각합니다」の形で丁寧さをあらわすことができるため、その形に収束していったと考えられる(第7章参照)。

## 6. おわりに

帝国議会議録には、「と思ふ」「と存ず」「と考へる」を中心に、文末思考動詞が数・バリエーションともに多くみられる。会議では、自らの意見を述べる場面が多く、文末思考動詞があらわれやすいこと、また、同一話者の発言が長くなった際、文末の表現が単調になることを避けるために様々な文末表現を使用していることから、他の資料と比べて多くのバリエーションがみられるのだと考えられる。また一方で、文末表現「と認む」等、議事進行に関わる表現として、文末思考動詞がある種定型的に用いられているものもあり、この点は会議録に特有の傾向であろう。なお、現代の国会会議録にも帝国議会議録における文末思考動詞の使用状況と同様の傾向がみられた。

また、「と信ず」「と思はる」「と判断さる」等、トの内部に推量や判断・叙述の表現をとる文末思考動詞のバリエーションが多くみられ、より思考内容・思考のニュアンスを具体化した様々な表現を使い分けていることがわかる。

近代には文末表現「と思ふ」の推量表現的な用法が定着したのと同時に、「思考動詞による文末表現」という表現形式自体が定着し、現代に至っているともいえよう。近代において分析的傾向(田中 1965)が進み、推量の助動詞が「う」「だろう」等に収束されつつある一方、文末思考動詞が多様化することでより細かく思考のニュアンスを伝えられるようになったとも考えられる。

**【資料】**

「帝国議会会議録検索システム」 ([http://teikokugikai-i.ndl.go.jp/TEIKOKU/swt\\_startup.html](http://teikokugikai-i.ndl.go.jp/TEIKOKU/swt_startup.html))

「国会会議録検索システム」 (<http://kokkai.ndl.go.jp/>)

## 第9章 文末思考動詞と推量の助動詞—「べし」を中心に—

### 1. はじめに

これまで、文末思考動詞の様々な側面を確認し、近代に推量表現に準ずる文末表現「と思ふ」が定着した背景を検討した。中世において、文末表現「とおぼゆ」「と存ず」および、意志や願望の表現を内部にとる文末表現「と思ふ」が多用されていたことがその土台となり、また、近世から近代にかけて、「とおぼゆ」等の文末思考動詞が衰退したことが、近代に至り推量表現に準ずる文末表現「と思ふ」が多用されるようになった背景の一つにあるようであった。このように、文末表現「と思ふ」の発達には、文末思考動詞の体系内の動きが大きく関係していたといえる。

しかし、ここで、文末思考動詞の体系とは別の側面、すなわち推量表現という枠内の体系の変化が文末表現「と思ふ」による推量表現の定着に影響を与えたのかどうかについても検討しておく必要がある。例えば、助動詞「う」による推量表現や、「らむ」「けむ」「べし」等の推量の助動詞の衰退等が、思考動詞による文末表現の多様と関わりがある可能性があるが、本章では、推量の助動詞の体系の変化について確認した上で、文末表現「と思ふ」の定着以前に使われていた文語的な推量表現の一例として、「べし」と文末思考動詞との類似性について検討してみたい。

### 2. 推量の助動詞の体系の変化と文末表現「と思ふ」

まず、推量の助動詞の体系の変化について整理しておきたい。田中（1965）は、「古代語の推量表現とそれに対応する現代語の言い方」を、下記のように示している。

A	花咲か <u>む</u>	花が咲く <u>だらう</u>	
B	花咲き <u>けむ</u>	花が咲い <u>ただらう</u>	
C	花咲く <u>らむ</u>	花が咲い <u>ているだらう</u>	<u>どうして</u> 花が咲く <u>のだらう</u>
D	花咲く <u>らし</u>	<u>きっと</u> 花が咲く <u>だらう</u>	
E	花咲か <u>まし</u>	花が咲く <u>だらうに</u>	
F	花咲か <u>じ</u>	花は咲か <u>ないだらう</u>	
G	花咲く <u>まじ</u>	花は咲か <u>ないはずだ</u>	
H	花咲く <u>べし</u>	花が咲く <u>はずだ</u>	
I	花咲く <u>めり</u>	花が咲く <u>ようだ</u>	

(p.15)

さらに、次のように続ける。

G・H・Iなどは、個々の口語訳の場合ここまで言いわけしないで、すべて「ダロウ」・「ナイダロウ」ですませてもいいだろう。そうしてみると、古代語には、推量の助動詞として九種類もの助動詞があつて、これで推量表現をまかなっていたのに、現代語は、たった一種類の助動詞「ダロウ (デショウ)」だけで用をたしている、ということになる。(中略)、古代語の助動詞は、一つ一つそれぞれが、かなり複雑微妙な表現内容をもっている。「ケム」はこれ一つで「過去の事実に対する推量を表す」という。「ジ」や「マジ」は「打消の推量」とよばれている。また、「ラシ」は「確信のある推量」というように、古代語の推量の助動詞は、単に『推量』を表わすだけでなく、言うなれば、「推量プラスアルファ」である。これに対して現代語の「ダロウ (デショウ)」は「推量オンリー」できわめて単純なものである。(中略) 古代語の言い方と、現代語の言い方とをくらべてみると、古代語は助動詞の使いわけによって、複雑な、さまざまな推量表現を言いわけしている。これに対して現代語では、この複雑な表現内容が、いくつかの単純なブロックにわけられてしまい、それら単純な表現単位のコンビネーションによって表わされている。(pp.15-16)

このような「分析的傾向」(田中 1965, p.17) は近代語の特徴とされる。近代以降、「う・よう」等の助動詞が意志をあらわす用法に偏るようになり、推量の助動詞としては「だろう」が主なものとなっていることは確かである。しかし、助動詞「だろう」と、それに付加されるアスペクトや否定表現との組み合わせのみで、古典語の推量の助動詞が担ってきたすべての機能を果たすことができているわけではない。例えば、上記G・H・Iに「はずだ」「ようだ」等の形式名詞による推量表現があがっているが、文末表現「と思ふ」についても、同様に推量の機能の一部を担っていることは、前章までに述べた通りである。

北原(1982)には、分析的傾向と文末思考動詞との関係を示唆する記述がある。これは、現代語においては助動詞より客体的表現がよく用いられ、「だろう」のかわりに「と思う」等の表現がよく使われる、という指摘である<sup>27</sup>。

表現の変遷ということを考えるとき、平安時代の助動詞一語による表現が、

---

<sup>27</sup> ただし、第2~4章でみたように、「と存ず」「とおぼゆ」といった文末思考動詞は、既に中世から多用されている。これらも助動詞とは異なる分析的な表現であるとしてよいのであれば、思考動詞による文末表現に関しては、近代を待たずに分析的な傾向がみられるようになっていたといえる。

どういう過程を経て現在のよう表現になったのか、もう少し詳しくいうと、平安時代の推量の助動詞がどのようにして消滅し、現代語のよう表現がいかにして発生し成立したかということについて、その実態を具体的に解明しなければならないのだが、残念ながら調査研究がそこまでしていない。ただ、興味深いことには、一語による総合的な表現が、いくつかの語を重ね用いる分析的な表現になっているという事実である。そして、平安時代の推量表現が助動詞による主体的表現であるのに対して（ただし、すべてが主体的表現であるわけではなく、この点は細かく見ると問題である）、現代語の場合、客体的表現によるところが多いということである。補助動詞や形式名詞は客体的表現であるし、「だろう」というかわりに「…と推察する」「…と想像する」「…と思う」というような表現がよく用いられる。(p.151)

さて、現代語においては「だろう」というかわりに「…と思う」がよく用いられる、という点については、文脈的に両表現が置き換え可能な場合と、いずれかの表現しか使えない場合とがある。

まず前者の、両表現が置き換え可能な場合は、次のようなものである。下記はそれぞれ、新聞記事における識者によるコメントであるが、類似した文脈において、それぞれ「だろう」と文末表現「と思う」が使われている。

- (1) 今後の日本の観光振興のためにも、世界遺産登録を機にもっと富士山を売り出していくべきだし、日本が環境先進国だと再認識してもらい、良い機会になるだろう。(富士の街、絶頂 「観光に弾み」「官民で整備」 世界遺産登録へ 朝日新聞 2013年05月01日 夕刊 1社会011)
- (2) TPPは、県内農業を活性化する議論を深めるためにもいい機会になると思う。(地方分権・経済戦略・国際関係…3問題、識者に聞く 衆院選／秋田県 朝日新聞 2012年12月15日 朝刊 秋田全県・2地方022)

同じ「良い機会になる」という表現に続いて、「だろう」、文末表現「と思う」とも使用されており、このような場合には、「だろう」、文末表現「と思う」は、発話者（もしくは執筆者、編集者）がその時に伝えたいニュアンスにより選択されている可能性が高い。

もちろん、両表現が代替可能であるとはいえ、意味以外の面でも完全に等価であるというわけではない。例えば吉田（1971）は、助動詞のかわりに「と思う」「気がする」「に違いない」等の表現を用いることについて、下記のように述べている。

単なる代償ではなくて、この方が叙述が的確で、意味色彩（ニュアンス）を豊かに出すことができる。そのような利点から、表現の軽微に感じられる辞だけに依存せずに、詞の連合によって辞の職能を負わせる傾向があるのである。（p.63）

このように、ニュアンスの違いを重視して「だろう」および文末表現「と思う」という表現の選択が行われていることもあろう。

一方、いずれかの表現しか使えない場合については、森山（1992）や宮崎（2001）等が、記憶再生の例について言及している。森山（1992）は、文末表現「と思う」は使えるが、助動詞「だろう」は使用できない場合について、次のように述べている。

話し手が直接確認できたようなことであって、かつ、確実なこととして断定しがたいこと（例えば、記憶が不確かな場合など）であれば、『だろう』などの推量の形式を使って表現することができず、その代わりに、『と思う』しか使えないことになる。（p.108）

以下は、森山（1992）にあげられた例である。

（3） 確か、その日は日曜日だったと思う。

（4） ? 確か、その日は日曜日だったに違いない／だろう。（p.108）

上記の例について、森山（1992）は『『確か』には、単に不確実なことを表すというのではなく、もともと確実に把握されていたことを不確実なこととして取り上げるという用法がある』（p.108）と説明しており、（4）に比べ（3）の方が自然であることが明らかである。

また、以下は、宮崎（2001）にあげられた、「と思う」が「だろう」に置き換えられないとされる<記憶再生>の例である。

（5） たぶん、一月二十一日の朝だったと思います。（p.116）

古典語の推量の助動詞が衰退し、「だろう」が推量の助動詞の主なものとなっていくにあたり、推量の助動詞という枠では担われなくなった「記憶再生」の表現については、文末表現「と思う」がその一端を担う形で使用されるようになったとみてよいと考える。しかし、文末表現「と思う」の発達以前には、どのような助動詞が「記憶再生」を表す際に用いられていたのであろうか。これを端緒とし

て、推量の助動詞の衰退と、文末表現「と思う」の発達との関係を検討してみたい。

### 3. 近代以前の「記憶再生」の用例の検討

日時（年、日付、時間帯等）についての不確かな記憶について、文末表現「と思ふ」を用いて述べている例は、以下のように、既に近代語の資料にもみられるものである。

- (6) 私ハ委イ月日ハ思ヒ出セマセヌガナンデモ先月ノ末ダト思ヒマス  
I am not able to recall the exact date, but I fancy it was the end of last month. (『語学独案内』 p.181)
- (7) それから中二日置いて丁度三日目の午後だったと思う。先生と掛茶屋で出会った時、先生は突然私に向って、「君はまだ大分長く此所に居る積りですか」と聞いた。(『こころ』 1)
- (8) これは私の十六、七のころと思います。(『福翁自傳』 p.20)
- (9) ところがまた不幸な話で、九月の十日ごろであったと思う。(『福翁自傳』 p.47)

しかし、近世以前には、そもそも推量表現のように用いられる文末表現「と思ふ」の用例が少なく、「記憶再生」を表す際に、文末表現「と思ふ」を用いた例は見出だし難い。そこで、近世以前の「記憶再生」にあたる例として、主に日時についての不確かな記憶を述べているとみられる例を調査したところ、「日時+なるべし」「日時+にや」「日時+おぼゆ」の形がみられた。いずれも、前掲の(3) および(5)～(9)に類似した形式であり、現代語では文末表現「と思う」に置き換えが可能なものであろう。

#### ■ 「日時+ (なる) べし」

- (10) 八月朔日ころなるべし。君ひとり臥し寝も寝られぬままに、「母君、我を迎へたまへ」と、「わびし」と言ひつつ、(略) (『落窪物語』 p.22)
- (11) さて、御簾をかかげて人の入らむやうに御簾はたらきて、懸りたる御正体の鏡ども鳴りあひて、みな揺るぎてひさし。その時、驚きて去りぬ。寅の時なるべし。(『梁塵秘抄』 p.372)
- (12) 己丑の春、正月十日に、大喪の御事聞えて、明日は人々皆西城に参るべき由を告來れり。我も明る十一日に参る。(略) 十七日に、大錢を廢せらるゝの由仰出さる。此夜、又雨降りて曉に至る。人々の宅地、町々等を他所に引移さるゝ事共のやみしも此比の事なるべし。(『折たく柴

■「日時+にや」

- (13) そののち、日を経てまた参りし時に、五月四日の事にやありし。其日はたしかにおぼえず。詮房朝臣仰をつたへて、「前代に一位の御方に御臺の参り給ひしに、舞妓の事ありて、「つれ〜慰ミ給はむに、これらの事なに事かあるべき」と仰られしによりて、其後一位の御方または大御臺所のこなたに渡り給ひしには、この事ありし例によりて、我代ののちも、子どもの母の御臺をもてなしまいらするにも、また御臺のかれらをもてなし給ふにも此事ありて、申す所のごとくに、太閤をもてなされしためにも、また此事ありし也。(『折たく柴の記』 p.295)
- (14) 十月十四日の暮過るほどにや、事きれさせ給ひぬらむ。明けの日、人〜参りつどみぬるに、御遺書を出されしかば、聞く人皆袖をぞしぼりたりける。(『折たく柴の記』 pp.318-319)
- (15) 日〜風雲に座して、ことし仲秋の三日、由井・金沢の波の枕に月をそふとて、鎌倉に杖を引、そのかへるさより心ちなやましようして、終息たえぬ。廿七日の夜の事にや。七十年の母に先立、七才の子に思をのこす。(「悼松倉嵐蘭」『松尾芭蕉集』 p.368)

この「にや」は、「にやあらむ」の約であり、疑問中止構文による表現も用いられていたことがわかる。なお、現代語でも次の例のように、「記憶再生」の文脈で「だったでしょうか」「だったか」「であったでしょうか」のような疑問中止の形を用いることがある。

- (16) そうしたら父が「お前が行け」と。私が「何でや」と反発したら、「お前はよく飯を食うからな」と言いましたね(笑)。昭和30年(1955年) だったでしょうか。家を出る時、母親が竜の絵が描いてある清水焼の鉢のような大きな白い茶わんを1個持たせてくれました。("ワイドインタビュー問答有用/550 「今年の漢字」を揮毫=森清範・清水寺貫主", 週刊エコノミスト)

■「日時+とおぼゆ」

- (17) 末代なればとて、感応空しき事あるべからず。文永の比と覚え侍るなり。(『沙石集』 p.76)

日時についての不確かな記憶について述べる表現として、古くから助動詞による形式だけでなく、文末思考動詞「とおぼゆ」も使われていたため、同じく文末

思考動詞である「と思ふ」がその「とおぼゆ」の機能を引き継いだ可能性もある<sup>28</sup>。

上に挙げた推量の意味の「べし」、「にや」、「とおぼゆ」は、いずれも現代語では使われない形式である。一種の推量表現でありながら、推量の助動詞「だろう」では表現しにくい「記憶再生」を、「と思ふ」を中心とした文末思考動詞が担うようになったと考えられる。

#### 4. 助動詞「べし」と文末思考動詞の類似性

「記憶再生」の表現として使われていた表現のうち、古典語の助動詞「べし」について、さらに検討してみたい。古典語「べし」については、阪倉（1969）、中西（1969）、吉田（1971）、川村（2002）、佐田（2004）等、多くの研究がなされている。

佐田（2004）は、古典語の助動詞「べし」がカバーする意味範囲の広さについてふれ、「べし」の衰退にともなう対応形式の出現について、次のように述べている。

古代語「べし」などのあらわした意味は、何らかの形で近代語の他の諸形式であらわされる筈である。このように考えるとき、古代語の一語形に対応する近代語の諸形が成立することは、同時にその語、あるいはその語のもつ、ある用法の欠落を予定しているということができよう。

ただし、対応語形が古代語形のもつ意味領域と全く一致するとは限らず、おおむね用法の一部が重なるという形をとる。これは時代を追って現れた傾向である。いわゆる分析的傾向及び客観的傾向に従って現れる形式であり、いわゆる「詞」的特徴を多く備えたものである。逆にいえば、このような傾向がまた古代語形を衰退においやるという見方も可能である。（pp.274-275）

また、衰退した「べし」に対応する近代語の語形として、「さうな」「はず」等をあげている。「さうな」については、その出現時期における用法を考察した上で、「『べし』の分担すべき意味がかなりサウナでカバーされているように見える」

---

<sup>28</sup> もちろん、第4章で述べた通り、文末表現「とおぼゆ」の意味・機能は、直接には、同じく自発の形式である文末表現「と思われる」が引き継いだと考えられる。しかし、近代以降は、自発の形式を伴わずとも、文末表現「と思う」を一種の推量表現として用いることができるようになった。そのことによって、記憶再生を表す際に、文末表現「と思われる」だけでなく「と思う」を使用することも可能となったといえる。これは、文末表現「とおぼゆ」の担っていた機能の一部を、文末表現「と思われる」だけでなく、文末表現「と思う」も引き継いでいることを示す一例であるといってもよいのではないだろうか。

(p.257) とし、「さうな」の出現時期における用法が、『べし』の後退と、併存した『ゲナ』との交渉の上に展開してくる」(pp.271-272) としている。また、「はず」や「つもり」については、『べし』の後退にともなって、その意味の一部を分担すべき語と想定される語である。『はず』は大略一七世紀後半あたりから『予定・道理だ・当然』の意味で『べし』の領域の一端(確信の強い推量として)を担うべき位置にあった。『つもり』は意志を表すが近世後半で、性格的にも『べし』に対応する部分は小さい」としている(pp.257-278)。「べし」に対応する近代語の形式として、文末思考動詞をとりたてることはしていないが、「この他、古代語『べし』にほぼ対応するものとして分析的にあらわれた諸形式は少なくないと思われる。」(p.282)とも述べている。

また、佐田(2004)は、「べし」と「さうな」の対応関係を述べるのが主眼であるため、文末思考動詞については具体的な考察がなされていないが、『あゆひ抄』や『継あゆひ』、『古今集遠鏡』において、「べし」(「べらなり」「べしな」等の形を含む)が「ラレソニ思ハルル」「サウニ思ハルル」「ソニ思ハルルナア」「テシマウデアラウト思ハルル」等に訳出する例をあげている(pp.286-291)。

このように、助動詞「べし」に対応する形式の一つとして、思考動詞による文末表現についても検討しておく必要があるだろう。ここで、佐田(2004)でも言及のあった『古今集遠鏡』における、「べし」および、「べし」から派生したとされる<sup>29</sup>「べらなり」が「と思われる」に訳されている例をみていきたい。

(18) 山高み見つゝわがこしさくらばな風はこゝろにまかすべらなり (p.52)

この歌の後半には、次の口語訳があたっており、「べらなり」に「であらうと思はれる」が対応している。

(19) 風ハアノ櫻ヲ心マカセニスルデアラウト思ハレル

同様に、「べし」「べらなり」の訳に「推量+と思はる」があたっている例が他にもみられる。

(20) けふよりは今こむとしの昨日をぞいつしかとのみ待渡るべき (p.74)

(口語訳) イツカ〜トヒタスラ待テ月日ヲタテサツシヤルデアラウト思ハレル

---

<sup>29</sup> 『日本国語大辞典第二版』「べらなり」の項の語誌にも、「成立については、「べし」と関係づける解釈が一般的で、「清し」から「清らなり」が派生したのと同様に、「べし」から派生したとされる。形態、意味、接続、上接語の傾向などの点で「べし」との類似性が認められる。」とある。

- (21) 秋の夜の月のひかりしあかければくらぶの山もこえぬべらなり (p.76)  
(口語訳) ナンボ闇イクラブ山デモ越ラレウト思ハレル

なお他に、「べし」「べらなり」が、「～に思はる」と、トをともなう形ではないが、思考動詞を用いた表現に訳されている例もみられた。

- (22) いつまでか野べに心のあくがれむ花しちらずは千世もへぬべし (p.54)  
(口語訳) 千年デモ此野デタテウヤウニ思ハレル
- (23) なきとむる花しなればうぐひすもはては物うくなりぬべらなり (p.61)  
(口語訳) 鶯モシマヒニハ鳴トモナウナツタデアラウサウアリソナ事ニ思ハレル

このように、「べし」の口語訳として、「であらう＋と＋思はる」のように、推量表現だけでなく「と思はる」という思考動詞が付され、「べらなり」の口語訳として、「う＋と＋思はる」や「(サウアリソナ事)に思はる」が付されていることから、助動詞「べし」および「べらなり」は、推量の意味に加え、思考動詞に対応するニュアンスがあることがうかがえる。

さて、文語助動詞と現代口語を対比する材料として、第7章で国定国語教科書の例をみた。国定国語教科書の中には、複数の期にわたって使用されている「共通教材」があり、また、内容面ではほぼ同一の単元が、期によって文語文で書かれていたり、口語文で書かれていたりするため、その差異をみることにより、表現の対比が可能になる。

この国定読本の共通教材において、文末思考動詞と助動詞「べし」とが使われている例は、教材「水師營の會見(水師營)」にみられた。この教材は、第二期教科書では文語文・韻文で書かれているが、第五期教科書では口語文・散文で書かれている。両者は、文体は異なるものの、ほぼ同内容の教材である。この教材において、同一と思われる箇所、第二期教科書では「獻ずべし」となっている箇所が、第五期教科書では「さしあげたいと思ひます」にかわっていることが注目される。

- (24) 『我に愛する良馬あり。今日の記念に獻ずべし。』(第二期 卷十 第十二課 水師營の會見)
- (25) 「(略) ついては、今日の記念に、閣下にさしあげたいと思ひます。(略)」  
(第五期 卷十 十二 水師營)

この例は、これまでみてきたような推量の意味ではない。(25)は、「たいと思ひます」となっており、「願望＋と思う」の例である。また、(24)の「べし」も

「自己の行動に関して、強い意志を表わす」(『日本国語大辞典第二版』) 意味で用いられていると考えられ、推量の意味で使われているとは言い難い。これは、推量の意味以外の面でも、助動詞「べし」と文末表現「と思ふ」とに対応関係があることが示唆される事例である。助動詞「べし」の持つ意味用法のうち、推量の用法の一部を文末思考動詞が担うようになったことに加え、「べし」の持つ、意志の用法の一部をも文末思考動詞が担っている可能性がある。

このように、「べし」と文末思考動詞とには、類似性がみられると考えられるが、具体的にはどのような点であろうか。ここで『日本国語大辞典第二版』の「べし」の語誌をみると、下記のような記述がある。

一般に推量の助動詞といわれている。しかし、「べからむ」「べかめり」のように他の推量の助動詞に上接すること、「べかりけり」のように過去の助動詞に上接すること、仮定条件句に生起することなどから考えると、使用者の主体性は希薄で、客体性が濃厚といえ、「む」系の推量の助動詞(「む」「らむ」「けむ」「まし」とは一線を画すと思われる。

この点については、阪倉(1969)にも下記のような記述がある。

すなわち、それは、未だ現実存在してはいないけれども、状況より判断して、もはや実現疑いなし、あるいは、実現に問題なしと考えられる事態について言われるものである。そういう客観的な裏づけをもつ、確信ある推測を、この語はあらわしている。これが、他の助動詞たとえば「けり」「き」「けむ」「らし」「らむ」「む」などとの相互承接において、常にその上位に位置するということは、それだけ、これらよりも詞的な性格の強いことを意味する(略)。また、おなじく推量の助動詞とよばれるもののなかで、「む」「じ」「まし」などが用言の未然形に接続するに対して、これが、「まじ」「らむ」「らし」「めり」とともに終止形に接続することも、このことの表われであろう。

(pp.368-369)

上接・下接という違いはあるが、他の推量の助動詞と共起できる点で「べし」と文末思考動詞は共通しており、いずれも、単なる推量以外の意味を持つ表現であることがわかる。

また、金田一(1953)は「助動詞のうち、『う』『よう』『まい』『だろう』など終止形だけしかないものは話者のその時の心理を主観的に表現するのに用いられるものである」(p.9)としている。

具体的には、「う」およびそれと「似た意義をもつ語で、客観的な表現をする語」(p.10)として「…(する)つもりだ」を比較し、『う』の方は過去における意

志を表わさず、『つもりだ』の方は過去の意志をも表わすことができる」(pp.10-11)とし、『う』の方は、現在話者が意圖している場合にしか使えない。これは、自分がもっている意志を主観的に表示している證據と見てよいと思う。」(p.11)と述べる。さらに、以下のように、話者の心内を(それが主観的なものであっても)客観的なものとして叙述する表現を「客観的な表現」と位置づけている。

他方、「つもりだ」の方は、誰のいつの意圖でも表現できる。これは、その人がその時に意圖をもっているという事実を、客観的に叙述しているからと考えてまちがいなさそうである。すなわち、もし、「つもりだ」を「私は登るつもりだ」と言った場合、それは述べられる対象は自分の意圖であるが、その自分の意圖を客観的に叙述していると考えられることになる。(中略)客観表現であるかどうかのちがいは、材料が客観的なものであろうと、主観的なものであろうと、いちおう客観的なものと考え、そうして叙述するかしないかにある。(p.11)

同様に、主観的表現に用いられる「だろう」と、客観的表現に用いられる「そうだ」とを比較し、『「だろう」は現在の推量しか表わさないが、『「そうだ」は過去の推量をも表わす。』『「だろう」は話者自身の推量しか表わさないが、『「そうだ」は他の人の推量をも表わす。』(p.12)という両者の差異を述べた上で、次のように説明している。

これによって、「だろう」は話者に現在推量されることを主観的に表示する語であるのに對し、「そうだ」の方は、推量される事柄を、「…ト推量サレル状態ニアル」というように客観的な事実として叙述する語であると見られると思う。(p.12)

「べし」が担っていた推量表現のうち、「だろう」ではあらわしにくい範囲というのは、話者が推量しているということを客観的な事実として叙述する、という部分なのであろう。(17)(19)(20)の『古今集遠鏡』の例において、「べし」「べらなり」の訳が「であろう」「う」ではなく、「と思われる」とされているのは、「べし」「べらなり」が単なる推量表現ではなく、「推量+客観的な態度」というようなニュアンスを持つ表現であることを示唆しているといえよう。

また、「と思う」をはじめとする文末思考動詞については、宮崎(1999)が、『「と思う」はそれ自体は思考内容の構成要素ではなく、引用節の内容が話し手の思考であることを外側から注釈する表現であるが、一方、『「ダロウ」は、それ自体が思考内容の構成要素』(p.9)であるとしているが、この「と思う」と「だろう」の差異は、上述の「べし」と「だろう」の差異に相当するものといえるのではない

だろうか。

推量される事柄について、「そのように思考している状態にある」ことを示す文末思考動詞と、「そのように推量される状態にある」ことを示す「べし」とは、いずれも詞的な性格をもつ形式であり、それが両者の共通する点の一つであるといえよう。

## 5. おわりに

古代語から近代語への流れの中で、助動詞による推量表現はその種類を減らし、一方で、助動詞以外の表現で推量をあらわす傾向がみられる。「と思う」を中心とした文末思考動詞も、推量の助動詞の衰退にともない、現代語の助動詞ではあらわしにくい意味を担う形で用いられていることが確認できた。

具体的には、助動詞「べし」、文末表現「と思う」とも、「記憶再生」を表現する際に使用可能であること、自らが思考したことを客観的な事実として叙述するという点において、文末思考動詞と「べし」との間に類似性を認めてよいように思われる。

### 【資料】

『新編日本古典文学全集 17 落窪物語・堤中納言物語』三谷栄一・三谷邦明・稲賀敬二校注・訳（2000）小学館

『新編日本古典文学全集 42 神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集』臼田甚五郎・新聞進一・外村南都子・徳江元正校注・訳（2000）小学館

『新編日本古典文学全集 52 沙石集』小島孝之校注・訳（2001）小学館

『日本古典文学大系 95 戴恩記 折たく柴の記 蘭東事始』小高敏郎・松村明校注（1964）岩波書店

『新編日本古典文学全集 71 松尾芭蕉集 2』井本農一・村松友次・久富哲雄・堀切実校注・訳 小学館

『古今集遠鏡』大久保正編（1969）『本居宣長全集第三卷』筑摩書房

『語学独案内』（1977）ブリンクリ「語学独案内」復刻版刊行委員会 桐原書店  
海後宗臣編『日本教科書大系 近代編』第6巻～第9巻（国語3～6） 1963 - 1964 講談社

国立国語研究所編（1985-1997）『国定読本用語総覧 1～12』三省堂

『新潮文庫 明治の文豪』CD-ROM

富田正文校訂（1978）『福翁自傳』岩波書店

『日本国語大辞典第二版』Japan Knowledge Lib

<http://japanknowledge.com/lib/search/nikkoku/index.html>

聞蔵Ⅱビジュアル 朝日新聞オンライン記事データベース

<http://database.asahi.com/library2/>

『週刊エコノミスト』JapanKnowledge Lib

<http://japanknowledge.com/library/>

## 終章

本論文では、「と思ふ」を中心とした思考動詞による文末表現について、史的観点からその使用状況や機能、位相面や文体面での特徴等を考察した。それにより、文末表現「と思ふ」が推量表現に準ずる用法を獲得していく過程や、思考動詞による文末表現がどのような資料や場面で多く用いられてきたか、「と存ず」「とおぼゆ」「と思はれる」「と考へる」等の思考動詞による文末表現が、それぞれ文末表現「と思ふ」とどのような関連性をもちながら用いられてきたか等について明らかにした。

### 1. まとめ

第1章では、文末思考動詞の中でも最も多用される「と思ふ」の、中古から近代の文学作品における使用状況を概観した。

意志・願望表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」は、中古から存在しており、中世においては、軍記物語を中心に、意志表現をトの内部にとる形式が多くあらわれる点が特徴的であった。推量・疑問表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」は、中古においては推量や疑問の表現を用いた詠嘆的な意味の用例がみられる。中世後期の口語的な資料等で、「うずと思ふ」等の形が出現するようになり、近代になると「だろうと思ふ」等の用例が増加する。判断・叙述表現をトの内部にとる、一種の推量表現として機能する文末表現「と思ふ」は、中古においては用いられていないとよく、中世・近世になると少数ながらみられるようになるが、この用法の文末表現「と思ふ」が多くみられるようになるのは近代になってからである。

すなわち、意志・願望表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」が最も古くに発達し、その後、推量・疑問表現や判断・叙述の表現をトの内部にとる「と思ふ」が発達してきたようである。文末表現「と思ふ」による推量表現は、近代になりその使用が急増していた。また、文末表現「と思ふ」定着後の近代の資料であっても、文語文には文末表現「と思ふ」による推量表現があらわれにくいことも明らかにした。

第2章から第4章では、推量表現に準ずる文末表現「と思ふ」が定着する以前、すなわち近世以前の文末思考動詞の使用状況を調査し、それらの文末思考動詞と文末表現「と思ふ」との差異および、近代に至るまでの使用状況を明らかにすることにより、文末表現「と思ふ」の発達の背景を探った。

第2章では、中世における文末表現「と思ふ」「と存ず」について検討した。文末表現「と存ず」は、基本的には話手が聞き手より低い立場にある場合に多く用

いられ、その際は「候」のような敬語助動詞・補助動詞を伴うことが多い。ただし、話手が聞手と同等以上の立場にある場合や、多数の聞手に向かっての公の場での発言等は、「候」のような敬語表現は必須ではなく、文末表現「と存ず」自体は、公的なあらたまり語としての性格が強い。一方、文末表現「と思ふ」は、使用者が場の上位者であるか、ある程度親密で私的な関係の場合に用いられる表現であった。

この傾向は、特に軍記物語において顕著なものであるが、説話等には文末表現「と存ず」が使用されていない資料もあり、そのような資料においては目上の聞手に対しても文末表現「と思ふ」を使う例がみられた。

また、軍記物語を中心とした中世語資料においては、文末表現「と思ふ」のトの内部の情報は願望・意志に偏っており、主観明示の定型的表現であった。一方、文末表現「と存ず」については同じ資料の中に「意志・願望＋と存ず」「推量・疑問＋と存ず」「判断・叙述＋と存ず」、いずれの用例もみられた。文末表現「と存ず」は文末表現「と思ふ」の謙譲語であるが、文末表現「と存ず」はトの内部に推量や判断・叙述の表現をとる例も多いことから、その用法が文末表現「と思ふ」より広がった。

第3章では、『虎明本狂言集』における「と＋思ふ」「と＋存ず」の形式について検討した。いずれも主として会話文にあらわれる表現であるが、両表現の使用にあたっては、話手・聞手の属性が関与している。基本的には話手の立場が聞手と同等以下の場合には「と＋存ず」が、話手の立場が聞手と同等以上の場合には「と＋思ふ」が用いられる点で、中世軍記物語における文末表現「と思ふ」「と存ず」と同様であった。また、観客への配慮表現として、名乗りや独白等の場面においても「と＋存ず」が用いられることも多かった。

『虎明本狂言集』において、目上の聞手（観客への配慮含む）に対する発話で「と＋思ふ」が少ないのは、「と＋存ず」という謙譲・丁重の形式が多用されている中で、高い立場の聞手に対し、「と＋思ふ」をあえて選択し、使用することがはばかられるためであると推察される。また、「と＋思ひ候」のように丁寧語化された形式は、女性による名乗りや注釈等、限られた範囲にしかあらわれなかった。ただし、文末形式以外の形であれば、「と＋思ふ」を目上の聞手に対して使用しにくいという制限は弱まっていた。男性話者に比べ女性話者は「と＋思ふ」を使用する傾向もみられ、これも「と＋思ふ」の特徴といえる。

なお、軍記物語においては「と＋存じ候」のように、「候」を付した形で目上の聞手への敬意的配慮をあらわすのに対し、『虎明本狂言集』においては目上の聞手に対しても「候」を伴わない「と＋存ず」の形が用いられることが多い等、軍記物語における使用状況とは異なる点もみられた。

第4章では、文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」について検討した。中世まで、文末表現「とおぼゆ」は、その内部に外界の事物についての情報をとる形で用い

られた一方、文末表現「と思ふ」は主として話者自身の心のあり方の情報をその内部にとる表現として用いられていた。しかし、文末表現「とおぼゆ」は、動詞「おぼえる」が記憶の意味に特化していったことに伴い、衰退傾向をみせる。そして、既に多用されていた文末表現「と思ふ」との対応関係が明確な「と思はる」が、文末表現「とおぼゆ」を引き継ぐこととなった。

ただし、文末表現「と思はる」は主に文章語で用いられる表現であるため、より口語的な表現において使われやすい文末表現「と思ふ」が、近代以降その内部に外界の事物についての情報を取り、一種の推量表現としての用法にまで拡大するのを妨げなかった。

このように、文末表現「と思ふ」の拡大と文末表現「とおぼゆ」の衰退とには関連性がうかがえ、中世において文末表現「とおぼゆ」という形式が用いられていたこと、推量表現としての性格は持たないものの、文末表現「と思ふ」が表現形式としては多用されていたこと等、二種の思考動詞表現が分担しつつ発達していたことが、近代以降、文末表現「と思ふ」による推量表現が発達する土台となったと考えられる。そして、文末表現「と思ふ」の発達により、「ゆ・らゆ」「れる・られる」等の自発形式を伴わなくとも文末思考動詞が外界の事柄内容を直接受け、推量の意味を表示できるようになり、また、口語的な表現の中でも、文末思考動詞による推量表現が多用されるようになった。

第5章から第8章では、具体的にどのような資料・文体において文末表現「と思ふ」の発達が見られるのか、また、「と思ふ」以外の文末思考動詞の使用状況がいかなるものであるかについてを明らかにするために、推量表現に準ずる文末表現「と思ふ」が発達した近代における文末思考動詞の状況をみた。

第5章では、福沢諭吉・坪内逍遙・森鷗外による論説における文末表現「と思ふ」の使用状況を調査したところ、共通して、口語文に出現しやすいことがわかった。同じ人物による著作でも、口語文には文末表現「と思ふ」が多くみられたのに対し、文語文にはあらわれず、文末表現「と思ふ」が用いられていた口語文による論説と同じ時期、もしくは後の時期に書かれたものであっても、文語文による論説には文末表現「と思ふ」があらわれにくかった。つまり、近代における文末表現「と思ふ」の出現の多寡は、個人の使用語彙や著作の発表年代よりも、口語・文語という文体の差によるものであった。

文末表現「と思ふ」のト内部の情報別にみると、近代文学作品と同様、判断・叙述や推量・疑問の表現をトの内部にとる例が多くなっていた。

文語文においては、文末表現「と思ふ」が用いられていない一方で、文末表現「と信ず」がいくつかの論説にみられた。このことから、文末思考動詞自体が文語体の文章になじまないというより、文末表現「と思ふ」のもつ、個人的な考えをいわば気軽に表明するという性格のために、文末表現「と思ふ」という表現が硬質な文語文には用いられにくかった可能性がある。

第6章では、洋学資料における文末思考動詞について検討した。もっとも英文との結びつきが強いと考えられる直訳物の日本語において文末表現「と思ふ」の使用が少なかったこと、もっとも自然の会話に近い表現が用いられていると考えられる会話書において文末表現「と思ふ」「と存ず」が多く用いられていたこと、さらに、いずれの資料においても、日本語文における文末思考動詞と英文における“I think”等の思考動詞を用いた表現との結びつきは強いとはいえなかったことから、欧文脈によらず、既に当時、口頭語として「と思ふ」「と存ず」等の文末思考動詞が定着していたとみられる。

このように、推量表現に準ずる文末表現「と思ふ」の定着に関して、洋学資料の影響ははっきりとは認めがたく、文末表現「と思ふ」による推量表現の定着は、欧文脈の影響ではなく、日本語内部の変化がもたらしたものであると考えるのが妥当である。

ただし、文末表現「と考へる」「と想像さる」等は、直訳物の中に比較的多くみられるが、調査の範囲では近代以前の日本語資料にはみられないことから、洋学資料による影響で日本語の中に定着した可能性がある。洋学資料は文末表現「と思ふ」の定着ではなく、「と考へる」「と想像さる」等、文末思考動詞のバリエーションを増やすことに貢献したと考えられる。

第7章では、国定国語教科書における「と思ふ」「と存ず」を中心とした文末思考動詞について検討した。全体的な傾向としては、文末表現「と思ふ」の用例数が期を経るごとに増える一方、文末表現「と存ず」は、現代に近づくにしたがって、用例数が減っていた。

また、文末表現「と存ず」より文末表現「と思ふ」の方が早い巻で提出されることが多く、意志・願望の表現をトの内部にとる文末思考動詞の方が、推量や判断の表現をトの内部にとる文末思考動詞よりも先に提出される傾向がみられた。

文体面では、文末表現「と思ふ」「と存ず」とも、手紙文や会話文に多くあらわれた。また、待遇面では、文末表現「と思ふ」は、第三期までは目上の相手に使用されている例がないものの、第四期以降は目上の相手に対しても用いられていた。これは、現代と同様、文末表現「と存ずる」のかわりに「と思ひます」の形が使われるようになっていった過程を示している可能性がある。

文末表現「と思ふ」の用例が、期を経るごとに増えていることや、文末表現「と存ず」の主な使用場面であった手紙文においても、期を経るにしたがって「と思ふ」が使われるようになっていくことから、国定国語教科書においても文末表現「と思ふ」が重要な位置を占める表現になっている様子がわかった。また、共通教材における文末思考動詞に対応する表現を比較することで、文末思考動詞と「べし」「ん(む)」「でせう」等の助動詞との関わり的一端をみることができた。

第8章では、帝国議会会議録における文末思考動詞の使用状況を検討した。帝国議会会議録には、「と思ふ」「と存ず」「と考へる」を中心に、文末思考動詞が数・

バリエーションともに多くみられた。会議では、自らの意見を述べる場面が多く、文末思考動詞があらわれやすいこと、また、同一話者による発言が長くなった際、文末の表現が単調になることを避けるべく様々な文末表現を使用していることから、他の資料と比べて多くのバリエーションがみられるのだと考えられる。また一方で、文末表現「と認む」等、議事進行に関わる表現として、文末思考動詞がある種定型的に用いられているものもあり、この点は会議録に特有の傾向であった。なお、現代の国会会議録にも、「と思う」「と考える」「と認める」等、帝国議会会議録で多用されていた文末思考動詞がみられた。

また、「と信ず」「と思はる」「と判断さる」等、トの内部に判断・叙述表現をとり、一種の推量表現として用いられる文末思考動詞のバリエーションが多く、文末思考動詞による推量表現が多様化し定着していることがわかった。近代には文末表現「と思う」の推量表現的な用法が定着したのと同時に、「思考動詞による文末表現」という表現形式自体が定着し、現代に至っている。また、文末思考動詞が語彙的に多様化することで、より細かく思考のニュアンスを伝えられるようになっていた。

第9章では、古典語の助動詞の衰退と、文末思考動詞の発達との関連性をみる試みの一つとして、文末思考動詞と助動詞の「べし」との類似点を検討した。

古典語から近代語への流れの中で、助動詞による推量表現はその種類を減らす一方で、助動詞以外の表現で推量をあらわす傾向がみられるのであるが、「と思ふ」を中心とした文末思考動詞も、推量の助動詞の衰退にともない、現代語の助動詞ではあらわしにくい意味を担う形で用いられていることが確認できた。

具体的には、過去の不確かな記憶を述べる場面で使用可能であること、また、自らが思考したことを客観的な事実として叙述するという詞的な性格をもつ形式である点において、文末思考動詞と「べし」との間に類似性が認められる。「べし」の持っていた意味範囲のうち、現代語の推量の助動詞「だろう」では担えない上記のような部分を、文末思考動詞が引き継いでいる可能性がある。

このように、推量表現に準ずる文末表現「と思ふ」が固定化して用いられるようになるのは近代であったが、それ以前にも、文末表現「と思ふ」は主として意志・願望表現を内部にとる形で使用されていた。そして、中世においては、「と存ず」や「とおぼゆ」等の文末思考動詞が、待遇面や機能面で「と思ふ」と役割を分担しながら用いられていた。

しかし、近世頃には、文末表現「と思ふ」と機能面での役割を分担していた文末表現「とおぼゆ」が衰退傾向をみせ、その推量表現としての機能の一端を、近代には「と思ふ」が担うようになった。また、待遇面での役割を分担していた文末表現「と存ず」も、ごく丁寧な場面のみはその使用が限られてくるようになるが、その一方で、文末表現「と思ふ」は「と思ひます」の形で目上の相手に用い

られることが多くなっていった。加えて、文末表現「と存ず」は、中世からトの内部に推量・疑問や判断・叙述の表現をとる形で用いられており、「と思ふ」より用法が広がったが、文末表現「と思ふ」が推量表現としての機能を獲得したことも、「と存ず」のかわりに「と思ふ（と思ひます）」を使うという流れを後押しした可能性もある。

すなわち、文末表現「と思ふ」の発達の背景として、「と存ず」「とおぼゆ」という文末表現があり、待遇面・機能面での役割を分担しながら用いられていたこれらの表現が衰退するに伴い、「と思ふ」がそれらの表現が担っていた役割を担い、使用範囲を拡大させたのである。

近代には、文末表現「と思ふ」が一種の推量表現として用いられるようになっていくが、早くは口語文で書かれた文学や論説、洋学資料の会話書等、口語性の強い文章においてみられる表現であることが明らかになった。また、洋学資料や国定国語教科書、帝国議会議事録といった近代語の資料には、思考のニュアンスを使い分けるために、「と思ふ」の他、「と思はる」「と考へる」「と信ず」等の、トの内部に判断や叙述の表現をとる様々な形式がみられた。「と存ず」「とおぼゆ」という文末表現が衰退傾向をみせる中でも、近代において思考動詞による文末表現が「と思ふ」に一本化されたわけではなく、思考のニュアンスを異にする多くの種類の文末思考動詞が、一種の推量表現として使われるようになったのである。ここに、文末思考動詞による推量表現の発達をみてよい。

このように、近代における文末表現「と思ふ」の使用範囲の拡大は、思考動詞の体系の中で位置づけることができるが、加えて、古典語の推量の助動詞の衰退も、「と思ふ」が一種の推量表現として用いられるようになったことと関連があると考えられる。一例として、文末思考動詞と「べし」との間に類似性を認めてよく、「べし」の持っていた意味範囲のうち、過去の不確かな記憶について述べる場合等、現代語の推量の助動詞「だろう」では担えない部分を、文末思考動詞が引き継いでいる可能性がある。ここに、文末思考動詞による推量表現の発達と、助動詞「べし」の衰退との関連性の一端がうかがえた。

文末表現「と思ふ」による推量表現の定着は、他の文末思考動詞や推量の助動詞の盛衰という、日本語内部の変化がもたらしたものであると考えるのが妥当である。なお、欧文脈等の外的要因は、文末表現「と思ふ」による推量表現の定着には関連していないが、「と考へる」「と想像さる」のような文末思考動詞のバリエーションをもたらすことに貢献していたと考えられる。

## 2. 展望と今後の課題

このように、本論文では、主に中古から近代にかけての、「と思ふ」を中心とした文末思考動詞の使用状況を考察し、それぞれの文末思考動詞の機能や文体的・位相的特徴等を述べるとともに、文末表現「と思ふ」が近代において一種の推量

表現として用いられるようになっていった背景を探った。思考動詞による文末表現の時代別・トの内部別使用状況は、概略としては【表1】のようなものであった。中古から近世にかけては、文末表現「と思ふ」は「意志・願望+と思ふ」の形で用いられ、「とおぼゆ」は「推量・疑問+とおぼゆ」「判断・叙述+とおぼゆ」の形で用いられていた。また、両者の謙譲・丁重の表現として「と存ず」も広く用いられていた。しかし、「とおぼゆ」は近世頃から衰退傾向をみせ、次第に「と思はる」が用いられるようになる。また、「と存ず」も、近代以降、「と思ふ」が推量・疑問や判断・叙述等の表現をトの内部にとるようになったことや、「と思ひます」の形が用いられるようになったことと関連してか、ごく丁寧な場面のみで使用が限られてくるようになった。このような文末思考動詞体系の動きの中で、近代においては、「と思はる」「と考へる」「と考へらる」「と信ず」等、推量・疑問や判断・叙述等の表現を内部にとる文末思考動詞のバリエーションが多くなっている。

【表1】思考動詞による文末表現の使用状況の概略

	意志・願望	推量・疑問	判断・叙述等
中古	と思ふ		
		とおぼゆ	
中世	と思ふ		
		とおぼゆ	
	と存ず		
近世	と思ふ		
		とおぼゆ(→と思はる)	
	と存ず		
近代	と思ふ		
	と存ず(→と思ひます)		
	と思はる／と考へる／と考へらる／と信ず…		

しかし、近代語において種類の増えた文末思考動詞が、現代語においてもそのまま定着しているといつてよいだろうか。例えば、「と信ず(信じる)」については、現代の国会会議録において用例がわずかにみられたものの、日常会話において多く用いられる表現であるとはいいがたく、今後、この表現は全く使われなくなっていく可能性もある。

また逆に、近代までに用いられていなかった文末思考動詞が今後使用されるようになり、文末思考動詞がバリエーションをさらに増やしていく可能性もある。例えば、「と+思考動詞」という形式において、思考のニュアンスにより任意の思

考動詞を「と」と組み合わせ、いわば臨時的に用いることが可能となっているのであれば、その表現が固定化した時、近代語資料においてみられた「と想像する」のような漢語サ変動詞による文末思考動詞も含め、思考動詞による文末表現はさらに種類を増すことになる。

思考動詞による文末表現のバリエーションが、縮小に向かうのか、拡大に向かうのかという動向については、思考動詞による文末表現の全体像を描くにあたり重要な点であり、今後、近代から現代にかけての資料、特に漢語サ変動詞による文末思考動詞が多くみられると予想される硬質な論説文等を中心に、さらに調査し、考察を深めたい。

また、前後の時代である中世や近代に比べ、近世語資料においては文末思考動詞の用例が多く得られなかった背景についても探っていく必要がある。近世においては、文末表現「と存ず」はともかく、文末表現「とおぼゆ」は衰退しはじめており、かつ、推量表現としての文末表現「と思ふ」が発達しているともいいがたい。そのため、現段階では、近世における文末思考動詞の使用状況を明瞭に示すことができていない。調査資料を広げれば近世語資料においても多くの用例が得られるのか、近世においては何らかの要因で文末思考動詞の使用自体が少ないのか、確定するには至っておらず、この点に関してはさらに調査を行う必要があると考える。この点を明らかにすることで、文末表現「と思ふ」が推量表現に準ずる用法を獲得していく姿についても、よりはっきりと描くことが可能になると思われる。その際は、「と思ふ」の形に限定せず、過去形の「と思つた」や否定形の「と思わない」のような思考動詞による文の述べ方についても検討しながら考察を深めたい。

また、日本語においては、本論文で述べてきたような、思考動詞による文末表現のみならず、助詞・助動詞相当の機能をもつ多くの複合形式が古くから用いられていたと考えられる。例えば、中世語資料である『虎明本狂言集』をみると、複合助詞にあたるものとして、「ほどに」（接続助詞相当）「によって」（接続助詞相当）「として」（格助詞相当）等が、複合助動詞にあたるものとして、「で御座る」「て候」「で候」「である」等が多くみられる。このような表現の中には、現代語につながる形式も、特定の時代のみ用いられた形式も存在する。これらの複合形式に関しては、個別の形式についての研究はなされているものの、数量的根拠に基づいた全体像は明らかになっておらず、特に、中世・近世語においては、どのような複合形式が存在するかについても明らかにされているとはいえない。どのような複合形式が多く用いられているのか、それぞれの表現の関係性や発達・衰退過程はどのようなものであるのか等、今後は、このような複合形式について計量的側面からアプローチすることで、日本語において用いられてきた複合形式の全体像を明らかにしたい。そのことにより、辞的な複合形式が固定化したり衰退したりするメカニズム等についても考えたい。

## 参考文献

- 青山學司（1989）「会議録作成に携わって一字句の整理を中心として」『立法と調査』152
- 穂田定樹（1958）「中世の敬讓法—狂言の『申す』『いたす』『存ずる』など—」『国語国文』27-11
- 穂田定樹（1975）「『存ず』について」『大谷女子大学紀要』9
- 浅野裕子（1996）「『と思われる』にみる日英の語用論的原則」『日本語教育』88
- 糸井通浩（1977）「『なりけり』語法の表現価値—『桐壺』『若菜下』を中心に—」『国文学』22-1
- 今泉忠義（1955）「源氏物語の敬語法一つ—『おぼえ給ふ』—」『国学院雑誌』55-4
- 岩下裕一（2002）「『存ず』ノート」『和洋國文研究』37
- 内田浩（2008）「論理的文章の中の『と思う』類と『と考える』類」『日本語・日本文化研究』14
- 内田万里子（2002）「『～と思われる』と『～と思う』をめぐって」『日本語・日本文化研究』9
- 大木一夫（1997）「古代日本語における動詞終止の文と表現意図—テンス・アスペクト的意味を考えるにあたって—」加藤正信編『日本語の歴史地理構造』明治書院
- 岡村裕美（2006）「『思われる』が意味する客観性」『さわらび』12
- 小野正樹（2001）「『ト思ふ』述語文のコミュニケーション機能について」『日本語教育』110
- 小野正樹（2005）『日本語態度動詞文の情報構造』ひつじ書房
- 加藤理恵（1997a）「『と』節を含む文について—『と』節を従属度の観点から整理する—」『名古屋大学人文科学研究』26
- 加藤理恵（1997b）「類義語の分析『思ふ』と『考える』—『と』節内に共起できる要素を中心にして—」『ことばの科学』10
- 川村大（2002）「叙法と意味—古代語ベシの場合—」『日本語学』21-2
- 川本信幹（2010）「日本語ためつすがめつ 第23回 『思ふ』が損なう日本語の論理性—使い方によっては微妙な効果」『月刊国語教育』29-12
- 菊地康人（1994）『敬語』角川書店
- 北原保雄（1982）「動詞性述語の史的展開（3）叙法」川端善明他編『講座日本語学2 文法史』明治書院
- 金田一春彦（1953）「不変化助動詞の本質（上）」『国語国文』22-2
- 小林賢次（1977）「『ベシトモ覚エズ』考」『香川大学国文研究』2

- 小林正行・市村太郎（2013）『虎明本狂言集』コーパスの構造化—仕様と事例の検討—『第3回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』
- 佐伯哲夫（1993）「ウとダロウの職能分化史」『国語学』174
- 阪倉篤義（1969）『べし』『らし』『らむ』『けむ』について 佐伯梅友博士古稀記念国語学論集刊行会『佐伯博士古稀記念国語学論集』表現社
- 佐田智明（2004）『国語意識史研究』おうふう
- 志波彩子（2009）「認識動詞の非情主語受身文—『見られる』『思われる』『言われる』『呼ばれる』を中心に—」『日本研究教育年報』13
- 徐愛紅（1999）「文末思考動詞『思う』の再考」『広島大学教育学部紀要』48
- 杉田くに子（1997）「学術論文における思考判断を表す文末表現の用法—『と思う』と『と考える』を中心に—」『言語文化』34
- 鈴木泰（1992）『古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析—』ひつじ書房
- 鈴木泰（2009）『古代日本語時間表現の形態論的研究』ひつじ書房
- 須田義治（2010）『『思う』と『考える』—その意味・用法について—』『日本語形態の諸問題—鈴木泰教授東京大学退職記念論文集』ひつじ書房
- 砂川有里子（1988）「引用文の構造と機能—引用文の3つの類型について—」『文藝言語研究・言語篇』13
- 曾儀婷（2009）『『と思う』述語文における『私は』の省略・非省略』『ニダバ』38
- 高梨信博（1993a）「国定読本のことば—教材とその時代背景—」『日本文学研究会会報』8
- 高梨信博（1993b）「国語教科書の語彙の変遷」『日本語学』12
- 高梨信博（1997）「国定読本の共通教材における用語の変化—第四期・第五期を中心に—」佐藤喜代治編『国語論究 第6集 近代語の研究』
- 高橋圭介（2009）『『思う』の多義構造再考—文法化の進んだ『と思う』の位置付けをめぐる—』『研究紀要（福島工業高等専門学校）』50
- 高橋太郎（2003）『動詞九章』ひつじ書房
- 高山善行（2002）『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房
- 田中章夫（1965）「近代語成立過程にみられるいわゆる分析的傾向について」近代語学会編『近代語研究第一集』武蔵野書院
- 辻村敏樹（1968）『敬語の史的研究』東京堂出版
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 中右実（1979）「モダリティと命題」林栄一教授退官記念論文集刊行委員会編『英語と日本語と 林栄一教授退官記念論文集』くろしお出版
- 中西宇一（1969）『べし』の推定性—様相と推定と意志—『萬葉』71
- 西田直敏（1974）「平家物語の敬語」林四郎他編『中世の敬語』明治書院

- 西田直敏 (1987) 『敬語』 東京堂出版
- 西田直敏 (1990) 『平家物語の国語学的研究』 和泉書院
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法 2 第3部格と構文 第4部ヴォイス』 くろしお出版
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』 和泉書院
- 藤田保幸 (2014) 『引用研究史論—文法論としての日本語引用表現形式の展開をめぐる—』 和泉書院
- 升岡香代子 (2008) 『『筆者の思考や意見を表す文末表現』についての一考察』 『言語と交流』 11
- 松田謙次郎編著 (2008) 『国会会議録を使った日本語研究』 ひつじ書房
- 松村明 (1970) 『洋学資料と近代日本語の研究』 東京堂出版
- 三上章 (2002) 『構文の研究』 くろしお出版
- 三宅清 (1996) 「源氏物語における『～らむと思ふ』」 『国語研究』 60
- 宮崎和人 (1999) 「モダリティ論から見た『～と思う』」 『待兼山論叢』 33
- 宮崎和人 (2001) 「動詞『思う』のモーダルな用法について」 『現代日本語研究』 8
- 村上昭子 (1993) 『『大蔵虎明本狂言集』における終助詞『ばや』について』 小松英雄博士退官記念日本語学論集編集委員会編 『小松英雄博士退官記念日本語学論集』 三省堂
- 森岡健二 (1999) 『欧文訓読の研究：欧文脈の形成』 明治書院
- 森山卓郎 (1992) 「文末思考動詞『思う』をめぐる一文の意味としての主観性・客観性—」 『日本語学』 11-9
- 森山由紀子 (2003) 「謙讓語から見た敬語史、丁寧語から見た敬語史—『尊者定位』から『自己低位』へ—」 北原保雄監修・菊地康人編 『朝倉日本語講座 8 敬語』 朝倉書店
- 諸星美智直 (1986) 「国語資料としての帝国議会議事速記録—当為表現の場合—」 『国學院大學大学院紀要』 17
- Yokomizo, Shinichiro (1998) “Believing, Wanting, and Feeling : Three Representational Modes of Embedded Propositional Contents” 『世界の日本語教育』 8
- 吉田金彦 (1971) 『現代語助動詞の史的研究』 明治書院
- 李淑姫 (2006) 「虎明本狂言集における『ウと思う』の用法—推量・意志の助動詞「ウ」との比較—」 『日本學報』 68
- 劉笑明・吉田則夫 (2005) 「『思う』述語文の機能について」 『岡山大学教育学部研究集録』 129
- 柳椿姫 (1996) 『『おぼゆ』考—『源氏物語』を中心に—』 『日本語と日本文学』 22
- 渡邊ゆかり (2010) 「国会会議の発言中に現れる意向・意見・見解表明文の変遷

—『と思います』『という {ように／ふうに} 思います』の交替— 『国語国  
文学誌』 40

## 既発表論文との関係

本論文では、下記全ての論文に対して加筆・修正を行なった。また、序章・終章および第6章・第9章は書き下ろしである。

序章 (書き下ろし)

第1章 文末表現「と思ふ」の通時的展開  
「と思う」による文末表現の展開 (『早稲田日本語研究』16 2007年3月)

第2章 中世における文末表現「と思ふ」と「と存ず」  
中世における文末表現「と思ふ」と「と存ず」 (『早稲田日本語研究』20 2011年3月)

第3章 『虎明本狂言集』における「と+思ふ」と「と+存ず」  
『虎明本狂言集』における「と思ふ」と「と存ず」——『日本語歴史コーパス』を利用して—— (『国立国語研究所論集』9 2015年7月)

第4章 文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」の史的変遷  
文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」の史的変遷 (『日本語文法』15-2 2015年9月)

第5章 文末表現「と思ふ」の口語性—近代の論説文を中心に—  
「と思う」による文末表現の口語性—近代の論説文を中心に— (『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第3分冊』52 2007年2月)

第6章 洋学資料における文末思考動詞  
(書き下ろし)

第7章 国定国語教科書における文末思考動詞  
国定国語教科書における文末思考動詞 (『日本語学研究と資料』35 2012年4月)

第8章 帝国議会議録における文末思考動詞  
帝国議会議録における文末思考動詞 (『早稲田日本語研究』23 2014)

年 3 月)

第 9 章 文末思考動詞と推量の助動詞—「べし」を中心に—  
(書き下ろし)

終章 (書き下ろし)